学校法人国士舘

令和元年度　スポーツ庁委託事業
「大学スポーツ振興の推進事業（大学スポーツアドミニストレーター配置事業）」

国士舘大学
成果報告書

国士舘スポーツプロモーションセンター

令和元年度　スポーツ庁委託事業
「大学スポーツ振興の推進事業（大学スポーツアドミニストレーター配置事業）」

国士舘大学　成果報告書

目　次

はじめに …… 3

1. 国士舘スポーツプロモーションセンターの取り組み …… 4

（1）ビジョン・ミッション…… 4

（2）組織…… 4

（3）取り組み…… 5

2. 大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施 …… 6

（1）趣旨…… 6

（2）事業のポイント…… 7

アクションプランA.
大学スポーツの安全・安心の確立に資するプラットフォーム構築事業 …… 8

（1）緊急時行動計画（EAP）の策定・普及の推進（EAP推進事業）…… 8

（2）メディカルサポート体制の構築（メディカルサポート事業）…… 12

（3）スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステムの確立（スポーツ傷病レジストリー事業）… 16

（4）アクションプランA　総括…… 19

アクションプランB.
スポーツ倫理・教育に関するワークショップの開催及び教育プログラムの開発事業 …… 21

（1）スポーツ倫理・教育に関するワークショップの開催…… 21

（2）在学生アスリートを対象としたスポーツ倫理・教育プログラムの開発・普及…… 24

（3）アクションプランB　総括…… 34

3. 今後の展望について …… 36

（1）「国士舘スポーツ」の展望 …… 36

別　紙

別紙１　業務日誌

別紙２　救急車・資器材表

別紙３　救護対応記録表

別紙４　救護活動検証記録

別紙５　学生アスリートのスポーツ倫理教育推進に向けたシンポジウム

はじめに

令和元年度にスポーツ庁から委託を受けた「大学スポーツ振興の推進事業（大学スポーツアドミニストレーター配置事業」の成果報告書の取りまとめに当たり、お忙しい中、外部評価委員並びにA事業及びB事業への協力者をお引き受けいただいた学識者の方々に対して、心より感謝申し上げます。

特に、B事業におけるシンポジウムの基調講演をお引き受けいただいた鎌田薫大学スポーツ協会（UNIVAS）会長、シンポジストとしてご参加いただいた増井参事官（スポーツ庁）、友添理事・教授（早稲田大学、UNIVAS理事）、北川編集委員（日本経済新聞社）の各位におかれては、プログラムの成功に、大変お世話になりました。この場をお借りして、改めて、御礼の言葉を申し上げたいと存じます。

お蔭をもちまして、平成30年10月に発足した「国士舘スポーツプロモーションセンター」においては、安全安心、スポーツ倫理、事業開発、競技力向上等の各分野の事業を着実に推進することができました。特に、スポーツ庁委託の先進的モデル事業である「大学スポーツの安全・安心の確立に資するプラットフォーム構築事業」及び「スポーツ倫理・教育に関するワークショップ開催及び教育プログラムの開発事業」に関しては、計画通り、すべての目標を達成することができ、その成果は、大学スポーツ協会（UNIVAS）の加盟大学における安全安心及びスポーツ倫理の実践に、広く活用できるものと考えております。

ここに、標記事業の実施に、ご理解、ご指導をいただきましたスポーツ庁を始めとする関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和2年3月19日

国士舘スポーツプロモーションセンター
チーフ・スポーツ・ディレクター　**大澤　英雄**

1 国士舘スポーツプロモーションセンターの取り組み

(1) ビジョン・ミッション

「国士舘スポーツプロモーションセンター」は、平成30年10月1日付で、本学園のスポーツに関わる諸活動を一体的に総括する組織として、学校法人国士舘に設置された。この組織は、スポーツを重要な経営資源と捉えて、大学スポーツ環境の一層の向上をビジョンに掲げ、標記のミッションに全学横断的に取り組んでいる。

図2　ビジョン・ミッション

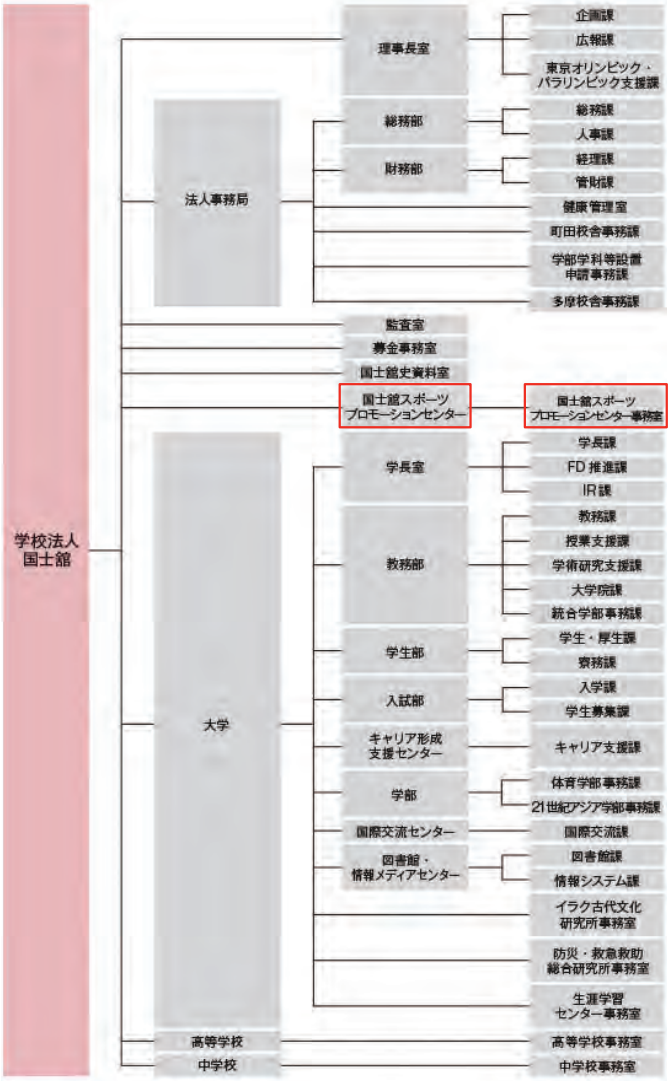


図1　学校法人国士舘事務組織図

(2) 組織

① スポーツアドミニストレーター

スポーツアドミニストレーター(SA)は、ワーキンググループごとに、ディレクター、マネージャー及び担当スポーツアドミニストレーターを配置し、チーフ・サブチーフを含めて、現在11人となっている。事業計画の企画調整のみならず、担当する業務の遂行にも直接従事している。

② ワーキンググループ

各分野の業務を推進するため、安全・安心、スポーツ倫理・人格形成・キャリア支援、事業開発・マネジメ

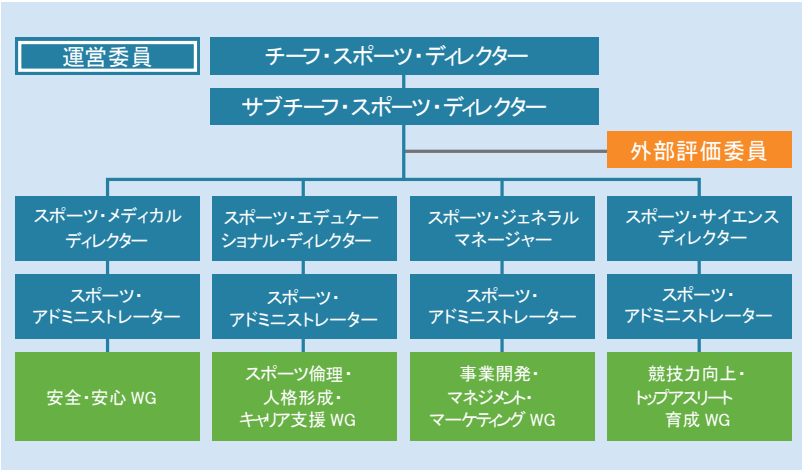


図3　組織体制図

ント・マーケティング、競技力向上・トップアスリート育成の４つのワーキンググループ（WG）を設けている。

③ 運営委員会

当該センターの運営に関する重要事項を審議する会議体として運営委員会を設置している。運営委員会はチーフ・スポーツ・ディレクター、サブチーフ・スポーツ・ディレクター、並びに各WGディレクター・マネージャー及び担当スポーツアドミニストレーターで構成しており、毎月、定例的に開催している。

④ 外部評価委員会

当該センターでは、客観的な評価に基づく事業展開を図るため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員２人（日本体育大学の阿江通良教授、日本サッカー協会の山本昌邦氏に委嘱）を置き、毎年度の評価結果報告を踏まえて、チーフ・スポーツ・ディレクターが改善措置を講じる仕組みを整えている。

(3) 取り組み

４つのWGでは、下記の図のとおり各専門分野の事業を推進している。

競技力向上・トップアスリート育成WG

- 運動部対象のフィットネスチェック実施体制の整備
- 運動部対象のコンディショニング管理ソフトの試行的導入
- コーチングサポートツールの整備計画
- 指導者研修補助制度の制定
- エリートアカデミープログラム

スポーツ倫理・人格形成・キャリア支援WG

- 学生アスリート・指導者対象のスポーツ倫理・教育プログラム
- 学生アスリート対象の学業・キャリアサポート（計画中）
- 「スポーツとSDGs」に関するプロジェクト
- 日本オリンピックミュージアムの事業への協力

事業開発・マネジメント・マーケティングWG

- 国士舘スポーツチャンネル
- ネーミングライツ・商標活用による収益確保の確保
- 地域住民を対象としたスポーツ講座・教室等の実施
- 国士舘アスリートノートの検討

安全・安心WG

- メディカルサポート（試合中・練習中の救護体制構築）
- エマージェンシーアクションプラン（EAP）プログラム
- スポーツ・ファーストレスポンダー（SFR）育成プログラム
- 事故・傷病レジストリ

図４　事業内容

2 大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施

（1）趣旨

今年度は、昨年度の事業の実績・評価を踏まえ、UNIVAS加盟大学等のモデルとなる成果を目指して、次の発展的課題に取り組むこととした。

【アクションプランA】

大学スポーツの安全・安心の確立に資するプラットフォーム構築事業

○　緊急時行動計画（EAP）の策定・普及の推進

○　メディカルサポート体制の構築

○　スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステムの確立

【アクションプランB】

スポーツ倫理・教育に関するワークショップの開催及び教育プログラムの開発事業

○　スポーツ倫理・教育に関するワークショップの開催

○　在学生アスリートを対象としたスポーツ倫理・教育プログラムの開発・普及

図5　事業概要

(2) 事業のポイント

アクションプランAは、昨年度の成果を踏まえ、大学スポーツの安全・安心に関するガイドラインの重要項目となる緊急時行動計画(Emergency Action Plan　以下、EAPという)の策定・普及の促進、スポーツ系クラブの練習中の事故・怪我等に対応するためのメディカルサポート体制の構築、スポーツ中の傷病・処置等の情報を一元的に収集・解析するレジストリーシステムの運用を行い、大学スポーツの安全・安心の確立に資するプラットフォーム構築を目指すものである。

また、アクションプランBでは、昨年度行った先進大学へのアンケート調査の結果を踏まえ、ワークショップを開催し、具体的な取り組み、今後の展望と課題について意見交換を行う。また、昨年度の成果であるスポーツ倫理・教育プログラムを基盤に、より発展的な内容からなる在学生アスリート向けのe-ラーニングプログラムの開発・普及を目指すものである。

以上のように、本事業は、安全・安心の側面から学生アスリートのキャリア形成を支援するとともに、倫理・教育の側面からスポーツ教育の推進を図ることを目的としている。併せて、大学の有する資源を最大限に生かし、スポーツ医科学及び教育学の研究成果を広く社会に還元しようとするものである。

アクションプランA.
大学スポーツの安全・安心の確立に資するプラットフォーム構築事業

（1）緊急時行動計画（EAP）の策定・普及の推進（EAP推進事業）

学生アスリートが試合中又は練習中に傷病等を負った際、スポーツ関係者が適切な行動を取るためには、あらかじめ平時において、チェックリストに当たる緊急時行動計画（Emergency Action Plan（以下、EAPという）を策定しておくことが必要である。

この事業では、昨年度事業の成果である「EAP作成ガイドブック」及び「EAPテンプレート」を踏まえて、実施可能なEAPの検討・策定、策定されたEAPの実施体制の構築、EAPの運用・実施、課題の抽出・改善のPDCAサイクルを確立するとともに、人材育成の観点からEAP研修会の実施及びEAPの評価・フィードバックができる体制の整備に取り組むこととし、国内スポーツ団体等へのEAPの普及を促進することを目的とした。

① スポーツ系クラブ対象のEAP研修会の実施

部活動中（試合・練習中）に怪我・事故が発生した際、EAPに基づいて、そのクラブが適切な行動が取れるようにするために、学内のスポーツ系クラブ（34クラブ）の主将が集まる主将会議（10月4日開催）において、EAP研修会を実施した。研修会では、「EAP作成ガイドブック」を用いてEAPの基礎的な内容（必要性、作成方法等）を説明し、各クラブの練習場付近のAED・救護器材の設置場所（図面）、緊急時の連絡先リスト（人・場所）、近隣医療機関の情報、救急車進入・搬送に必要な情報等を記した「EAPテンプレート」をもとに、クラブの環境に基づいて、それぞれのEAP案を作成させた。

各スポーツ系クラブが策定したEAP案の評価・改善点を抽出し、それをフィードバックするため、EAP作成チェック表を作成

写真１　EAP研修会の様子

写真２　EAPを作成している学生

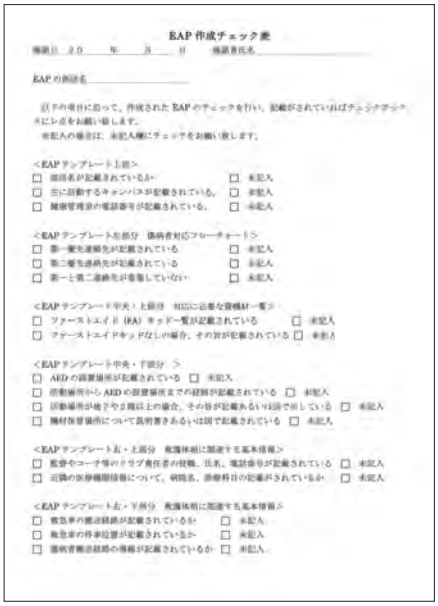


図６　EAP作成チェック表

図７　ラグビー部EAP

した。各クラブにより記入・提出されたEAP作成チェック表をもとに、記入漏れなどを確認し、内容の修正・改善を検討した。その結果を、再び開催した主将会議において、各クラブに配付し、それぞれ修正・改善箇所を確認した上で、各クラブにEAPを策定させた。完成したEAPは、当該センターで見やすく分かりやすく編集し、各クラブに配付した。

② EAP指導者の育成

a) EAPプログラムの検討

今年度、ワシントン大学を訪問し、EAPの取り組みについて調査した結果、AT及びチームドクターがEAPの作成を担当しており、AD局のメディカル部門を統括するメディカルディレクター（医師）が作成されたEAPの評価を行っている。しかし、ワシントン大学を含めた米国の大学では、学生アスリートやマネージャー等がEAPの実態を把握していないことが課題として挙げられていた。

本学では、米国の大学でのEAPの取り組みや課題を参考に、EAPの作成後、学生アスリートやマネージャーが主体的に管理・運用することで、クラブ活動の安全管理に対する意識の向上を図り、各クラブ関係者全員がEAPを理解・共有し、有効活用できるようにするため、さらには、国内で未だ認知度の低いEAPの必要性を、本学から発信し普及するために、学内資格である「EAPプログラム」を検討した。

EAPの策定・普及を促進するためには、EAP策定の支援ができる指導者を育成する必要があることから「EAPアドバイザープログラム」及び「EAP指導アドバイザープログラム」を開発し、実践した。これに対し、「EAP研修会」はEAPを作成するための基礎的な知識、必要性、作成方法等を学び、実際にEAPを作成するもので、クラブ活動に関わるスタッフであれば、誰でも受講することが可能である。以上の3つをまとめて、「EAPプログラム」と称している。

図8　EAPプログラム

EAPアドバイザープログラム

EAPアドバイザーは「スポーツ現場で起こりうる事故・怪我等についての知識を持ち、チーム内のEAPの作成・管理ができる者」と定義し、実施可能なEAPの検討・作成、作成したEAPの体制を構築するための準備・実施、実施後の課題の抽出、EAPの改善、というEAP体制構築のPDCAサイクルの管理並びに指導を担う。

EAPアドバイザーは、当該センターオリジナルの認定資格で、EAPアドバイザープログラムの講習会を修了すると認定される。当プログラムへの参加には、①EAP研修会の受講、②ベーシックSFR（当該センターの応急手当講習会）の認定（同等の資格も可）が必要である。

EAP指導アドバイザープログラム

EAP指導アドバイザーは「スポーツ現場で起こりうる事故・怪我等についての知識を持ち、EAPを広く普

及するための説明及びEAPの作成指導ができる者」と定義し、EAP研修会の講師を担う。

EAP指導アドバイザーは、当該センターオリジナルの認定資格で、EAP指導アドバイザープログラムの講習会を修了し、EAP研修会での指導を行うと認定される。当プログラムの参加基準は、EAPアドバイザーの認定である。

「EAPプログラム」を実施するため、各プログラムのガイドブックを作成した。EAP研修会で使用するガイドブック「EAP作成ガイドブック」は、昨年度作成した内容をブラッシュアップし、第2版を発行した。また、EAPアドバイザープログラムの講習会向けガイドブック「EAPアドバイザーガイドブック」は、作成したEAPを有効活用するための具体的な内容を加えた。さらに、EAP指導アドバイザープログラムの講習会向けガイドブック「EAP指導アドバイザーガイドブック」では、EAP研修会での指導ポイントをまとめた。これらのガイドブックは、昨年度米国NCAAに加盟しているテキサス大学の視察により知り得たEAPの意義や必要事項等に関する情報を基に、日本国内や本学の状況に合わせ必要な項目を検討するとともに、元消防職員等への聞き取りにより作成したものである。国内では、EAPが十分に普及しておらず、作成のための参考書となるものについてもほとんど見られないことから、これらのガイドブックは、本学はもちろんのこと、他大学、ひいては国内のスポーツ団体やスポーツ施設においてもEAP作成の参考書になりうるものであると考える。

b) EAPプログラムの実施

写真3　EAPアドバイザープログラム講習会

EAP研修会は上述したとおり、スポーツ系クラブ対象の主将会議で行った。EAPアドバイザー及び指導アドバイザープログラムの実施にあっては、2月のリーダーズキャンプ及び3月の主将会議において、クラブ所属の学生を対象に実施する予定であったが、新型コロナウィルスの国内の状況を鑑みて、中止となった。その代替えとして、今回は学生を対象とせず、本学の職員を対象に実施することとなった。EAPアドバイザープログラムの講習会は、2月19日、3月10日に開催し、本学職員3名が受講し、EAPアドバイザーに認定した。さらに、EAP指導アドバイザープログラムの講習会は、2月19日、3月10日に開催し、修了したEAPアドバイザー1名が3月10日にEAP研修会で指導を行い、EAP指導アドバイザーに認定された。

③ 評価

EAP研修会をスポーツ系クラブ対象の主将会議で行ったことから、全てのスポーツ系クラブがEAP研修会に参加し、さらにはEAP作成チェック表を用いて内容の修正・改善を行えたことから、全てのスポーツ系クラブで実践的なEAPの作成ができたものと考えられる。EAP指導アドバイザーの養成は新型コロナウィルスの影響で、集合型研修が中止となり、クラブリーダーズキャンプ（2月開催予定）、主将会議（3月開催予定）が実施できず、1名の養成に留まった。

また、各プログラムの受講者を対象に、内容の評価及び改善点に関するアンケート調査を行った。具体的な改善点等の意見は、次のとおり。

EAP研修会　受講者からのフィードバック

- 研修会の内容を映像化して、e-ラーニングで受講できるシステムになれば、この研修会を広く普及できるのではないか。
- この研修会は、EAPを作成することが目的だと思うので、EAPの概要及び作成する上での説明だけでもいいと思った。
- 研修会の時間が長い（約60分）。
- スポーツ系クラブ対象となっているが、他の課外活動クラブの学生や学内の教職員が受講してもいいと思った。
- EAPのマップ作成で、傷病者の搬送経路を事前に決めるのが難しい。
- テンプレートをもっと簡潔に見やすくしてほしい。
- EAPを作成したのはいいが、どのようにクラブ内で共有すればいいのか、具体的なアドバイスをもらえるといい。
- ガイドブック（第1版）にEAPの概要を分かりやすく載せてほしい。また、キャンパスの避難経路マップがあるといいと思った。

EAPアドバイザープログラム　受講者からのフィードバック

- このプログラムとEAP研修会の内容をもっと区別した方がいい。例えば、EAP研修会はEAPの必要性と作成に留めて、当プログラムではEAPを作成した上で、有事の際に適切な行動を取るために知っておくべき情報とその行動計画、試合中の救護体制、EAPのPDCAサイクルなどを中心に説明していくのはどうだろうか。
- アドバイザーの役割が明確ではない気がした。このプログラムを受講して、現場に戻って具体的に何をすればいいのか説明があるといい。EAP研修会を受講したものとアドバイザーで何が違うのかをはっきりさせないと、受講者を増やすことは難しいのではないか。
- ガイドブックについて、資器材やフローチャートの内容は、医学的な知識を十分に持っていないと理解できないと思った。
- 講習会では、ガイドブックとは別に、講習会用のスライドがあると分かりやすくなると思った。

EAP指導アドバイザープログラム　受講者からのフィードバック

- ガイドブックの説明ポイントをもっと増やしてほしい。また、具体例をもっと記載してほしい。
- EAP研修会で指導する上で、医学的な根拠（除細動の時間等）について、医療従事者ではない者が説明することの不安を感じた。

以上の評価・改善点を踏まえて、次年度に向けて、各プログラムのガイドブックの改善や動画教材の作成等を行い、スポーツ系クラブのすべての指導者及び学生アスリートのEAP研修会の受講、各スポーツ系クラブに最低1名のEAPアドバイザーの認定、さらに学外への「EAPプログラム」の提供を目標に、事業を発展させていくこととする。

(2) メディカルサポート体制の構築（メディカルサポート事業）

キャンパス内の部活動中の事故・怪我等に対応するため、地域医療機関の協力体制の下、学内（多摩キャンパス）にメディカルサポート体制を構築し、受傷した学生アスリートの救命及び症状の悪化軽減（早期競技復帰）を図ることを目的とし、以下の内容を実施した。

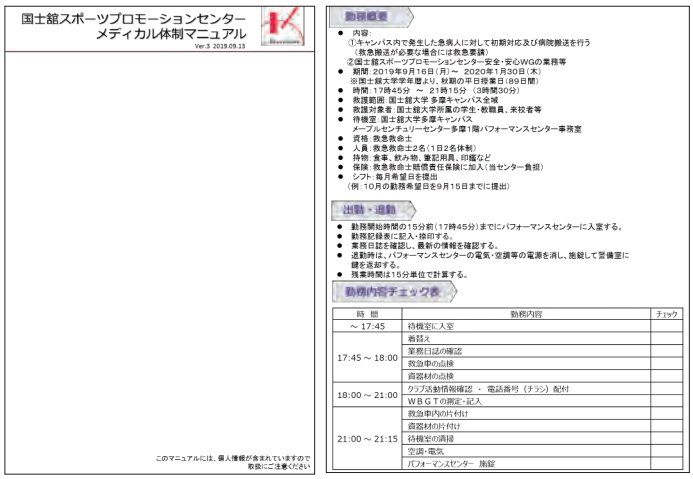
内容：国士舘大学多摩キャンパス内で発生した傷病人に対して ①初期対応 ②救急要請 ③病院搬送を行う。
期間：2019年9月16日（月）～2020年1月31日（金）
※国士舘大学学年暦より、秋期の平日授業日（90日間）
時間：18：00 ～21：00
※キャンパス内の健康管理室（医務室）の閉室以降（18時閉室）
対象：①多摩キャンパス内で活動するスポーツ系クラブ（15クラブ）に所属する者
②国士舘大学の教職員・学生
③来校者等
人員：救急救命士　2名（1日2名常駐）、当該センター事務員1名
保険：救急救命士賠償責任保険に加入
待機場所：
国士舘大学多摩キャンパス メイプルセンチュリーセンター多摩 スポーツパフォーマンスセンター内

① メディカルコントロール体制の構築

a) メディカル体制マニュアル等の作成

メディカルサポート体制を構築する上で、救急救命士の業務内容や活動指針となる「メディカル体制マニュアル」を作成した。マニュアルには、業務内容、メディカル体制の概要、活動要領（救護対応フローチャート）、事故発生時の対応等を記載した。

また、業務上必要となる①業務日誌〔別紙1〕、②救急車・資器材点検表〔別紙2〕、③救護対応記録表〔別紙3〕、④救護活動検証記録〔別紙4〕を作成した。


国士舘スポーツプロモーションセンター
メディカル体制マニュアル
Ver.3 2019.09.13
このマニュアルには、個人情報が含まれていますので取扱にご注意ください

勤務概要
- 内容：
①キャンパス内で発生した急病人に対して初期対応及び病院搬送を行う
（救急搬送が必要な場合には救急要請）
②国士舘スポーツプロモーションセンター安全・安心WGの業務等
- 期間：2019年9月16日（月）～ 2020年1月30日（木）
※国士舘大学学年暦より、秋期の平日授業日（89日間）
- 時間：17時45分 ～ 21時15分 （3時間30分）
- 救護範囲：国士舘大学 多摩キャンパス全域
- 救護対象者：国士舘大学所属の学生・教職員、来校者等
- 待機室：国士舘大学多摩キャンパス
メープルセンチュリーセンター多摩1階パフォーマンスセンター事務室
- 資格：救急救命士
- 人員：救急救命士2名（1日2名体制）
- 持物：食事、飲み物、筆記用具、印鑑など
- 保険：救急救命士賠償責任保険に加入（当センター負担）
- シフト：毎月希望日を提出
（例：10月の勤務希望日を9月15日までに提出）

出勤・退勤
- 勤務開始時間の15分前（17時45分）までにパフォーマンスセンターに入室する。
- 勤務記録表に記入・捺印する。
- 業務日誌を確認し、最新の情報を確認する。
- 退勤時は、パフォーマンスセンターの電気・空調等の電源を消し、施錠して管理室に鍵を返却する。
- 残業時間は15分単位で計算する。

勤務内容チェック表

時 間	勤務内容	チェック
～ 17:45	待機室に入室	
17:45 ～ 18:00	着替え	
	業務日誌の確認	
	救急車の点検	
	資器材の点検	
18:00 ～ 21:00	クラブ活動情報確認 ・ 電話番号（チラシ）配付	
21:00 ～ 21:15	ＷＢＧＴの測定・記入	
	救急車内の片付け	
	資器材の片付け	
	待機室の清掃	
	空調・電気	
	パフォーマンスセンター 施錠	

図9　メディカル体制マニュアル

b) メディカルスタッフ（医師、救急救命士等）の常駐体制

当事業では、救急救命士（国家資格）を2名常駐することとし、当該センター安全・安心WGスタッフを中心にメディカルスタッフ（アルバイト）を集い、救急救命士18名が参加することとなった。事業開始前（9月12日）には、スタッフへの説明会及びシミュレーション訓練を行い、事業開始に向け、適切な体制が整えられるよう準備した。

写真4　シミュレーション訓練

c) 地域医療機関との協力協定の締結

当事業によるメディカルサポート体制の充実の観点から、近隣医療機関の協力・支援が必要であることから、医療法人社団幸隆会 多摩丘陵病院と「メディカルサポートに関する協定」を締結（9月13日付け）した。

本協定では、本学キャンパス内で事故・傷病が発生した際に同病院が可能な限り受け入れるほか、本学の救護活動に対して同病院が医療従事者派遣に協力することが定められている。

d) スタッフの常駐場所・資器材・有事の際の専用回線（ホットライン）の確保とその周知

メディカルスタッフは、救急車の駐車場及びキャンパス入り口付近に設置されているメイプルセンチュリーセンター多摩のスポーツパフォーマンスセンター（トレーニングルーム）管理室で、待機及び資器材管理することとした。資器材については、救護活動に必要な医療機器（別紙2）、事故・傷病の現場からメディカルスタッフに連絡するための専用回線（ホットライン）として携帯電話を調達した。

事業開始に伴い、当体制（メディカルスタッフ常駐及び専用回線について）を周知するために、専用回線の電話番号等の案内を、教職員（教授会等）、スポーツ系クラブ所属の指導者及び学生（指導者連絡会・主将会議）に配付した。

写真5　メイプルセンチュリーセンター多摩

写真6　メディカルスタッフの待機場所

写真7　救急車内・資器材の点検

e) 受傷した学生アスリートの初期対応・病院搬送（学内の搬送車による病院搬送）・救急車の要請

事業開始（9月16日）から1月31日（90日間）で、メディカルスタッフによる対応件数は6件で、その内訳は救急車要請が3件、病院搬送が2件、現場での処置のみが1件であった。

表1　症例一覧

症例	日にち	症状	対応
1	2019年10月24日	左眼瞼下打撲、左眼充血	病院受診（学内搬送車での搬送）
2	2019年10月24日	左上口唇内側切創	現場での処置のみ
3	2019年10月24日	左眼視力異常、左眼付近打撲、腫脹	救急車要請（119番通報）
4	2019年10月29日	頭痛、後頸部痛、逆行性健忘	救急車要請（119番通報）
5	2019年11月6日	右手第4指腫脹、発赤、疼痛、変形	病院受診（学内搬送車での搬送）
6	2019年11月29日	後頭部打撲、めまい、嘔気、頭痛	救急車要請（119番通報）

クラブ活動中に事故等が起きた際の対応として、以下のフローを各クラブに周知した。

a）現場で救急要請が必要と感じたら、躊躇なく119番通報すること

b）救急要請の判断に迷った場合は東京消防庁救急相談センター（#7119番）に相談

c）救急要請した場合、及び救急救命士の協力が必要な場合など、上記以外で救急救命士の対応が必要だと感じたら、救急救命士を要請すること

対象期間中にa.bの事例はなく、それ以外（病院受診を必要としない怪我（軽症））は、クラブ内で対応しているため、今回の症例には含まれていない。

メディカルスタッフの活動は、活動基準（マニュアル）に基づき実施された。すなわち、事故・怪我の現場から、専用の携帯電話に入電があり、現場に向かい（徒歩もしくは搬送車にて）、通報者及び怪我人に接触して観察・処置・判断（病院受診・救急要請の有無等）という手順によっている。また、全症例において、救護対応中のメディカルスタッフから医師に電話連絡し、ビデオ通話を用いて医師が怪我人を診て、メディカルスタッフの活動に対して、オンタイムで指示・助言を行った。今年度視察した米国NCAAに加盟しているハワイ大学では、チームドクター14名、認定アスレティックトレーナー（ATC）9名、看護師1名によるメディカルチームが構成され、各施設にATCが常駐し、傷病が発生した際は、現場で処置等ができる体制が組まれていたが、実施体制（人・金）の確保が困難であることから、本事業におけるメディカルサポート体制は妥当であると考えられる。

メディカルスタッフの活動及び当体制の改善を図るため、メディカルスタッフが対応した全症例を対象に症例検討会（11月1日、11月7日）を行い、医師、メディカルスタッフ、当該センター事務員が参加した。

写真9　学内の救急車での病院搬送

写真8　救護対応

写真10　症例検討会

② 評価

当事業に関わったメディカルスタッフ及び事務員（計14名）を対象に、当事業の評価・改善に資するため、次の事項についてアンケート調査を行った。その結果は図のとおり。

1　スタッフの常駐場所について

2　勤務時間について

3　スタッフの人数について

4　資器材について
5　救護マニュアル等について
6　業務内容について
7　近隣医療機関との協定について
8　当事業について
9　次年度について

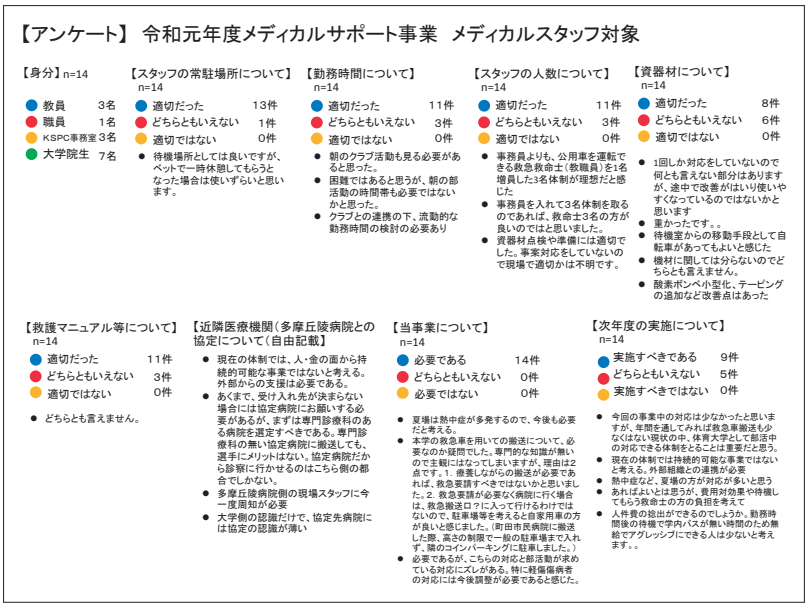


図10　アンケート結果

近隣医療機関等（医療法人社団幸隆会 多摩丘陵病院）との連携の下、当初予定していた平日授業日の全日程でメディカルスタッフの常駐体制を構築することができた。競技中の事故・怪我に備え、現場に常駐したメディカルスタッフが迅速に対応できる体制を整えることは、学生アスリートへの安全・安心面のサポートとして、大変意義深い試みであったと評価できる。他方で、当事業を継続するための課題として、①実施体制（人・金）の確保、②他部署、病院、企業等の理解・協力が明らかになっている。

次年度については、アンケート結果も踏まえて、次のとおり実施計画を立てている。また、当事業の継続・発展を図るため、取り組みに賛同する企業・民間団体の協力を得るためのオフィシャルパートナー・スポンサー等の制度についても、引き続き検討していく。

令和２年度　学内（練習時）救護体制の概要

内容：国士舘大学多摩キャンパス内で発生した傷病人に対して ①初期対応 ②救急要請を行う。

期間：国士舘大学学年暦より平日授業日（計137日間）
※入試日（入試準備日も含む）、休講日（午後）、定期試験期間は実施しない。
春期　2020年4月24日（金）～ 2020年8月10日（月）（計60日間）
秋期　2020年9月17日（木）～ 2020年1月25日（月）（計77日間）

時間：①救護活動時間　18：00 ～ 21：00（クラブの活動状況により短縮）
②業務時間　17：30 ～ 21：15（準備片付け含む）

対象：①国士舘大学の教職員・学生、②来校者等

スタッフ：①医師
②医師以外の資格保有者（救急救命士、理学療法士、看護師等）、
③アスレティックトレーナー（JSPO-AT、JATAC-ATC、NATA/ATC等）

人員：2名程度（1日2名程度常駐）

協力機関：本学との協定病院（医療法人社団幸隆会 多摩丘陵病院）

待機場所：
国士舘大学多摩キャンパス メイプルセンチュリーセンター多摩 スポーツパフォーマンスセンター内

費用：当事業に係る人件費、消耗品費等は学校法人国士舘の当初予算により確保済み。

(3) スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステムの確立（スポーツ傷病レジストリー事業）

スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステムの確立（スポーツ傷病レジストリー事業）は、スポーツ中の傷病・処置等の情報を一元的に収集・解析するシステムを確立し、科学的知見に基づき、スポーツ現場の安全・安心を確保することを目的としている。

①「スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステム」の検討

本年度はスポーツ系クラブの活動中（学内 外での練習・試合中）で起きた事故・怪我等の情報を集約するシステムを構築するため、以下の内容を検討した。

a) 事故・怪我等の情報を集約する症例対象・方法

集約する症例の対象は、事故・怪我等が発生し、病院受診した症例を対象とし、クラブ内での対応のみの症例（トレーナー、マネージャー、本人のよる処置のみ）及び、学内の健康管理室（医務室）で対応した症例は除外した。これは、後述するシステムに入力する責任者を明確にして、かつ保険申請書の作成という入力者にとって利便性のある環境を、最初に構築しようと考えたためである。

対象症例を集約する方法は、A.学内外で救急要請し病院に救急搬送された症例、B.保険支払い対象の症例（1日以上の入院もしくは14日以上の通院した者）の2系統について整えた。A.については、学内での情報は学内の関係部課署の協力を得て情報収集する。また、学外での情報は該当クラブから当該センターに報告する制度を設けることとした。B.については、学生の保険業務の担当部署（学生部）の協力を得て集約することとした。

b) データ登録項目の内容・集計・解析方法

対象症例（A.B）の該当者に対して、統一した情報を収集するために、データ登録項目（全29項目）を検討し、Webを用いてデータを収集する「スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステム」を作成した。

当該システム運用後は、対象症例（A.B）の該当者がシステムに入力し、その情報を集計し解析を行った。また、システム運用前の学内で発生した傷病情報、救急搬送事案については、関係部課署の協力を得て、本学学生が加入している保険請求情報を用いて、集計・解析を行った。

図11　入力画面

c) 解析結果のフィードバック

集計・解析から報告書を作成し、全スポーツ系クラブへデータ解析結果を公表した。

② 解析結果

「スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステム」は、令和2年1月17日より、その運用を開始した。ここでは、レジストリーシステムの①運用開始前（保険請求情報）の情報、②運用開始後の情報の解析結果を以下のとおり報告する。

レジストリーシステム 運用開始前（保険請求情報）の解析結果

a) 期間

2019年4月1日～12月31日

b) 対象

本学全学生（表2　2019年5月時点 学生数）

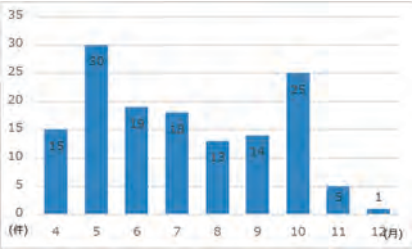
c) 結果

調査期間の間での本学における保険請求データ及び救急搬送症例の総件数は140件であり、1か月平均15.6件であった。詳細は次のとおりである。

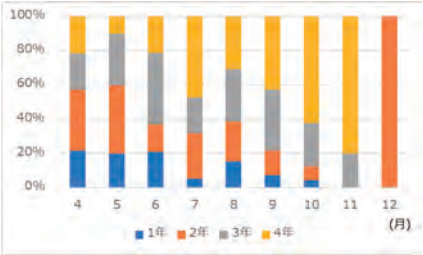
表2　国士舘大学学生数

国士舘大学学生数	1年	2年	3年	4年	計
政経学部	583	630	582	627	2,422
体育学部	585	614	600	611	2,410
理工学部	362	357	335	379	1,433
法学部	428	456	426	525	1,835
文学部	419	440	396	487	1,742
21世紀アジア学部	384	370	393	465	1,612
経営学部	286	334	317	309	1,246
合計	3,047	3,201	3,049	3,403	12,700

1. 発生月別件数

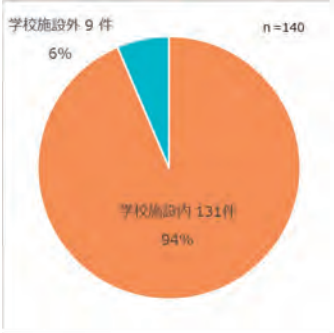


2.学年別発生月件数



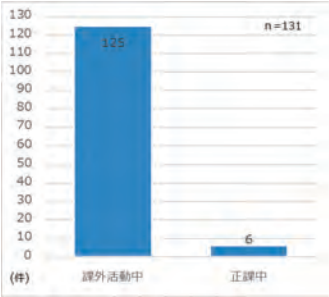
この結果から、1年生は入学当初の4･5･6月に件数が多く、課外活動での大会等が多くなる時期から4年生の傷病発生が多くなっている。

3.発生場所分類別

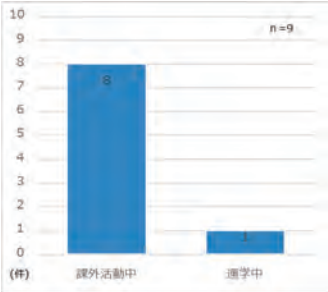


4.発生場所別事故発生時の活動形態

学校施設内

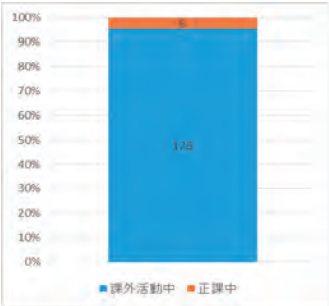


学校施設外



上記データを100%積み上げ棒グラフに変換してみると、両者の違いはあまりない。

学校施設内



学校施設外

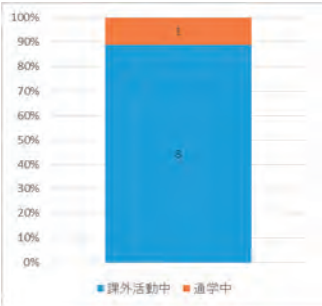


図12　解析結果

レジストリーシステム 運用開始後の解析結果

a) 期間

2020年1月17日（運用開始日）～2020年3月6日（50日間）

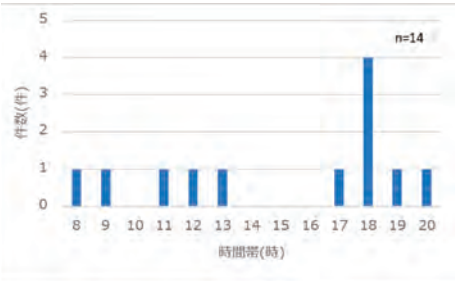
b) 結果

入力期間（50日間）中の対象症例（A.B）の件数は14件であり、内4件が救急車要請であった。詳細は次のとおりである。

c) 考察

今回14件の中で注目すべき症例は、目の損傷で、本学多摩キャンパスから遠方の病院に搬送した症例である。本来なら、近隣の病院搬送されるのであるが、傷病が発生した時間19時と一般病院の診療時間外であることや眼科という専門的な診察が必要なため、直線距離で約28km、時間にして約30分の場所まで搬送された。なお、データ集計を開始してから同規模の重い怪我の搬送例はなかった。

1. 発生時間帯



2.申請者（怪我をした人）の活動形態

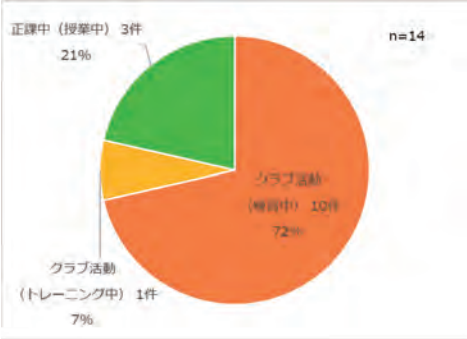


図13　解析結果

3.傷病発生場所（14件）

場所	件数
サッカー場	3
柔道場	3
陸上競技場	2
体育館	2
剣道場	2
空手道場	1
ソフトボールグラウンド	1

4.診断名内訳（14件）

診断名	件数
脳震盪	2
右手中手骨骨折	1
右手薬指第二関節骨折	1
外側側副靭帯損傷	1
角膜損傷、眼房水の混濁	1
腰椎打撲	1
靭帯損傷	2
肉離れ	1
捻挫	2
未記入	2

本事案は傷病発生時間が19時と学内の健康管理室閉室時間（18時）から1時間後の課外活動中傷病発生であり、当該センターの事業（メディカルサポート体制の構築事業）で常駐していた救急救命士が接触し観察、判断して救急車要請でなった。

以上のようなメディカルサポート体制がない場合、大学の健康管理室閉室後の傷病発生時には、その場に居合わせた指導者・コーチ等の判断によって、救急車要請等が行われる。今回のデータ収集期間は短期間（50日間）であったが、救急車要請が4件に上ったことに鑑みれば、事案の発生現場の近くに救急救命士が常駐し、適切な観察・判断を行う体制を整備することは、スポーツ活動の安全安心の観点から必要と考えられる。

③ 評価

今年度は、①レジストリーシステムの運用開始前（保険請求情報）、②運用開始後（50日間）のデータについて解析を行った。その結果、今まで表面化していなかった大学構内での怪我の発生状況が明らかになり、かつ医療スタッフが対応するような事案では、重症症例も発生することが明確になった。この結果を踏まえて、各クラブ活動の安全対策に関わるEAPプログラム内容の及びメディカルサポート事業の体制を見直すことができた。

今後、スポーツ系部活動を実施する各大学において、レジストリーシステムを適切に整備し、学生アスリートにとって、より安全な環境の実現に役立てることを強く期待したい。

(4) アクションプランA　総括

「大学スポーツの安全・安心の確立に資するプラットフォーム構築事業」では、昨年度に引き続き、世界基準の安全・安心な体制を構築することを目指し、緊急時行動計画（EAP）の策定・普及の推進、メディカルサポート体制の構築、スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステムの確立の3本柱で事業を行った。

緊急時行動計画（EAP）の策定・普及の推進事業では、全スポーツ系クラブ対象のEAP研修会実施と、昨年度の成果物を広く普及するための仕組みとして「EAPプログラム」を開発した。大学スポーツのみならず、プロスポーツを含め、社会におけるEAPの認知度はまだ低く、さらにEAPに関する取り組み行う大学や競技団体は少ない。今回の試みが、その課題解決の一助となれば幸いである。今後は、指導者向けEAP研修会を実施するとともに、このプログラムを学内外に広く提供するために、動画教材を含めたe-ラーニングシステムを開発する予定である。

メディカルサポート体制の構築事業では、学生アスリートの安全安心の確保に向けて、モデルとなる体制を試行することができた。今後の事業継続のためには、民間団体・企業等の協力を得るための制度等を設ける必要がある。また、当事業で得られた成果を我が国の大学スポーツに還元するため、学内のみならず中央学生競技団体が主催する大会・試合等での救護体制を構築するための仕組みも、検討していく予定である。

スポーツ中の傷病等に関するレジストリーシステムの確立事業では、スポーツ系クラブの活動中の傷病情報を集約するシステムを検討し運用することができた。しかし、現在のシステムでは、クラブ内での対応のみの症例（トレーナー、マネージャー、本人のよる処置のみ）及び、学内の健康管理室（医務室）で対応した症例を集約できていない。また、運用期間が50日間と短い期間であったため、指導者へのフィードバックができるほどの十分な解析結果を出すには至っていない。今後は、傷病情報の集約内容の拡大を図り、競技別に傷病情報を解析し、その情報を基盤としたEAP、救護活動、応急手当講習会（SFR）等の運用ができるよう進めていく。

「大学スポーツの安全・安心の確立に資するプラットフォーム構築事業」実施体制及び協力者

＜スポーツ・メディカル・ディレクター＞

田中　秀治　（救急システム研究科 研究科長）

＜安全・安心WGメンバー＞

スポーツアドミニストレーター

増本　達哉　（体育学部 准教授）

喜熨斗　智也　（体育学部 講師）

WGスタッフ

田久　浩志　（救急システム研究科 教授）

高橋　宏幸　（体育学部 准教授）

月ヶ瀬　恭子　（防災・救急救助総合研究所 講師）

津波古　憲　（防災・救急救助総合研究所 助教）

曽根　悦子　（同上）

原　貴大　（救急システム研究科 研究科助手）

武田　唯　（同上）

二宮　斉　（防災・救急救助総合研究所 職員）

谷川　真莉菜　（同上）

城所　勇太郎　（同上）

浅倉　大地　（同上）

川手　桃　（同上）

星野　元気　（体育学部　教務助手）

大野　敦司　（多摩校舎事務課　職員）

井上　拓訓　（救急システム研究科 博士課程）

沼田　浩人　（救急システム研究科 修士課程）

守岡　大吾　（同上）

笹本　真吾　（同上）

＜外部協力者＞

小峯　力　（中央大学 理工学部 教授）

山本　利春　（国際武道大学 体育学部 教授）

アクションプラン B.
スポーツ倫理・教育に関するワークショップの開催及び教育プログラムの開発事業

(1) スポーツ倫理・教育に関するワークショップの開催

昨年度は、本委託事業に関わる11大学の協力を得て、スポーツ倫理・教育に関する実態調査を実施した。今年度は、この成果を踏まえ、関係大学の協力を得て、学生アスリートの倫理観形成に向け、我が国の大学の具体的な取り組み及びその成果と課題、今後の展望について明らかにすることを目的とし、以下の内容のシンポジウムを開催した。

1) 名　称：学生アスリートのスポーツ倫理教育推進に向けたシンポジウム
2) 目　的：全国の大学からの参加を得て、学生アスリートの倫理観形成に向けた、各大学の取り組み及びその成果と課題、今後の展望について明らかにする。
3) 日　時：12月8日（日）13：00～16：00
4) 場　所：国士舘大学世田谷キャンパス　34号館B301教室（約350名収容）
5) 登壇者：
①主催者挨拶　大澤　英雄　学校法人国士舘 理事長
国士舘スポーツプロモーションセンター　チーフ・スポーツ・ディレクター
②基調講演　「UNIVASの役割と今後の展開、学生アスリートの倫理観形成に向けて」
鎌田　薫氏　一般社団法人大学スポーツ協会　会長
③シンポジウム「学生アスリートの倫理観形成に向けて」
〈シンポジスト〉
「学生アスリートが持つべき倫理観とは」
友添　秀則氏　早稲田大学教授・理事、一般社団法人大学スポーツ協会　理事
「スポーツ庁が期待する望ましい「学生アスリート」像とは」
増井　国光氏　スポーツ庁　参事官
「ジャーナリストから見る学生アスリートの現状と課題」
北川　和徳氏　日本経済新聞社　編集局運動部編集委員
「国士舘大学における学生アスリートの倫理観形成に関する取り組み～スポーツ庁委託事業の成果報告 ～」
細越　淳二　国士舘大学 文学部教授
国士舘スポーツプロモーションセンター スポーツ・エデュケーショナル・ディレクター
〈司　会〉
吉川　晃　学校法人国士舘　審議役
国士舘スポーツプロモーションセンター　サブチーフ・スポーツ・ディレクター
④閉会　入澤　充　国士舘大学 副学長・法学部教授
⑤総合司会　田原　淳子　国士舘大学　体育学部教授
国士舘スポーツプロモーションセンター　スポーツアドミニストレーター
6) 参加者：326名

7) 概　要（全文は別紙5）：

本学体育学部の田原淳子教授の司会で進行し、まず、本法人の大澤英雄理事長が主催者を代表して挨拶をした。

基調講演として、大学スポーツ協会（UNIVAS）会長の鎌田薫氏による「UNIVASの役割と今後の展開、学生アスリートの倫理観形成に向けて」をテーマとした講演を実施した。鎌田会長は、はじめに大学スポーツが日本のスポーツ史にどのような影響を及ぼしたかを解説した後、大学スポーツ界が現在抱えている問題を取り上げた。その組織に関する問題としては、中学校は日本中学校体育連盟、高等学校は全国高等学校体育連盟、社会人は日本スポーツ協会などの統括組織が存在するが、大学には存在しない。このため競技によっては科学的な練習を積極的に取り入れる団体がある一方、過剰な練習量を求める団体が存在する場合があると、大学スポーツのマネジメントの遅れについて指摘した。その後、UNIVAS設立の経緯・目的、現在取り組んでいる15のプログラム等を説明し、最後に、「大学教育は、知恵と志と実行力つまりは”人間力”を涵養し、基本的なスキルとマインドを身に付けさせることを教育目標にしなければならない。この観点から、迅速な判断などを涵養するスポーツは、単なる“課外活動”ではなく教育の中核をなすものと位置付け直す必要がある。」と締めくくった。

シンポジウムは、本法人の吉川晃審議役が進行し、我が国の方針（スポーツ庁）としての立場から、スポーツ庁参事官の増井国光氏、スポーツ倫理学の立場から大学スポーツ協会理事で早稲田大学教授・理事の友添秀則氏、ジャーナリストの立場から日本経済新聞社編集局運動部編集委員の北川和徳氏、昨年度の本学の取り組みや実態調査の結果を踏まえて、本学文学部の細越淳二教授が、UNIVAS事業の進捗状況や課題などについてそれぞれ発表し、その後、吉川審議役の問題提起に対し、スポーツ倫理の在り方、大学スポーツの今後について、会場からの意見を含めながら議論を行った。

スポーツ倫理については、大学でスポーツに取り組む上での学業とスポーツを両立させることの重要性や課題、学生のみならず指導者の意識改革や指導者育成の必要性について議論された。大学スポーツの今後については、米国NCAAや英国のBUCSの例を挙げ、文化や背景の違いに触れながら、日本はどうして行くべきかとの議論がなされた。友添氏は、それぞれの加盟大学が自分たちの組織を作っていくという意識が重要であると述べ、増井氏は、少しでも多くの大学が、AD局を設け、スポーツアドミニストレーターを置くよう、スポーツ庁としても支援していくと述べた。最後は、本学副学長で法学部の入澤充教授が総括し、閉会した。

8) アンケート

参加者に、今回のシンポジウムに関するアンケート調査を実施した。以下は「その他、ご意見（学生アスリートの倫理観形成に向けて、今後どのように取り組むべきことについてなど）、ご感想等ございましたらご記入ください。」に対する自由記述の一部抜粋である。

- 学生の倫理教育のためには、指導者の倫理教育も両輪として必要であると考える。加盟校の中で指導者教育に向けた取り組みについても紹介があるとよかった。
- 昨今の事例からガバナンスの確立が重要と考えるが、多くの学生アスリートがそのスポーツで生計を維持できるわけではないことを考えると、“キャリア形成をいかに進めるか”という視点も大事であると考えた。
- 学生アスリートの倫理観はまさに社会の倫理観の反映でしかないと考えます。

- UNIVASが目指そうとしていることや、学生に求める行動、態度、目標が具現化・実現したらどれだけ良いこと＝メリットがあるのか、変化が起こり得るのか、そういった事例も提示してあげたら良いのではないかと感じました。
- 広い視野を持ち、時代に適した指導を行わなければ生き残る事は難しいと感じた。指導者が変わらなければ（考え方）アスリートは変わらないと思った。
- スポーツについて倫理的に考えたり、捉えることがいかに難しいかがよく分かった。身近なスポーツも考え方や取り組み方を変えなければ結果や周りの影響が変わってくるということ。
- これからもっと勉学に勤しみたいと感じた。
- とても良い講演であった。これからの人生に活かしていきたい。
- トレーニング内容のマンネリ化などが起こると、その内容をただこなすだけの作業になってしまう可能性があると身を持って感じているので、そういった時のコーチングの大切さやスポーツを行うことに関して、根源である内在的価値とは何かというのを考えることで、より良いトレーニングなどに結びつく事が出来ると基本的な事を再度、学習することが出来たので、非常に良かった。
- 部活動だけに偏るのでは、学生アスリートの質が低下してしまう。なので、スポーツを通して学力向上を目指し学校と文武両立をはかることで人格形成が良い方向へ向かっていく。スポーツで培った人間性を社会で発揮し、生きる力を身に付けていくことが大切。
- まず、スポーツをずっと続けたいと思わせることが必要だと感じた。スポーツを通じて得られることを発信する。人生にスポーツを取り入れる目標が解決すれば一つずつ解決していく（社会を変えてから、組織を）。
- 学生としてこのシンポジウムを聞き、今後の自分の取り組む姿勢を自主的に見直すべきであると思った。
- 大学生の倫理観の欠如は、自分自身の部活動の中でもあり、4年生である立場からも人間的成長を促すことの難しさは大変悩まされた。大学の教育も大切だが、部の中では、上に立つもの（指導者、先輩、幹部）がしっかりとした倫理観を持ち、組織を運営していかなければいけないと思う。
- 今回のシンポジウムの中で、指導者側の重大さ（学生の成長の為の）、これからのスポーツ、教育に求められている資質等を見直す機会となった。また、ジャーナリストの視点からスポーツ倫理についての話はなかなか聞く機会はない為、とても面白かった。
- 部活動と勉学の両立の大切さを感じました。学内だけではなく、様々な活動でスポーツを広めていければ良いなと思いました。

9) シンポジウム総括

本シンポジウムでは、我が国の大学スポーツの現状を確認するとともに、そのような状況下でUNIVASを立ち上げて推進することの意義や国としての考え方、スポーツ倫理学の側面から見た学生アスリートの在り方について、そして各大学の取り組みが示されるとともに、ジャーナリズムの視点から現在及び今後の取り組みに向けた疑問や課題が指摘されるなど、活発な議論が展開された。

学生アスリートが、大学において学業とスポーツを両立させながら人生設計を進める上で、具体的な示唆を得ることができたシンポジウムとなった。

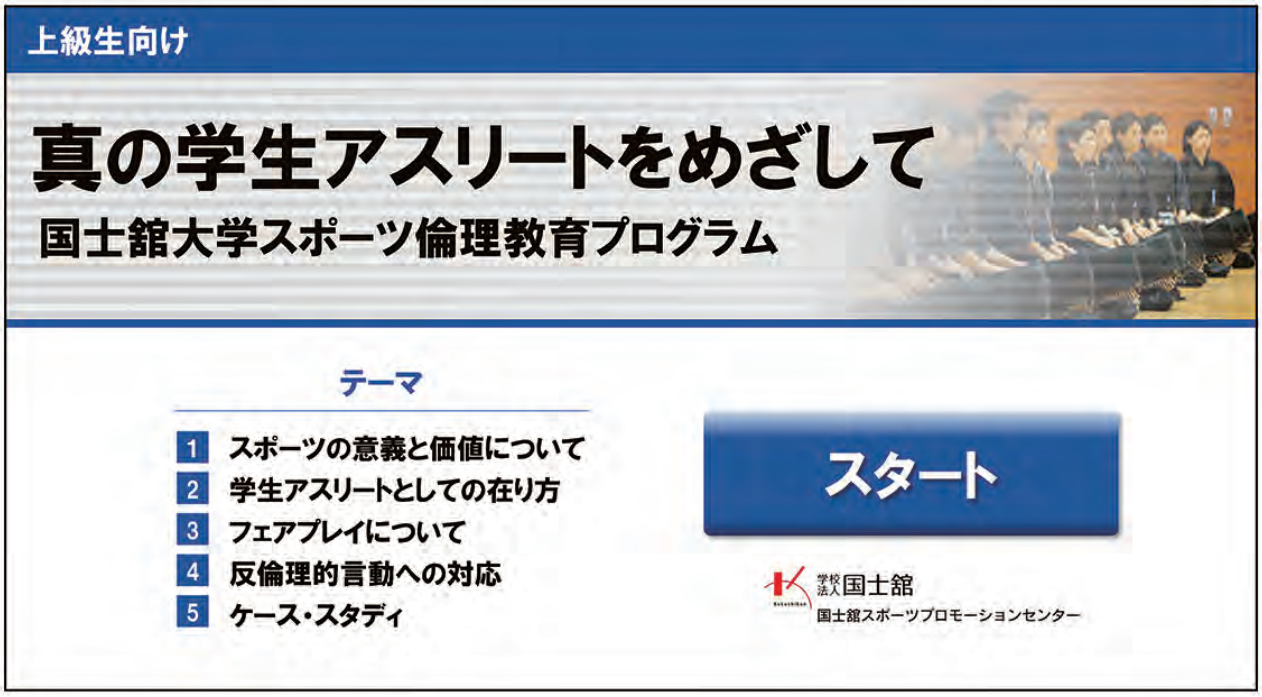
また、参加者についても15大学、3団体を含む326名であり、評価指標に設定していた10大学以上の参加を上回る結果となった。シンポジウムの成果については、本報告書及び令和2年4月1日開設予定のYouTubeチャンネルにて公表をしていく。

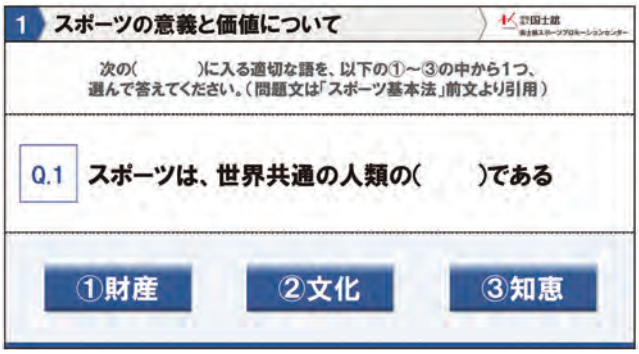
(2) 在学生アスリートを対象としたスポーツ倫理・教育プログラムの開発・普及

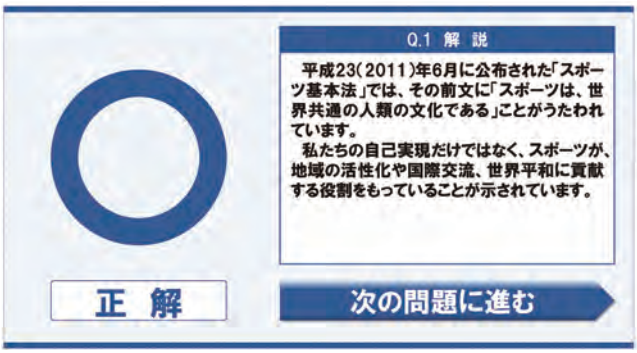
今年度は、初年次学生向けのプログラムの普及を促進させるとともに、より高度なスポーツ倫理・教育プログラムを開発し、大学スポーツを通じて、社会に貢献しうる人材育成を図ることを目的とし、以下の内容を実施した。

① 在学生アスリート向けプログラムの開発

昨年度、初年次学生向けのスポーツ倫理・教育プログラムを作成したが、その中でもスポーツ基本法やフェアプレイ、スポーツの価値といった、スポーツ倫理教育の根幹を成す部分については、今回の在学生アスリート向けのプログラム内でも組み込んだ上で、実際に起こりうる状況を想定したケース・スタディの設問を増やし、全24問のプログラムを開発した。特に、上級生としての在り方や上級生となり学生生活に余裕が出てきた際に陥りやすい状況、就職等の上級生ならではの問題等を想定し、正しい判断ができる様になるためのより高度なプログラム内容とした。具体的なプログラム（24の設問とその解説）は以下のとおりである。







1 スポーツの意義と価値について

次の(　　)に入る適切な語を、以下の①～③の中から1つ、選んで答えてください。(問題文は「スポーツ基本法」前文より引用)

Q.2 スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の(　　)である

①権利　②自由　③義務

○ 正解

Q.2 解説

「スポーツ基本法」では、その前文に「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」であることが明記されています。我が国の法律では初めて、スポーツをすることが私たちの権利であることがうたわれました。

学生アスリートは、スポーツを通して自分の人生をより豊かにすると同時に、私たちの生活の充実に貢献する力をもっていることを理解していることが大切です。

次の問題に進む

2 学生アスリートとしての在り方

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.3 学生アスリートは、アスリートである前に、まず「学生」である

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.3 解説

学生アスリートであるみなさんは、アスリート(競技者)である前に「大学生」です。大学での学びをしっかりと修めながら、その上で競技に向き合うことが大前提となります。このバランスが崩れることのないよう、計画的に学生生活を過ごすようにしましょう。

次の問題に進む

2 学生アスリートとしての在り方

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.4 学生アスリートは、学業よりもスポーツ活動に専念しなくてはならない。

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.4 解説

Q.3 で確認したように、学生アスリートであるみなさんは、アスリートである前に「大学生」です。

競技ばかりに集中するのではなく、自分が所属している学部・学科での学びと競技とのバランスをとりながら活動しなくてはいけません。

次の問題に進む

2 学生アスリートとしての在り方

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.5 学生アスリートは、学業成績が基準に満たない場合は、スポーツの大会および練習に参加することができない。

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.5 解説

大学生である学生アスリートは、学業と競技のバランスをとらなくてはいけません。所属する学部・学科で定められた学びを修め、大学生としての責任を果たした上で、競技に向き合うことが求められています。

そのため、「一定の単位を取得できない者は、練習や試合に参加することができない」という制度ができているのです。(2019年3月に設立される大学スポーツ協会(UNIVAS)で2019年度から実証実験が開始され2022年度より実施予定。)

次の問題に進む

2 学生アスリートとしての在り方

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.6 学生アスリートには、目標に向かって努力し、成功や失敗から学び、向上しようとする姿が求められる。

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.6 解説

学生アスリートは、一般の学生にとってのロールモデルになる必要があります。学業をしっかりと修めながら競技にも集中する姿を示すことで、あなた自身の行動も確かなものとなり、また学生アスリートとしての価値も高められることになります。

加えて、将来、学生アスリートとして活躍することを夢見ている中学生や高校生にとっても、よいモデルを示すことになります。

次の問題に進む

2 学生アスリートとしての在り方

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.7 学生アスリートは、スポーツを通して豊かな人間性の獲得を目指す。

①はい　②いいえ

○

正　解

Q.7 解　説

これまで見てきたように、スポーツは世界共通の文化であるとともに、豊かな人間性を私たちにもたらしてくれる役割を持っています。

スポーツに取り組む私たちは、真剣にスポーツに取り組んだ結果として、仲間との友情や、自分を取り巻く多くの人たちとの良好な人間関係を築けるように、自分自身を高めていくことが必要です。

次の問題に進む

2 学生アスリートとしての在り方

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.8 学生アスリートは、一般的なルールを守って生活することが求められる。

①はい　②いいえ

○

正　解

Q.8 解　説

競技を通して多くの人々と協力したり関わり合ったりする学生アスリートには、競技力向上だけでなく人との関係を円滑に結ぶ力を獲得することも期待されます。

また、スポーツ場面と同様に、自分勝手な行動は慎み、ルールを守って生活する姿を示すことが求められます。

次の問題に進む

2 学生アスリートとしての在り方

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.9 学生アスリートは、競技のストレスから解放されるために、過度に飲酒や喫煙、ギャンブル等を行っても問題にならない。

①はい　②いいえ

○

正　解

Q.9 解　説

学生アスリートは「競技中心の生活」だけではいけません。これまでも見てきたように、学業をしっかりと修めながら、競技に向き合うことが求められます。

また競技に向き合うことからくるストレスを感じることもあるかもしれません。しかし、だからといって、一般的な常識を超えて（法律を犯して）飲酒、喫煙、ギャンブルに手を染めることがあっては、絶対になりません。学生アスリートだからこそ、節度ある行動が求められるのです。

次の問題に進む

3 フェアプレイについて

次の（　　）に入る適切な語を、以下の①～③の中から1つ、選んで答えてください。

Q.10 アスリートは、（　　）競争をし、スポーツの高潔性を高めることに努めなければならない。

①激しく　②公正な　③厳しく

○

正　解

Q.10 解　説

スポーツは、アスリートだけのものではありません。Q.1 の解説でも記したように、スポーツは自己実現に加えて、地域の活性化や国際平和にも貢献する重要な役割をもつものになっています。

学生アスリートは、このことを踏まえて公正にプレイし、スポーツの価値や学生アスリートの価値をさらに高めるように取り組まなくてはなりません。

次の問題に進む

3 フェアプレイについて

次の（　　）に入る適切な語を、以下の①～③の中から1つ、選んで答えてください。

Q.11 アスリートは、平等性・卓越性を大切にし、（　　）のないスポーツの実現に努めなければならない。

①経済効果　②文化交流　③ドーピングなどの不正行為

○

正　解

Q.11 解　説

ドーピングは、競技者の努力を無にする許されない行為です。一人の不正行為が、多くのアスリートの信頼を損ねることにつながります。

学生アスリートは、様々な誘惑や不安に惑わされず、自身の卓越性の追求を目指して、互いに公正に競技に向き合うことが求められます。

次の問題に進む

4 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.12 学生アスリートは、あらゆる暴力やハラスメントを許さない。

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.12 解説

スポーツの場面に暴力は不要です。いかなる状況であれ、スポーツ場面で行われる暴力を許してはいけません。
学生アスリートには、ルールを守り、望ましい人間関係の中で競技力を高め、目標達成できるような環境が必要です。そのような環境が整えられるよう、アスリートだけでなく、指導者や大学の教職員が連携する必要があります。

次の問題に進む

4 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.13 学生アスリートは、年齢、性別、性的指向、障害の有無、国籍、人種、民族、宗教などの違いを理由とする、いかなる差別的な言動も許さない。

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.13 解説

Q.1 で確認したように、スポーツは世界共通の人類の文化です。スポーツ場面においては、年齢、性別、性的指向、障害の有無、国籍、人種、民族、宗教などの違いで差別されるようなことがあってはなりません。
学生アスリートは、全ての人々が等しくスポーツの価値を共有するべきであるということを理解し行動することが必要です。

次の問題に進む

4 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.14 学生アスリートは、反倫理的言動を黙認しながら、適切に対処する。

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.14 解説

近年、スポーツ場面における暴言や体罰、各種のハラスメントといった反倫理的言動が問題になっています。
学生アスリートのみなさんは、そのような言動を目にした時には，学生相談室に相談し、クリーンで安心して競技に取り組むことのできる環境を求めていく必要があります。

次の問題に進む

4 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.15 学生アスリートは、指導者の指導に対して絶対的に従わなければならない。

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.15 解説

学生アスリートといえども、指導者の指導が反倫理的であったり、ハラスメントに該当するなど、競技者が安心して自分やチームの目標達成に向き合うことのできない状況があると感じた場合は、その状況を改善するように行動する必要があります。もしそのような場面に遭遇した時には、学生相談室に相談するようにしましょう。

次の問題に進む

4 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを、以下の①～②から1つ、選んで答えてください。

Q.16 学生アスリートは、運動部で引き継がれている慣習は、その内容に関係なく従うべきである。

①はい　②いいえ

○ 正解

Q.16 解説

運動部では、競技力やチームワークを向上させるための良い慣習がたくさんある一方で、部の上下関係を押しつけたり、慣習と言いながらお酒を飲ませたりするなどのハラスメント事案も発生しています。
学生アスリートとして、正しい部の慣習は守り、そうでないものについては勇気を持って断ったり、学生相談室に相談するなどして、より望ましいスポーツ環境を手に入れるようにしましょう。

次の問題に進む

5 ケース・スタディ ～あなたならどう行動しますか～

Q.17 監督から相手選手へのラフプレーの指示を受け、この指示を遂行しないと選手登録を抹消される状況に追い込まれました。このときの、あなたの行動として**不適切なもの**を、以下の①～③から1つ、選んで答えてください。

① 指示通りにラフプレーを遂行する
② 他の指導者に相談する
③ ラフプレーを行わない

正解

Q.17 解説

アスリートに限らず、スポーツに関わる人間にはその高潔性を維持する役割があります。仮に、指導者であってもその高潔性を脅かすようなことは認められません。アスリートにはスポーツの価値を守るための適切な行動が求められます。

今回のケースで最も不適切なものは、スポーツの価値を損なうような指示をそのまま遂行することです。コーチや仲間に相談するか、自らの意思でその行為を行わないことがあるべき態度です。

次の問題に進む

5 ケース・スタディ ～あなたならどう行動しますか～

Q.18 ある日の練習で極めてきついメニューをこなすことになりました。指導者や上級生からの指導が続き、一人の選手の動きが明らかに鈍くなりました。このときの、あなたの行動として**不適切なもの**を、以下の①～③から1つ、選んで答えてください。

① 当該選手の状況を確認する
② 指導者に状況を報告し、指示を仰ぐ
③ 黙って練習を継続する

正解

Q.18 解説

アスリートは肉体を極限まで追い込むことで、肉体を強化し、競技力の向上を図ります。しかしながら、過度なトレーニングは逆に肉体を危険に晒し、場合によっては死を招くケースもあります。上級生は、これまでの経験を活かし、体調の優れない選手などを気にかけたり、指導者に状況を報告したりすることが求められます。この観点は、将来指導者になる場合にも大変役立ちます。

次の問題に進む

5 ケース・スタディ ～あなたならどう行動しますか～

Q.19 通学中に部活動の後輩が歩道一杯に広がって歩いていました。このときの、あなたの行動として**適切なもの**を、以下の①～③から1つ、選んで答えてください。

① 状況を把握して、広がらないように注意する
② 黙って普段と変わらない挨拶をする
③ 見て見ぬふりをする

正解

Q.19 解説

上級生として手本となるような行動をとることはもちろんのこと、後輩のマナーについて指導することも上級生の重要な役割です。良くないマナーを見つけたときに、しっかりと注意・指導できるように日頃から自身の行動や言動に気をつけましょう。

次の問題に進む

5 ケース・スタディ ～あなたならどう行動しますか～

Q.20 部員がアルバイトについて、悩んでます。内容としては、休ませてもらえない、休憩時間がない、ノルマに達さないために商品の買い取りを強要されたなどです。このときの、あなたの行動として**不適切なもの**を、以下の①～③から1つ、選んで答えてください。

① 指導者に相談することを促す
② 頑張って続けるように励ます
③ 学生・厚生課や労働局に相談するように促す

正解

Q.20 解説

正社員並みに働かされたり、シフトを一方的に決められるようなバイトは、部活動だけでなく、学業に大きな支障を来す恐れがあります。このような「ブラックバイト」は違法行為である可能性が高いです。指導者に相談したり、学生・厚生課や労働局に相談してみてください。

ブラックバイトに関する相談窓口
（03-6804-7245）

次の問題に進む

5 ケース・スタディ ～あなたならどう行動しますか～

Q.21 部活動のイベントで部員がスマホで写真を撮っていました。その写真には個人情報と思われる内容も含まれていました。その写真をSNSにアップしようとしています。このときの、あなたの行動として**不適切なもの**を、以下の①～③から1つ、選んで答えてください。

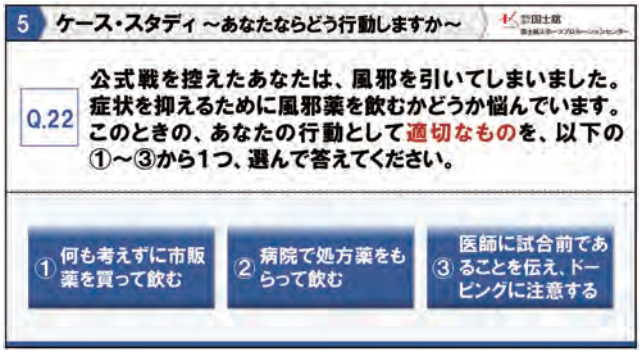
① 見て見ぬふりをする
② 写っている人への確認と了承を得させる
③ 無闇なSNSへのアップを控えるように言う

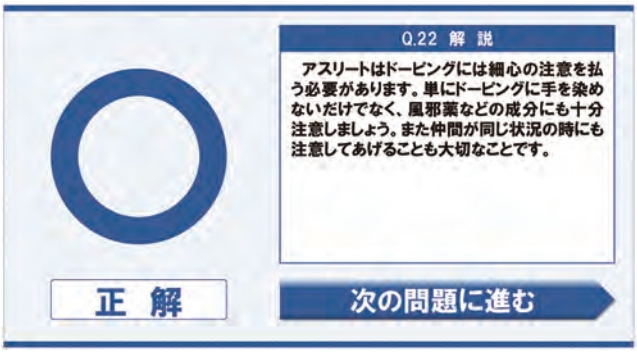
正解

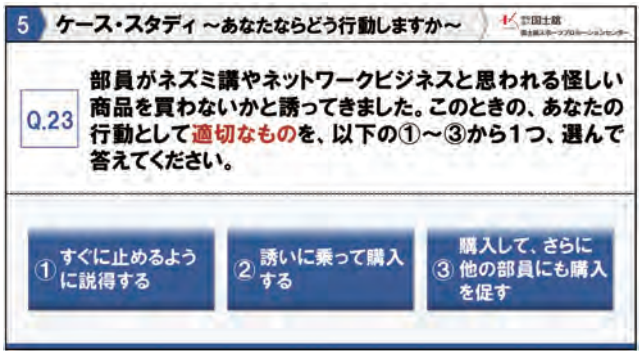
Q.21 解説

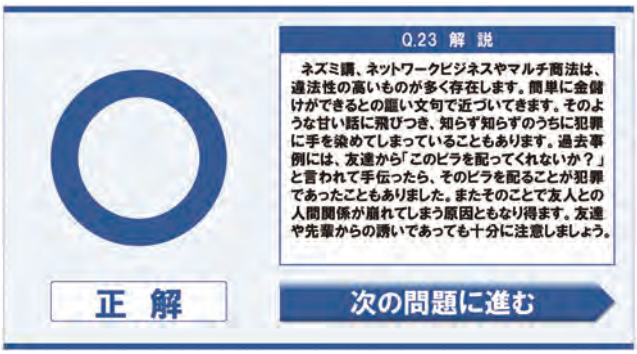
SNSで情報を発信する際は、ゼミや部活動であってもプライバシーや個人情報の流出に細心の注意を払う必要があります。必ず相手の了承を得てから発信しましょう。また著作権や肖像権を守る必要もありますので、芸能人の写真やキャラクターのイラストなどは本人・作者等の承諾無しにアップはできません。

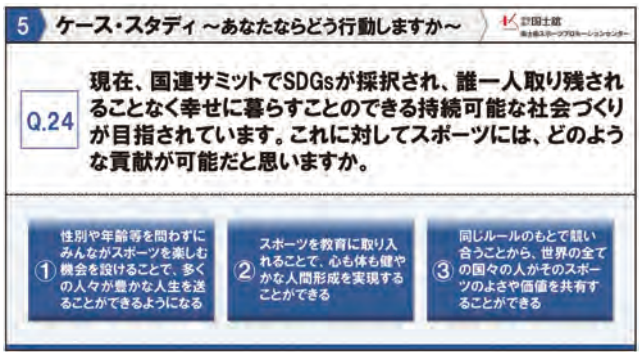
次の問題に進む

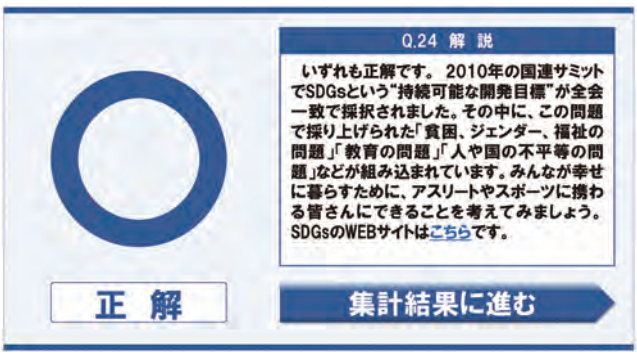






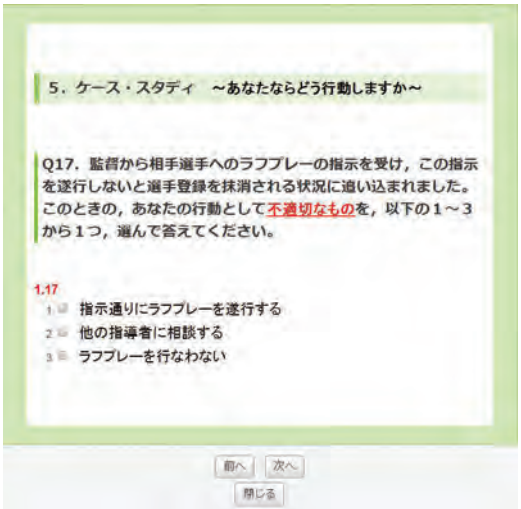






② e-ラーニングシステムの構築・運用

e-ラーニングシステムについては、国士舘大学で使用しているweb上の学習支援システム「manaba」及びPowerPointを利用してコンテンツを作成した。設問ごとに正しい回答や解説を確認でき、正解しないと次に進めないという形で、必ず全ての項目について理解できる様な仕組みで作成し、2020年1月より運用を開始した。



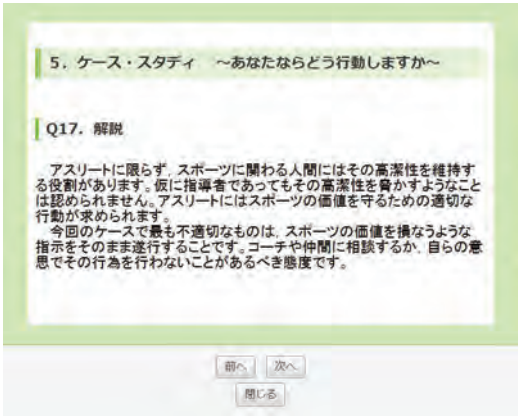


図14 manabaを利用したコンテンツPC画面

図15　manabaを利用したコンテンツスマートフォン画面

③ 評価

体育学部科目の体育方法学・実習（野外教育）履修者、体育方法学・実習（野外教育）2履修者、野外教育論・実習履修者で2020年1月～2月に開催された学外実習に参加した学生114名に対し、実際にプログラムを実施した。実施後に、「Q. このプログラムを通じて、学生アスリートがどのような意識で学校生活を送ればよいのか、理解できましたか？」「Q. このプログラムの問題の内、自分にとって特に重要だと感じた問題、新たな発見だった問題を教えてください。」「Q. これからこのプログラムで学んだことを活かして、学生生活を送ることができると思いますか？」「Q. このプログラムを受けた感想をお聞かせください」の4項目からなるアンケート調査を行った。結果は以下のとおりである。

【対象者】　体育方法学・実習（野外教育）履修者
体育方法学・実習（野外教育）2履修者
野外教育論・実習履修者

【回答者数】　114名

【平均得点】　86.4点

【結果】

今回、学外実習参加者の114名を対象に実際にプログラムを実施したところ、平均点は86.4点であった。回答した学生は今後クラブ内で中心となって活動をしていく2、3年生が多く、ほとんどの学生が約85％の問題を正答することができていた。前述したように、今回のプログラムについては実際に起こりうる状況を想定したケース・スタディの設問を増やし、上級生としての在り方や上級生となり学生生活に余裕が出てきた際に陥りやすい状況、就職等の上級生ならではの問題等を想定し、より高度なプログラム内容であったが、正答率が高かったことに加え、正答するまで次の質問に進めないという形をとったため、全員が正答してプログラムを終えている。このシステムを採用することで、より望ましい行動規範について、全員に周知することができると捉えている。

【アンケート回答】

以下の結果は、「Q. このプログラムを通じて、学生アスリートがどのような意識で学校生活を送ればよいのか、理解できましたか？」の質問を数値でまとめたもの、及び「Q. このプログラムの問題の内、自分にとって特に重要だと感じた問題、新たな発見だった問題を教えてください。」に対する自由記述の一部抜粋である。

プログラムの趣旨や今後の生活について「理解できた」と回答した学生が88名、「少し理解できた」が20名、「理解できた少し理解できた両方の記載」5名、「少し理解できたあまり理解できなかった両方の記載」1名、「あまり理解できなかった」「理解できなかった」が0名という結果であった。

この結果から、大部分の学生が本プログラムの実施を通じて、今後あるべき学生アスリートの行動規範を理解していることが確認できた。特に、「あまり理解できなかった」「理解できなかった」と回答した学生が0名であったに加え、重要だと感じた問題や新たな発見についての自由記述においても、ドーピングやSNS、ラフプレーといった設問に関する記述が多かったことから、普段の生活や部活動の中で起こりうるケース・スタディの設問を増やした今回のプログラムの有効性を検証できた。

Q. このプログラムを通じて、学生アスリートがどのような意識で学校生活を送ればよいのか、理解できましたか？（回答数 114）

回答	人数	%
理解できた	88	77.2
少し理解できた	20	17.5
理解できた／少し理解できた 両方記載	5	4.4
少し理解できた／あまり理解できなかった 両方記載	1	0.9
あまり理解できなかった	0	0.0
理解できなかった	0	0.0

Q. このプログラムの問題の内、自分にとって特に重要だと感じた問題、新たな発見だった問題を教えてください。（一部抜粋）

- 監督、コーチ陣の指示は基本的には遂行しなければならないが、明らかにおかしいと思った指示については、改めて確認をとったり、出来ませんと言える環境づくりが必要だと感じた。
- Q21　最近SNSが流行っていて、写真を撮ったら載せるのが当たり前になってきているから、個人情報などを注意しなければならないと改めて感じた。
- 結果を残すことは大事なことだが、それをドーピングで獲得するのは自分の力ではない為、よろしくない。もし、ドーピングなども、周りの人がダメだと分かっていても、見て見ぬ振りではなく、その人の人生まできちんと見据えなければならないと考えた。
- Q24　誰一人取り残されることなく幸せに暮らすことができる持続可能な社会づくりという考え方が、素敵だと思った。
- Q22　いつも服用している薬だからと無意識に服用するのではなく、医師に相談することが必要であり、服用する薬には最新の注意を払わなければいけないことがわかった。常に自己判断に任せてしまっていたため。
- Q10　理由スポーツだけやっていれば許されるという甘い考えを持ってはいけない。学生である以上、親のお金を借りて勉強していることを忘れずに、学業に取り組むべきだと思った。
- Q5　学生アスリートは成績とか関係ないと思っていた。
- Q15　理由 監督やコーチの指示は基本的に従うべきだが、なんでその指示なのか普段から考えて行動して意見を言うことが大切だと感じた、また、その中で不適切ない指示を受けた場合は、自分から口にするか、周りの大人や、友達に助けてもらい、いけないことはしないようにすることが、重要だと感じた！
- 学生アスリートとして、競技だけではなく、それ以外のところもしっかりやる事が大切である事。

- ただ先輩や指導者の言うことを聞くのではなく、やってはいけないことをしっかりと区別し、アスリートとしてだけでなく、人間として成長を行えるようにしていくこと。
- Q24　グローバル社会になっているから、より一層意識を高めることが重要。
- Q24　SDGsを達成するための行動で、スポーツでも役に立つことができるんだと知ることができた。
- Q22　分かっていながらも、市販薬の薬を飲んでしまうことがあるから気をつけたい。
- 学生アスリートとして、スポーツだけでなく学生として学業の面でもしっかり取り組み両立することが大切なんだということを学びました。
- 基本的な問題。横断歩道とか、ラフプレーとか、いじめとか、単純な問題が重要だと感じた。
- Q9　学生でありアスリートでもある私達は、2年次に20歳を迎えます。成人を迎えて、自分の行動に責任を持たなくてはならない。自らを律して行動することはもちろんの事、今後の社会に出た時の知恵になっていくと感じた。
- Q17　ラフプレーの指示など、監督が、やってはいけない行為を指示してきたときに、断り、他の指導者などに相談することの大切さが重要だと感じた。
- Q17　自分だけが上に行くだけじゃなく、リスペクト精神を持たなきゃダメだ。
- 周りがこうしているからこうすると言うように、周りに流されないことが、大事だと分かった。下の学年の立場が低いなどから、よくない伝統やルールは断ち切って、過ごしやすい生活環境を、自ら作り上げていくべきである。
- 日本の育成面やチーム内での上下関係面での問題や、監督コーチに対する問題点が、まだまだ多いと感じました。

以下は、「Q. これからこのプログラムで学んだことを活かして、学生生活を送ることができると思いますか？」の質問に対する回答である。「思う」と回答した学生が92名、「少し思う」が1名、「思う少し思う両方の記載」が19名、「少し思うあまり思わない両方の記載」が1名、「あまり思わない」が1名、「思わない」が0名という結果であった。

この結果から、ほぼ全ての学生が、プログラムを通じて、今後の学生生活の在り方を理解できていたことが分かった。「あまり思わない」と回答した理由については、「当たり前な質問だと思った」との回答があり、部活動のリーダーとなる学生向けのより高度な内容のプログラムやe-ラーニングに加えて、集合型の研修等を追加したプログラム検討の必要性も感じられた。

Q. これからこのプログラムで学んだことを活かして、学生生活を送ることができると思いますか？（回答数 114）

回答	人数	%
思う	92	80.7
少し思う	1	0.9
思う／少し思う 両方記載	19	16.7
少し思う／あまり思わない 両方記載	1	0.9
あまり思わない	1	0.9
思わない	0	0.0

「あまり思わない」「思わない」と回答した理由を教えてください。

- 当たり前な質問だと思った

Q. このプログラムを受けた感想をお聞かせください（一部抜粋）

- 常に自ら考え行動する事の大切さを感じた。
- 自分は大学生であり、部活動の上級生でもあることを自覚し、それに恥じない行動を心がけていきたいと思いました。
- 様々な事が学べて改めて「なるほど」と思わされる事があり、勉強になり自分のためになりました。
- スポーツを教育に取り入れることにより、いい事がより一層増えることがわかった。またスポーツマンとしての、様々な対処法や注意の仕方など、改めて考え直すことができた。
- 学生スポーツをする上で重要なポイントや改めて理解したことなど、色々なことを学ぶことができるプログラムでした。この内容を忘れずに学生スポーツを送っていきたいと考えるとともに、将来、教員や指導者の立場になった時も、学生スポーツのあり方を指導していけたらいいなと思いました。
- スポーツについて改めて考える機会になり、私たちはスポーツ選手である前に学生なのだから、やるべき最低限のことをまずはおこなっていく必要があると、改めて感じることができた。
- 今まで深く考えてこなかった学生アスリートの在り方について、理解することが出来た。今まで指導者は絶対などと言われてきたが、それは間違いということにも、気づくことができたので良かったです。
- このプログラムを受けて、いくつか間違えてしまった問題もあった。間違えた問題は、今後自分や周りの人がやってしまわないように気をつけたいと思った。
- 新たな発見をし、知識を増やすことが出来ました。
- スポーツをするにあたって、スポーツだけではなくいろんな面で手本にならないといけないと感じました。
- スポーツの存在価値を改めて実感することができた。公正な方法でスポーツを楽しんでいかなければならないと考えた。
- このプログラムは、アスリートとしてでなくとも大切なことだと思うので、自分が周りに注意喚起できるようにこれから行動していく。
- 今の時代は体罰やハラスメントなどが多く、部活動に関しては特に対応が難しい。自分の指導が正しいのかどうか、子どもたちの反応を見て安全を第一に考えて取捨選択することが大切だと感じた。
- 見て見ぬふりをしそうな自分がいたので、そこで踏ん張って立ち止まって、合っている方へ導きたい。自分自身も相手も。
- 改めて世界におけるスポーツの存在の大きさを感じた。文化や言語が違う人々が心を通じ合わせる手段のひとつとして、スポーツは大きな役割を果たしていると思った。
- わかっているけど、戸惑ってしまった問題もあったので、もう一度確認することができたので、とてもためになりました。日頃からこのようなことを忘れずに行動していきたいです。
- 私達は大学生であるので、まず大学生として当たり前のことをやった上で、スポーツができるということを忘れてはならないと改めて感じた。
- より一層、自分のスポーツと真摯に向き合って、感謝の気持ちを忘れずにやって行こうと思えた。
  様々な問題に対して考え行動するということが重要であることが理解できた。
- 改めて、学生という自覚を持たないといけないことを再認識させられました。そのうえで、アスリートとして、トップを目指していきたいと思いました。
- 国士舘の部活にも当てはまる所があり、改善していく必要があると思う。
- 間違ったことに間違っていると言える気持ちや、善悪を正しく判断する力が必要であると感じた。

- 学生アスリートとしてではなく、1人の人間として生活していけば、特に問題はないと思いました。アスリートだから特別扱いされるなどではなく、みんなが平等にスポーツに取り組める環境になってくれればいいと思いました。
- 当たり前だが、ネズミ講を受けない事だったり、ドーピングに気をつけるなど、学生アスリートとしてもだし、大学生としてもアスリートとしても絶対にやってはいけないこと。改めて、こういう形でドーピングやネズミ講に関しての事をテストという形で出来たのは、良かったと思う。
- 知らなかったこともあったので、学生アスリートについてしっかり理解することができた。
- 社会で生きていくうえで、どれも大切なことだと思った。
- 改めて、部活動の良くない慣習を考え直さないといけないと感じたり、スポーツの意義について考えられて良かった。

【考察】

今年度は、上級生向けのプログラムとして、学生アスリートが身に付けるべき基本的な考え方や行動規範に加えて、事例問題の数を増やして、具体的な場面で正しい意志決定・行動選択ができるかどうかを大切にしてプログラム開発を展開した。

その結果、プログラムの内容を「理解できた」「少し理解できた」と回答した学生の割合が99.9%となり、また本プログラムの内容が学生生活に活用可能かどうかを問うた質問では「思う」「少し思う」と回答した学生の割合が98.2%で、ほぼすべての学生に理解可能で、学生アスリートとして学生生活を送ることに寄与しうるプログラムであったことが確かめられたといえる。

しかし、学生生活に本プログラムの内容を生かすことができると「あまり思わない」と回答した学生がごく少数ではあるけれども見られたことから、それらの学生がどのように受け止めていたのかを丁寧に見取ることが、次の課題として捉えられた。

(3) アクションプランB　総括

今年度は、我が国の大学スポーツをどのように捉え、どのような課題解決をしていけばよいのかについて、シンポジウムを通して確認し、学生アスリートにどのような教育を行い、どのように彼らを導くことが望ましいのかについて、上級生向けの教育プログラムを開発して検討した。

上記の取り組みから、全体の方向性やその方向の妥当性を確認することができたが、今後は、「目の前の」学生が抱える状況を、どのように見取り、どのように指導者や仲間が対応していくことが望ましいのか、より具体的な場面に対応しうる、言い換えれば、より学生一人一人の個に応じた対応ができるように、その視点や仕組みを検討することが求められる。次年度以降の課題としたい。

スポーツ倫理への取り組みに関する実態調査と指導プログラムの開発事業実施体制及び協力者

＜スポーツ・エデュケーショナル・ディレクター＞

細越　淳二　（文学部 教授）

＜スポーツ倫理・人格形成・キャリア支援WGメンバー＞

スポーツアドミニストレーター

田原　淳子　（体育学部 教授）

WGスタッフ

入澤　充　（法学部 教授）

松井　慎一　（体育学部 教授）

関根　明伸　（体育学部 教授）

永吉　英記　（体育学部 准教授）

河野　寛　（文学部 准教授）

秋葉　茂季　（スポーツ・システム研究科 研究科助手）

松崎　鈴　（スポーツ・システム研究科 研究科助手）

＜外部協力者＞

友添　秀則　（早稲田大学 スポーツ科学学術院 スポーツ科学部 教授）

関根　正美　（日本体育大学 体育学部 教授）

3 今後の展望について

(1)「国士舘スポーツ」の展望

令和元年6月5日に公表された「学校法人国士舘第2次中長期事業計画」には、「国士舘スポーツの振興」について明記されており、その中には、国士舘スポーツプロモーションセンターを中心に、本学園のハード・ソフト両面の資源を活用し、「国士舘スポーツ」を推進するということが記載されている。当該センターは、今回の委託事業の成果を活かし「国士舘スポーツ」を推進に向けて、「国士舘スポーツ」の「する」「みる」「ささえる」「まなぶ」の好循環を生み出すスポーツ・アドミニストレーション機能の強化を図り、次のような具体的な取り組みを計画・立案・実行していく。さらに「国士舘スポーツ」を軸として大学・地域・社会を活性化させ、大学スポーツのイノベーターになることを目指す。

① 学生アスリートサポート体制(KOKUSHIKAN Athlete Total Support)

今年度まで委託事業で取り組んできた「安全・安心」「スポーツ倫理」の分野をさらに発展させるとともに、パフォーマンスサポートによる競技力の強化等を含む「学生アスリートサポート体制(KOKUSHIKAN Athlete Total Support)」を構築し、学生アスリートへの総合的な支援の体制を確立し、一人でも多くの優秀な人材やオリンピアンの輩出を目指す。この体制は、国士舘だからこそ実施可能なサポート体制であり、アスリートのみならず、アスリートをサポートする人材を育成できることから、それらを目指す学生の入学者増が期待できる。このサポート体制を充実させるために、地域住民やOB・OG、企業等の協力を得て、外部資金の獲得も目指す。

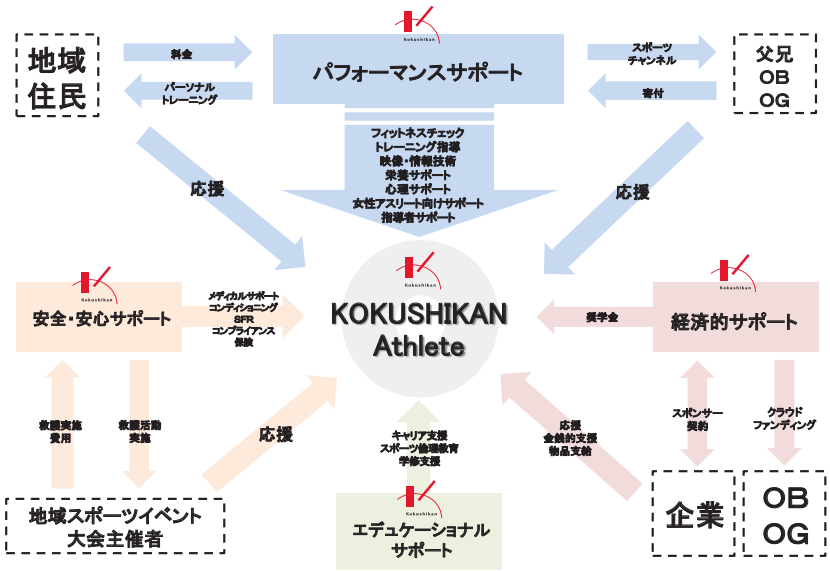


図16　KOKUSHIKAN Athlete Total Support

② 国士舘スポーツコミュニティプロジェクト(仮称)

本学が有するスポーツに関する資源を生かして、地域活性化(経済成長、健康増進)に具体的に貢献する「国士舘スポーツコミュニティプロジェクト(仮称)」に取り組む。

現在、本学スポーツ施設を会場として、幅広い年齢の方が受講できるスポーツ講座を実施しており、令和元年度は8競技18講座(柔道、剣道、空手道、シンクロナイズドスイミング、水泳、新体操、レスリング、相撲)を開講。秋期(春期・秋期の二部構成)の受講生は300名を超え、希望者が殺到するほど人気となっている。このような国士舘の資源を活用して地域住民に対してスポーツの「する」を提供している。

当プロジェクトでは、地域住民に対して「スポーツエンターテイメント」を提供する。本学のいくつかのクラブと他大学や近隣のプロチームとの対抗戦を行い、地域住民が集まり、それを観戦する。また、会場の外では、地域の商店街や企業ブースの出展、スポーツに関連したイベントを行い、観戦以外でも楽しめるような、スポーツイベントを開催する。企業、自治体等の協力を得て、地域活性化に向け、「スポーツエンターテイメント」の取り組みを検討する。また、国士舘で選手のレベルに合わせて、国内・海外から武道の体験希望者(年少者も含む)を受け入れ、本学のスポーツ資源を活用してインバウンド拡大を目指す。受け入れた海外の方々には地域と協力し、観光やイベントも企画し、地域経済の活性化にも貢献する。

③「スポーツとSDGs」国際プロジェクト

SDGs（国連が推進する持続的発展に係る目標群）を踏まえ、ENGSO Youth（欧州非政府スポーツ機構・青少年部門）が計画しているアフリカ・アジア・欧州における指導者研修等のプロジェクトに、国内唯一の機関として参画する。当プロジェクトは、参画する諸国の組織と共同で、スポーツを通した持続可能な開発分野での知識、能力を高め、地域社会で取り組む若者に権限を委ねられるようにすることや、東京2020以後の青年スポーツ教育を支援するレガシー活動を生み出し、そうした取り組みをダカール2022及びパリ2024の事前教育活動に結びつけることなどを目的としている。

当プロジェクトを通じて、当該センターは国際的イベントへの参画による教育・研究の質的向上、学生アスリートや指導者のグローバルな人格形成・陶冶等を図る。

④ 国士舘スポーツチャンネル

大学スポーツへの一般学生・卒業生・保護者を含む応援文化の醸成を目指し、スポーツを中心とする映像コンテンツを制作し、3キャンパス（世田谷・町田・多摩）に設置したデジタルサイネージで配信している。コンテンツ制作等に関心がある学生を対象として、デジタルアーカイブクリエータの資格講習を実施し、運動部所属の学生を含み、学生主体で企画・運営・作成・発信することにより、学生のコミュニケーションスキルを養うとともに、運動部の意識改革を図り、観てもらうスポーツへの転換を促進することを意図している。また、高校のスポーツ指導者や本学を志願する高校生にも視聴してもらうことで、国士舘大学のブランド価値の向上に役立てることも目的としている。

令和2年度は、学生主体での映像コンテンツの作成を推進するとともに、YouTubeでの配信を開始し、学生、保護者、OB･OG等を中心にチャンネル登録数3,000名（学生数の25％程度）を目標とし、国士舘スポーツチャンネルの定着を目指す。

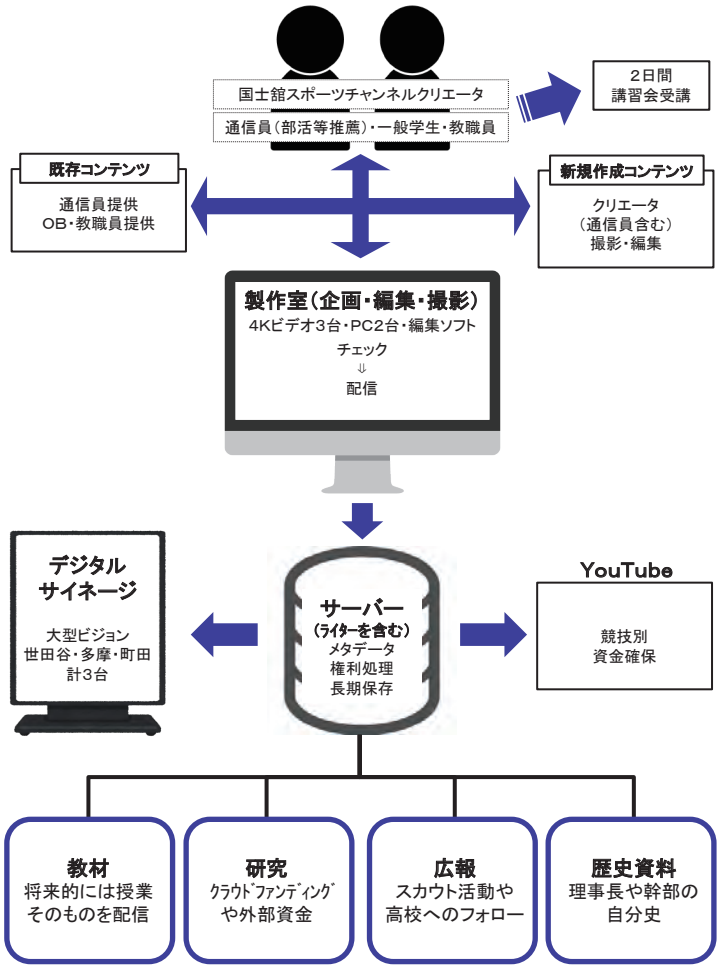


図17　国士舘スポーツチャンネルコンテンツシステム図

別紙 1

業務日誌

業務日誌

勤務者		

日付　令和　　年　　月　　日（　　）

クラブの活動状況

武道棟	□ 柔道部　□ 剣道部（男子）　□ 剣道部（女子）
体育館棟	□ レスリング部　□ ハンドボール部（男子）　□ ハンドボール部（女子） □ 新体操部（男子）　□ 新体操部（女子）　□ 空手道部（男子） □ 空手道部（女子）　□ バレーボール部（男子）　□ バレーボール部（女子） □ 体操競技部（男子）　□ 体操競技部（女子）　□ バスケットボール部（男子） □ バスケットボール部（女子）
野球場	□ 準硬式野球部
ラグビー場	□ ラグビー部　□ アメリカンフットボール部
多目的グラウンド	□ ソフトボール部（男子）　□ ソフトボール部（女子）
陸上競技場	□ 陸上競技部（男女）　□ 陸上競技部（駅伝）（男女）

点検・確認

～17:45	17:45～18:00				18:00～21:15		21:00～21:15			
入室	着替え	日誌確認	救急車の点検	資器材の点検	クラブ活動状況	WBGT測定	救急車の片付け	資器材の片付け	清掃	空調・電気・施錠

救護対応件数

全対応件数	救急車搬送	病院搬送・案内	ベッド休養	処置のみ
件	件	件	件	件

特記事項

気候　（18:00　現在）		
天気	気温	ＷＢＧＴ
	℃	℃

確認印		

別紙２

救急車・資器材表

資器材点検表

	点検日		/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
救急車	電灯類・マイク	–															
	ガソリン	–															
	ナビ	–															
	ドライブレコーダー	–															
	ストレッチャーカバー	1															
	酸素ボンベ	1															
	酸素ボンベ圧力計	1															
	スクープストレッチャー	1															
	ヘッドイモビライザー	1 セット															
	固定ベルト	3															
	リザーバー付フェイスマスク	1															
現場急行	ネックカラー	1															
	血圧計	1															
	鼓膜体温計	1															
	鼓膜体温計カバー	1箱															
	ペンライト	1															
	聴診器	1															
	SpO2モニター	1															
	腋窩体温計	1															
	非接触型体温計	1															
	シューズカバー	4															
	ターニケット	2															
	絆創膏	1箱															
	ガーゼ	10															
	ワンタッチパッド (L)	2															
	ワンタッチパッド (M)	2															
	ハサミ	1															
	紙テープ	1															
	サージカルテープ	1															
	爪切り	1															
	ピンセット	1															
	とげ抜き	1															
	エラスコット包帯 M	2															
	三角巾	2															
	嘔吐袋	2															
	入定用紙	1															
	サムスプリント 18 inch	2															
	AED(FR3)	1															
	FR3モニター用コード	1															
	FR3モニター用パッド	1															
	バックバルブマスク	1															
	フェイスタオル	1															
赤バック	聴診器	1															
	うちわ	1															
	ゴミ袋	3															
	SCAT3チェックシート	1															
	ネックカラー	1															
	入定用紙	1															
	救護記録用紙	1															
	不救護同意書	1															
	近隣医療機関情報	1															
	サムスプリント 18 inch	4															
	サムスプリント 36 inch XL	2															
	ヒヤロン	10															
	手袋	10															
	シューズカバー	6															
	塩飴	5															
	ブドウ糖	5															
	水	2															
	アルファーゼ	1															
	バンテージ　胸用	2															
	バンテージ　足用	2															
	ワセリン	1															
	サムスプリント 36 inch	2															
	ティッシュ	1															
	ガーゼ	20															
	ワンタッチパッド (L)	3															
	ワンタッチパッド (M)	3															
	三角巾	3															
	ハサミ	1															
	爪切り	2															
	ピンセット	1															
	とげ抜き	2															
	紙テープ	1															
	サージカルテープ	1															
	キレイキレイ	1															
	エラスコット包帯 S	2															
	エラスコット包帯 L	2															
	アルミシート	7															
	コップ	10															
	嘔吐袋	18															
	OS-1	2															
	ラップ	1															
	トリアージタッグ	100枚															
青バック	フェイスタオル	9															
	ガウン　M	1															
	ガウン　L	1															
	吸引器	1															
	ヤンカー型吸引カテーテル	2															
	14Fr 吸引チューブ	2															
	布担架	1															
その他	ゴーグル	2															
	iPhone	1															
	車いす	1															
	マスク	1箱															
	箱　手袋 (L)	1箱															
	クーラーボックス	1															
	折り畳みベッド	1															
	バスタオル	3															
	WBGT計測器	1															
	通信ヘルメット	2															

2019.10.30 更新

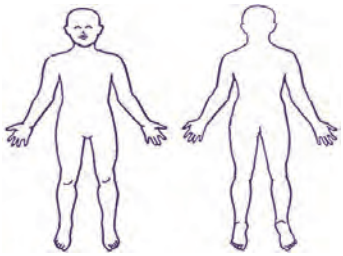
別紙３

救護対応記録表

救護対応記録表

NO.　1　－

日 時	令和　　年　　月　　日（　　）									
本人情報										
氏名(フリガナ)	氏名　　フリガナ（　　）									
性別・生年月日	男 ・ 女　　T・S・H　　年　　月　　日　（　　歳）									
住 所	都 / 道 / 府 / 県　　市 / 区 / 町 / 村　　丁目　　番　　号									
電話番号	（　　）	学部・学科（学籍番号）	（　　）	所属クラブ						
救護対応情報										
現場急行 / 直来					学内対応のみ / 病院搬送 / 救急要請					
初期対応		入室	病院搬送			救急要請			対応終了時間	病院連絡・救急車要請者
覚知時間	接触時間	入室時間	病院 通報時間	現発時間	病院到着時間	119番 通報時間	救急隊 現着時間	救急隊 現発時間		
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	氏名
発生場所	国士舘大学多摩キャンパス ☐ 武道棟 ☐ 体育館棟 ☐ 教室・管理棟 ☐ 食堂棟 ☐ MCCT ☐ 教室・研究棟 ☐ 教室・実習棟 ☐ 野球場 ☐ ラグビー・アメリカンフットボール場 ☐ 管理A棟 ☐ いこいの森 ☐ 多目的グラウンド ☐ テニスコート ☐ 陸上競技場 ☐ 管理B棟 ☐ 管理D棟 詳細場所:									
現 病 歴	いつ ・ どこで ・ だれが ・ どうなったか									
主訴・症状										
処 置										
既往歴・アレルギー						内服薬				
かかりつけ医療機関						使用器材				
実施時刻	:	:	:	:	負傷部位症状記載					
意 識										
呼 吸										
脈 拍										
血 圧	／	／	／	／						
瞳 孔										
Spo2	%	%	%	%						
体 温	℃	℃	℃	℃						
備 考										
救急隊・隊長名						同乗者氏名				
搬送先病院						科 目				
オンライン相談	要請時間　　時　　分　☐ 指示要請　☐ 助言要請　医師名:　　傷病名: 指示内容:									
備 考										



救護対応者　氏名

別紙4

救護活動検証記録

救護活動検証記録

年　　月　　日
症例番号　１ －

救護対応者名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
傷病者名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
傷病者所属＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【検証１　記載内容　（事務員確認）】
１．　記載確認（該当事項に✔）
☐傷病者氏名　☐住所　☐性別・年齢
☐症状・主訴　☐現病歴　☐救急救命処置
☐使用資器材　☐転帰　☐バイタルサイン
☐救護対応者氏名　☐その他：

検証実施日：20＿＿年＿＿月＿＿日　　検証実施者：（自筆署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【検証２　救急救命士による検証（活動内容）】　担当：スポーツ・アドミニストレーター
１．救護活動について（該当事項に✔）
①　観察：☐適切　☐やや不適切　☐不適切
②　処置：☐適切　☐やや不適切　☐不適切
③　搬送：☐適切　☐やや不適切　☐不適切
指摘事項など：

２．病状判断について（該当事項に✔）
①　緊急度・重症度判断：☐適切　☐やや不適切　☐不適切
②　病状判断：☐適切　☐やや不適切　☐不適切
③　病院選定（救急搬送依頼の判断を含む）☐適切　☐やや不適切　☐不適切
指摘事項など：

３．全般的に特記事項なし☐、あり☐（自由記載）

検証実施日：20＿＿年＿＿月＿＿日　　検証実施者：（自筆署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【検証３　医師による検証】　担当：スポーツ・メディカル・ディレクター
１．救急活動について：☐適切　☐やや不適切　☐不適切
①　やや不適切（該当事項に✔）：☐観察　☐処置　☐搬送
②　不適切（該当事項に✔）：☐観察　☐処置　☐搬送
指摘事項など：

２．病状判断について：☐適切　☐やや不適切　☐不適切
①　やや不適切（該当事項に✔）：☐緊急度・重症度判断　☐病状判断　☐病院選定
②　不適切（該当事項に✔）：☐緊急度・重症度判断　☐病状判断　☐病院選定
指摘事項など：

３．全般的に特記事項なし☐、あり☐（自由記載）

検証実施日：20＿＿年＿＿月＿＿日　　検証実施医師：（自筆署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

別紙5

学生アスリートのスポーツ倫理教育推進に向けたシンポジウム

■ 主催者挨拶

大澤　英雄
学校法人国士舘　理事長
国士舘スポーツプロモーションセンター
チーフ・スポーツ・ディレクター

皆さんこんにちは、この会場は収容定員 350 名ですので、会場が埋まらなかったらどうしようかと思いましたが、座れない方が出るくらいでほっとしました。

約 2 年前から、強化育成を含めた大学スポーツの活性化について、これで良いのかという色々な問題を国が取り上げてくださって、現在この形ができています。

2018 年、2019 年度の 2 年間にわたってスポーツ庁からの援助をいただきまして、色々それに見合う本学の特徴を活かした活動事業をこれからの展開のために検討してきました。

本日はこの後のシンポジウムで、色々貴重なお話を拝聴できます。冒頭申し上げた、この会場が満員となりほっとしたというのは、教職員の方々も若干おりますけれど、ほとんどが、学生、現役アスリートの皆さんです。やはり皆さんに一人でも多く、こういったお話を伺えるまたとない機会にこれだけ詰め掛けてくださったことに学園の理事長として、感謝を申し上げます。

今日は天気も良いので、どこかへ出掛けたい気持ちもあったでしょう。しかしながら、ここへ来てくださった方は 1 年分の知識を豊かにすることができる、その自負を一つもって、最後まで頑張ってください。

この壇上からで申し訳ございませんが、鎌田先生、ご多忙の中、本当にありがとうございます。この後、基調講演をいただく、鎌田先生は一般社団法人大学スポーツ協会 UNIVAS の会長であり、先程冒頭で申し上げました、大学スポーツはこれで良いのか、ということのテコ入れのために発足した UNIVAS という、アメリカの NCAA、大学スポーツ協会の日本版を立ち上げるというところでのお仕事をされています。一番先頭を走っておられ、色んな問題を解決しながら現在も進めていただいております。

この鎌田先生をはじめ、先生方の貴重な話を伺えることを私も非常に楽しみにしております。

本日のシンポジウムのテーマは、わたくし、常々に考えております。スポーツ選手というのは技と体力と精神力、これが全て満点でもダメです。一番大事なのは知恵です。物事の良し悪しをしっかりと判断できる知性というものは絶対に必要です。

そういった意味で、このシンポジウム、学生の皆さん、しっかりと先生方の考え方を拝聴し、そして、もし何かあったらどんどん質問していただければ、これはまたとない皆さま方の糧となる機会になることと期待しております。

少々長くなりましたが、これで挨拶を終わらせていただきます。

■ 基調講演

「UNIVASの役割と今後の展開、学生アスリートの倫理観形成に向けて」

鎌田　薫　一般社団法人大学スポーツ協会　会長

皆さんこんにちは。只今ご紹介いただきました、鎌田でございます。

本日は先ほど大澤理事長からご紹介がありましたように、国士舘大学が続けていらっしゃいました「スポーツ倫理・教育に関するワークショップの開催及び教育プログラムの開発事業」の成果発表となるシンポジウムで発言の機会を与えていただいて、大変嬉しく思っているところでございます。大学スポーツ協会 UNIVAS としましても、このシンポジウムの後援者に名を連ねさせていただいているところでありますけれども、UNIVAS が目指しているところは、大学スポーツに携わっている方々、これはトップアスリートに限らず、大学スポーツを経験した人たちがその経験を踏まえて、一般的な社会人として、模範的な市民という尊敬を集めていく。それが自身の価値を高めるだけでなく、そういう人たちが社会全体をリードしていくことを通じて、スポーツの社会的評価を高めると同時に、日本社会の足元をしっかりさせていくことになる。こういった役割を大学スポーツ・学生アスリートが果たしてくれることを目指して、活動を進めているところでございます。倫理教育そのものについて直接のお話は、この後のシンポジウムで充分展開されると思いますので、UNIVAS が全体として何を目指しているのか、何をしているのか、という点を中心にお話ししたいと考えております。

最初に、大学スポーツが、日本のスポーツシーンの中でどんな役割を果たしてきたか、ということを駆け足で見ていきたいと思います。

わたくし、早稲田大学出身ですから、どうしても大隈重信に肩入れするのですが、大隈重信もまずスポーツ等を通じて体をしっかり鍛えなさい、その後に倫理とか学識というものを形成していけばいいのだということを強調しています。

同じように、福沢諭吉も慶應の先生方がよく引用されますが、「先ず獣心を成して後に人心を養う」といっています。このように、明治初年には、西洋に追いつき追い越せという富国強兵政策の中で、日本人が体格的にも非常に西洋に劣っており、丈夫な体を作り、その体の上に知育・徳育を重ねていくべきだ、という認識がかなり幅広く形成されていたと思います。

こうした認識を前提にして大学を中心に、様々な新しいスポーツといいますか、西洋近代スポーツを導入してまいりました。

野球は旧制一高、現在の東京大学、サッカーは師範学校、現在の筑波大学から始まりました。ラグビーは慶應、ボートは早慶レガッタ、バスケットボールは YMCA から早稲田、立教、一橋から始まりました。アメリカンフットボールは 1920 年の一高、高等師範と書いていますけれど、1920 年頃、まさに国士舘ゆかりの、岡部平太先生がアメリカンフットボールを日本に紹介しました。このように、大学が近代スポーツを導入し、定着させるという非常に大きな役割を果たしました。最近では、ラクロスも慶應大学が先頭で始まりました。大学スポーツがあって初めて、新しいスポーツが日本で定着していると、こういう役割を果たしています。

それは今、近代的なスポーツを日本に紹介しただけではなく、理論・技術、こういうものも大学が先頭にたって色々輸入をしてきました。

お金をとってスポーツをやるということも野球から始まり、慶應がハワイのチームを招いて有料試合の開催をしたというのが初めてでした。日米の対抗試合も、早稲田が戸塚球場で行ったのが初めてでした。

それから、現在台湾では野球が大変盛んですが、これも早稲田の野球部が台湾に行って野球を定着させたというように、輸出にも貢献しています。

そして、スポーツの人気という点では、我田引水ですが、早慶野球戦が代表です。リンゴ事件というのも起きましたし、非常に応援が加熱して試合を中止する、中止せざるを得ないというような盛り上がりが何度もありました。

1929 年には早慶戦を見るためのハガキの申し込み枚数が 230,000 枚という大変な人気になりました。戦後も 1946 年に早慶野球戦が復活するということで、戦後のスポーツも大学スポーツが牽引をしました。1960 年の早慶 6 連戦では 6 試合で 380,000 人の観客を動員しております。

しかし、現在の大学スポーツの人気は、その頃と比べ低調といいますか、非常に低下する傾向を辿っています。

東京六大学の観客導員数ですけれども、1978 年は、1 試合平均で 22,000 人の動員数、早慶戦だけに限ってみると、1 試合平均で 52,000 人の観客動員数がありましたが、今年の春は全試合で 320,000 人。1 試合平均 8,000 人で、早慶戦は 1 試合平均 19,700 人というようなところまで低落しています。ラグビーは早明戦が 1982 年には 66,999 人動員しました。これは国立競技場の定員を上回っており、大変な人気がありました。そこから 40,000 人台、20,000 人台と減っていきます。2013 年には国立競技場の取り壊しで、国立競技場での最後の早明戦というので両校がとにかく総力をあげて観客動員して、46,000 人が入りましたが、今年はワールドカップの後でラグビー人気が高まっている。しかも早稲田と明治の全勝対決でしたが動員数が 22,000 人ということですから、全体としては、大学スポーツは凋落の傾向にあります。

これを大きな流れで見れば、黎明期に大学がスポーツを導入した。そしてそれを普及させ昭和になると大いに大学スポーツが発展した。しかしその後、プロ化あるいは実業団スポーツというのが隆盛を極めることになって、大学スポーツは徐々に影響力を低下させてきているということができようかと思います。

これを項目別に整理していくと、競技の主役がプロや社会人に変わってきた。それと団体競技はあまり人気がない、特に大学スポーツの場合は毎年メンバーが変わってしまうので、毎年強いということはなかなか実現できない。個人競技では 4 年間その人が活躍してくれるので個人競技の方がまだいいとなります。

それから、これが非常に大きいと思っていますが、かつては 2 年間体育実技が必修でした。それが選択科目化されてスポーツをする学生が減ってきています。そして、東京では特にスポーツ施設が郊外へ移っており、キャンパスから離れていくので、体育会の選手達が練習しているのを一般学生が見る機会がなく、その距離がどんどん広がってしまっています。体育実習が必須だった頃は、体育会の学生が体育実技の指導も補助をしており、常に接点がありましたが、そういうのがなくなっていった。スポーツ入試制度の導入・発展では、特待生的な学生は普通の人とは違うという、距離感が出てきました。大学に入学してからラグビーを始めて国立競技場に出るなどというルートがだんだんなくなって、セミプロ的な選手がやるものというような認識も広がってきました。

モラルの面においては、社会全体として、ハラスメントを撲滅するという意識が広く深く浸透

していっている中で、大学スポーツに関してはそこが少し欠落している。あるいは遅れていた、ということが顕在化して、マスコミで取り上げられています。不祥事が起きると、今日もマスコミの方がおいでですが、非常に大きく報道されます。あまり褒められる記事は書かれないのですが、駄目だということはテレビでも非常に大きく取り上げられるという様なことがあり、イメージの悪化には貢献しますが、自分もやってみようという魅力を失わせている。このような状態の中でどうやって大学スポーツを活性化していくかということが大きな課題になります。

組織的な面では、中学校は中体連、高校は高体連がありますが、大学はこういう組織がありません。社会人になれば様々な競技団体があります。大学スポーツについては、各大学に運動部があり、各スポーツ種目に学連というものがありますが、大学間を繋ぐ組織はない。それから競技団体を繋ぐ組織もありません。いわば、それぞれの競技のタコツボ化で、例えば、ある種目では水も飲まずに死ぬほど練習するのが昔からの伝統だ、ところが、他の運動部では非常に科学的なものを取り入れた合理的練習をしているというような、他からの影響を受けにくい構造があるというように思います。

大学の中をみますと、学校法人あるいは学校法人が設置する大学と各運動部・体育会との関係というのが極めて不透明・不明確なままになっているところが多いです。多くのでは、運動部は課外活動であり、「正規の授業と関係ありません。彼らは勝手にやっています。」という様なことを不祥事が起きた時に正面切って言ってしまう。つい先日のある事件ではある大学の学長さんがそういう風なことを言ったことに対して政府与党は激怒して、そんなこと言うなら私学助成を全部撤廃するとか言われて、毎日のように永田町に行って議員さんに頭を下げて歩くということになりました。何か不祥事を起こすと謝りにいくのは大学です。マスコミに叩かれるのも大学です。大学と運動部や学連等の競技団体との関係はどうあるべきなのかということが非常に重要な課題ですが、まだ明確な原則は存在してないように思います。

大学の運動部の中を見ても組織的には今いったような問題があります。その上、会計も学生が1年交代でやっているのでマネジメント、あるいはガバナンスが非常に不徹底です。監督、コーチ等についてはOBにお願いして、ボランティアでお願いすると、監督、コーチが事故の加害者になることもありますが、被害者になった場合に、どのように救済の方策があるのかという点も、非常に危うい状態であります。日常的な運営も主務、あるいはマネージャーが1年交代でやっており、こういう各大学のスポーツ部の活動は、OBにも支えられていますけれども、同じ大学の学生達のサポートも重要です。そういうものとの関係が希薄なままである、あるいは明確でないということも大きな問題であると思います。

そこでUNIVASというのが、様々な課題に答える一つの手段として、大いなる期待を集めて発足したわけであります。発足に至るまでの経緯を大雑把にまとめました。

第一段階としては大学スポーツの振興に関す

る検討会議というものがあり、第二段階としては日本版 NCAA 創設に向けた学産官連絡協議会があり、第三段階で日本版 NCAA 設立準備委員会が立ち上げられました。いずれもスポーツ庁内での検討ですが、その 3 年半の検討を踏まえて本年 3 月 1 日に UNIVAS が発足しました。

その第三段階での提言ですが、国の機関ではなく民間の法人として設立する、自主的な参加の機関である、学連の既得権は犯しません、というところから出発しています。これまでは学連がいろんなスポーツを支えてきたわけですから、そういうものを徐々に統合し、統一化していくという現実的な路線となっています。収入は自主的に獲得していきましょう、というのが基本方針であります。

それから、学産官連絡協議会というのが開かれました。わたくし、第一回の協議会の登場人物として書いてありますが、これに出たきりで、あとは何をやっていたか全然知りません。

第二期スポーツ基本計画というところで、日本版 NCAA の設立に向け、スポーツアドミニストレーターを配する大学数を 100 大学とすることを目標にしています。スポーツアドミニストレーターを設ける、そしてその活動に期待するというのが、この国士舘にスポーツ庁から委託されたもので、国士舘において先導的な役割を果たして研究展開しているところです。

日本版 NCAA 設立準備委員会に 106 大学と 26 団体が加わって議論が詰められて、その議論を踏まえて、今年の 3 月に設立されました。

UNIVAS の設立理念は、大学スポーツの振興により卓越性を要する人材を育成し、大学ブランドの強化および競技力の向上を図る。そして我が国の地域・経済・社会のさらなる発展に貢献する。これを目標としていますが、その根底には大学でスポーツをしている学生一人ひとりが自己成長を遂げていくことが一番重要な理念として存在しています。学生という文言が明示されていないのが、不十分さを感じさせるのですが、書かなくてもそれはそうなのだとご理解いただければと思っています。トップアスリートである前に一人の市民としてまず自己を確立することが重要であり、地域・経済・社会の発展ということが結果として出てくることを目指しております。

現在、UNIVAS の加盟校は 222 です。日本には 780 くらい大学がありますが、そのうちの 222 が参加しています。加盟競技団体は 34 団体で、大きな団体として、陸上競技、サッカーなどが加盟していないのが課題となっています。

役員体制は、執行体制の中で、これから確立していかなければなりませんが、今までの準備委員会で活躍された先生方が中心で、大学スポーツ協会というわりに大学代表者があまりいないというのが一つの問題で、大学が中心的役割を果たすようにさらに強固に結集していくことが必要だと思います。

その下に 5 つの委員会を作って、具体的なプログラムを展開しています。その活動の内容ですが、大きな課題は組織体制の改革です。これはガバナンス・コンプライアンスの問題です。教育関係では、学業を充実させていくこと、そして学生一人ひとりが安全・安心に競技、練習に打ち込めるような環境を整備していくことが主な目標になります。資金の獲得はパートナーシップ契約によって獲得してくるということであります。

初年度にやるべき項目として 15 項目を挙げています。大きくデュアルキャリア教育的な側面、安全安心の確保、それから UNIVAS、あるいは大学スポーツ団体としての事業展開、データベースの開発などにグループ分けできます。

女性アスリートに対する手当というのは今まで弱かった。どこの大学でも、男子部員には立派

な合宿所がありますが、女子部員用は少なく、練習が終わると、家に帰ってカップラーメンを食べているような状況もあって、女子アスリートをもっと手厚く保護していかなければならない。

次に、いくつかの具体的な内容を紹介していきます。研修会を全国 6 カ所で開催いたしました。管理者の研修、指導者の研修、それから技術面でのスポーツについて専門的な研修も行っており、今後さらにこれを充実させていく予定です。

入学前教育プログラムは、スポーツ推薦で入学する学生は勉強しない、大学の授業についていけないということなどを周りから言われないように、入学前教育を含めて、入学前の様々な教養教育、倫理教育を含めて体制を整えて、入学したら一般の学生と対等以上に学業に専念できるようにしましょうというような事業を開始しているところであります。

相談窓口は、先進的な大学は既にハラスメントやその他の問題について自分の大学の中に相談窓口等を整えていると思いますが、まだできていない大学もありますし、自分の大学に苦情を申し立てられると、どんなしっぺ返しくらうか分からないという心配もあります。ハラスメント関係ではそういう心配があるので UNIVAS の中に相談窓口を作って、そちらを駆け込み寺として利用していただくことで日本全体の大学スポーツの健全化に資することができるようにしようということで、これもすでに発足しております。

それから医療従事者の配置は、低い確率ではありますけど、試合で怪我人が出ている。怪我人が出てどうしようかとアタフタしないように、それぞれの試合・大会に医療従事者を配置して対応する。怪我を放置したために非常に重篤な結果になるということを避けようということで医療従事者を配置するための事業をやっておりますので、活用して貰えればと思っています。

データベースの開発は、学生アスリートにどんな人がいて、何をやっているのかっていうことが自分の大学の中ですら分からない、といったことがないわけではないですし、大学別、それから競技種目別に学生アスリートのデータベースを整え、さらにそれを活用して、より良い練習環境、競技環境、教育環境、そして学習環境を形成していけるようにしていきたいということで、データベースの構築を進めているところであります。

競技横断大学対抗戦という UNIVAS CUP の開催を始めました。UNIVAS が主催して何か大会をするという力はありませんが、「野球なら全日本大学野球選手権」といった既にあるものをどれか一つ指定してもらって、それの順位を点数化して、それによって大学のランキングを作っていくということであります。これを総合的なものだけでやると総合大学ばっかり上にいきますので、地方別とか規模別とかいう形できめ細かく順位をつけることで、自分たちのポジションを確認しさらなる励みに繋げます。順位は大会が一つあるごとに変わっていきます。現在のポイントでいくと、国士舘は総合 14 位です。これも何かの大会で優勝するとポンと順位が上がるというようなことになっています。ただ、ここの順位は加盟大学だけですから、加盟していない大学、例えば慶應とか明治は加盟していませんから、早稲田は、早明戦に負けても順位が維持されます。陸上競技やサッカーは加盟していないので、陸上競技、サッカーで優勝してもそのポイントは入らないという発展途上のランキングですけれども、これも皆さんの励みにしてもらえればと思っています。

動画配信は 735 試合を動画で配信しました。そのうち、202 試合はライブ配信でございます。マイナースポーツでも、ここにアクセスしてもらえれば、家族・友人・恋人に見てもらえます。現在、123,000 人が視聴をしておりますし、それぞれの

映像をプールしてありますので、過去の試合も見てもらえるような形にしています。この公式サイトユーザーは、年齢は若年層が中心、それから約半数近くが女性です。デバイス的にはスマホを通じて視聴している人が８割だということで、こういうものを通じて学生アスリートの皆さんの家族等に見てもらえて、情報を共有できます。

UNIVAS アワードという年間褒賞で、いくつか項目があり、すごく活躍して金メダルとったということだけでなく、一生懸命学業にも専念したというようなこと、あるいは、もっと幅広い活動に貢献をしたという風なことを表彰することで、総体的に大学スポーツの振興につなげていきたいとこのように考えているところです。

日本版 NCAA を目指そうといわれてきましたので、ここで NCAA は一体どういうものかっていうことを説明していきたいと思います。

米国の NCAA は全ての大学が加盟しているわけではなく、1117 の大学が加盟しております。チーム数では 19,750 とそういう大きい組織であります。

何より日本と違う、羨ましいところは、大学スポーツの市場規模は８千億円、NCAA の収益は１千億円というこういう非常に巨大な市場であって、アメリカはプロスポーツの国ではありますが、プロスポーツをはるかに凌ぐ巨大市場になっております。収益の８割以上は放映権です。UNIVAS は放映権料をもらっているのではなくて、払って動画を流させて貰っているということで、NCAA とは決定的に違います。放映権料でも NCAA は世界的なプロスポーツに匹敵する価値を持っており、年間平均 816 億円というようなことであります。

NCAA は、何より大切な学修、健全、公正さを優先させ、アスリートとしてだけでなく、市民として成功し、そして社会から尊敬を受けることを目的としています。

早稲田大学について自画自賛を含めてお話させていただくと、早稲田も大学スポーツの未来の志向して、これからの大学スポーツのモデルを目指して、2000 年頃から、大学をあげてスポーツの振興を目指した改革を進めて参りました。

早稲田アスリートプログラム（ＷＡＰ）というものを作りましたが、その理念は UNIVAS の理念と大きく重なっています。この早稲田アスリートプログラムの目的は、優れた競技成績や勝利の追及だけでなく、文武両道を高いレベルで実現し、様々な分野で活躍できる人材を育成していくというものです。プログラムの内容は、なにより人格陶冶を重視し、競技力向上だけではなく、市民としての自己を確立していき、それを通じてキャリア形成をしていく。サッカーがプロ入りが一番早いのかもしれませんが、プロになるために大学に入らず、18 歳でプロ選手になったが、19 歳で解雇され、次は何も人生の目標がないというようなことが起きないわけではない。そうだとすると、その次に新たな学びをする、あるいはスポーツの実技面以外で勝負をする手段をもっている人を育てていかないと本当のスポーツパーソン、優れたアスリートの育成にはなりません。

そして、様々なところで引用させてもらっていますが、数年前に中国のある体育大学の学長が、オリンピックで金メダルを取るような人が学位を取って、そして市民として非常に尊敬を受ける、このようにしていかないとこの国のスポーツは発展しないとおっしゃっていました。オリンピックに出るような人は、世界ランキングを上げなければいけませんから、学校に行く時間がなく、単位が取れない、そして学問をあきらめるという様な事がありましたが、これを改善するために、教員がアスリートの遠征先に行って授業をして単

位を取らせているようなことまでやっていますと。早稲田大学はそれだけの財力はありませんが、その代わりに、例えば羽生結弦君はカナダで活動していますが、e-ラーニングシステムで恒常的に双方向型の勉強をしてもらっています。トップアスリートのデュアルキャリア教育のために、日本サッカー協会とかＪリーグ選手ＯＢ会、それからプロ野球選手会、プロゴルフ協会といったところから、委託を受けて、e-ラーニング（通信教育課程）を提供しています。このようなことは、トップアスリートがデュアルキャリア教育を受けながら安心してスポーツに打ち込むために、発展させていくべき内容だと考えています。それから、スポーツは根性でやるものじゃなくて、科学的な基礎の下で実施するものである、というのが最近のスポーツでありますので、スポーツ関連の諸科学と統合することで科学に根差したスポーツの将来像を実現する。競技スポーツだけでなく、市民の健康を維持していくためのスポーツの役割というものも、重視していきたいと考えております。

そして社会連携ですが、企業と連携することで活動資金を得るということだけではなくて、大学のスポーツが地域に貢献していく、社会に貢献していくということをやっています。東北復興支援等のイベントだけで、のべ数千名の体育会の運動部員を東北へ送ったり、毎年東伏見で地元市民向けのスポーツフェスタを開催したりしております。

東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けては、大学がアスリートの派遣だけではなく、オリパラを支えるボランティア、その他スタッフの派遣、海外チームのサポートなどで支えていくことも重要であると考えて、オリンピック・パラリンピック事業推進室を作って活動しています。

早稲田大学が目指しているところは、UNIVAS もそうであり、それぞれの大学もそうあって欲しいと願っているのですが、組織体制の整備、それから育成プログラムを充実させることであります。そういうところで全国のモデルになっていきたいと考えています。それからグローバル人材の育成、スポーツを通じて、国士舘でも国士舘のスポーツを通じて、学生全体が一体感をもち、母校への誇りとなるものをつくっていく。これが大学スポーツの大きな役割だと思っています。あとは、産学官連携、健康スポーツ科学と競技スポーツとの連携等を進めています。

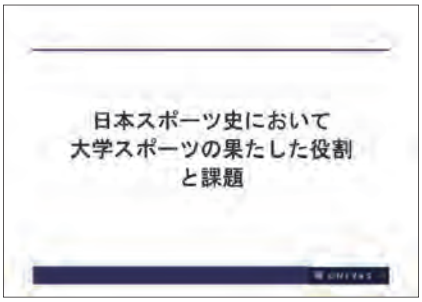
ガバナンスについては、何か不祥事が起きた後、どこが関係してくるのか、たいへん複雑になっています。直接の担当は、あるいは部の監督とか部長だと思いますが、本当に悪質な行為があって、「あいつを退学させろ」とかいうことが問題になると、体育会や体育各部には退学させる権利はなく、所属学部、最終的には、学長や理事会の決定で退学させるとなります。教員が悪いという時には、これは理事会の決定で、解雇していくということになりますが、そういう大学・学校法人の対応は学連・競技団体の制裁とはまた全く別の系列で流れているわけです。それを課外活動だからといって、部活動と大学･学校法人との間に壁を作ると、ガバナンスが効かないですし、なぜ普段何にも言うことを聞かない学生のために学長や理事長が頭を下げなくてはいけないのかという問題も起きてしまいますので、全体として本当はどういう形が望ましいのか検討が必要です。こうした入り組んだ関係の中に UNIVAS が入ってくると、どこに位置づけられるのか、ますます複雑化して面倒なことになると言われないように、むしろ、UNIVAS の存在により、大学スポーツ界全体のガバナンス体制がきちんとしたものになり、それぞれの大学の特性を維持しながら望ましいガ

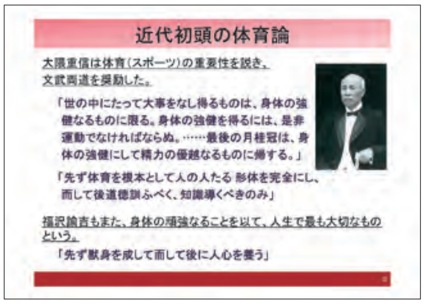
バナンス体制を構築するための、標準的な姿を提示していくということがこれからの最も重大な課題だと考えています。AD センターは、設置さえすれば全部解決するものではありません。日常的なコントロールはできますが、色んな権限行使が、最終的には大学、理事会、あるいは学連というところに集約されていかなければいけないので、それらとの関係をどう整理するかはまだまだこれからの課題であると思っています。

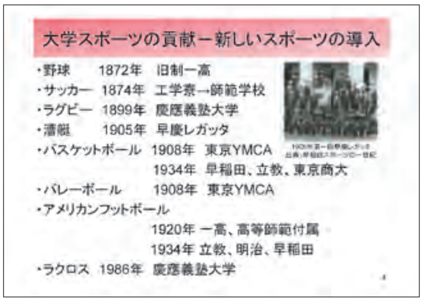
皆さまは様々なところで聞いていると思いますが、現在の日本社会は、大きな構造変化の時代に差し掛かっています。そしてこれからもっと早いスピードで変わっていくと言われています。2011 年に小学校に入学した子どもが大学を出るときには、その半分以上は、今は存在しない職業に就くと予測されていますから、今ある産業構造を前提にした知識を詰め込んでも卒業したら使う場所がない、あるいは使う場所があっても、5 年 10 年で変わるので、ただ知識を詰め込んでも意味がありません。どんな事態に出会っても、グローバルな視点を持ち、そして価値観の異なる多様な人々と適切なコミュニケートを取って、知識でなくて知恵で、そして志で、そして実行力を発揮して未来を切り拓いていける人を育てていかなくてはいけません。それは大学 4 年間だけではなくて、一生それを続けていく基礎となるようなスキルとマインドを身に付けさせること、これが大学教育の根幹に据えられなければいけないと思っています。その為には、単に教室に座ってノートを取っているだけでは駄目なので、多様な学生が切磋琢磨し、現実社会に触れて、そこから様々なことを学びとり、自分で分析していくというようなことを何度も繰り返していく必要があります。こうした観点からみると、強靭な体力、迅速な判断力、不屈の精神、倫理観、規律を守る姿勢、そして協調性、こういうものを涵養するスポーツの果たす役割は極めて大きいと考えます。これを課外活動で、正課授業の外でやりたい人が勝手にやっているだけですよと突き放すのではなく、大学の将来を担うもっとも重要な教育の柱であるという位置づけにしていくことが必要です。その意味で競技スポーツは極めて重要ですが、その競技スポーツの中で無批判に上からの指示に隷属する従属的な間を養成していくとすると、今言ったことと全く逆の結果になってしまいますから、運動部が自己改革を続けながら、これからの大学教育、あるいはもっと幅広い意味での人間教育の根幹を担っていく。そういう実態を大学スポーツ界が形成していくことに UNIVAS としても頑張っていきたいです。こういうものは上から命令して作っていくのではなく、学生達が主体になって作り上げていく、そういう雰囲気を醸成していかないと、絶対に成功はしないと思っておりますので、国士舘大学のみなさん、ぜひそういう方向で頑張っていって頂き、UNIVAS もご支援いただければということをお願い申し上げて、雑駁な話でありましたけれども、わたくしの講演を終わらせて頂きます。

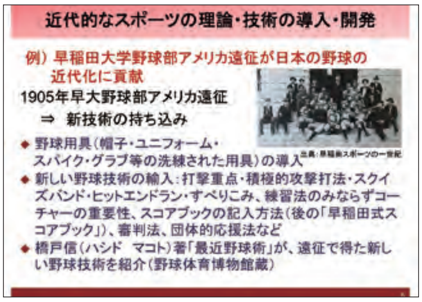
ご清聴いただきまして、ありがとうございました。

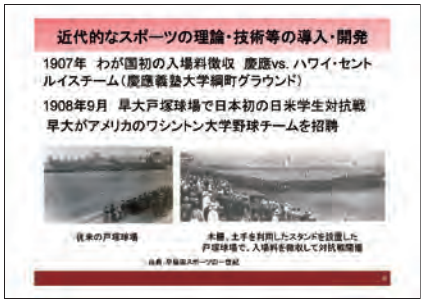
UNIVASの役割と今後の展開
学生アスリートの倫理観形成に向けて
国士舘大学スポーツプロモーションセンター
「学生アスリートのスポーツ倫理教育推進
に向けたシンポジウム」
2019年12月8日
一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）
会長 鎌田 薫
UNIVAS

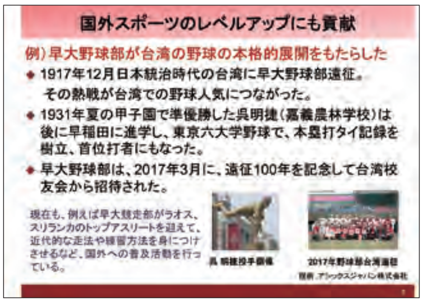

日本スポーツ史において
大学スポーツの果たした役割
と課題
UNIVAS


近代初頭の体育論
大隈重信は体育（スポーツ）の重要性を説き、
文武両道を奨励した。
「世の中にたって大事をなし得るものは、身体の強健なるものに限る。身体の強健を得るには、是非運動でなければならぬ。……最後の月桂冠は、身体の強健にして精力の優越なるものに帰する。」
「先ず体育を根本として人の人たる 形体を完全にし、而して後道徳訓ふべく、知識導くべきのみ」
福沢諭吉もまた、身体の頑強なることを以て、人生で最も大切なものという。
「先ず獣身を成して而して後に人心を養う」


大学スポーツの貢献ー新しいスポーツの導入
・野球 1872年 旧制一高
・サッカー 1874年 工学寮→師範学校
・ラグビー 1899年 慶應義塾大学
・漕艇 1905年 早慶レガッタ
・バスケットボール 1908年 東京YMCA
1934年 早稲田、立教、東京商大
・バレーボール 1908年 東京YMCA
・アメリカンフットボール
1920年 一高、高等師範付属
1934年 立教、明治、早稲田
・ラクロス 1986年 慶應義塾大学


近代的なスポーツの理論・技術の導入・開発
例）早稲田大学野球部アメリカ遠征が日本の野球の近代化に貢献
1905年早大野球部アメリカ遠征
⇒ 新技術の持ち込み
◆ 野球用具（帽子・ユニフォーム・スパイク・グラブ等の洗練された用具）の導入
◆ 新しい野球技術の輸入：打撃重点・積極的攻撃打法・スクイズバンド・ヒットエンドラン・すべりこみ、練習法のみならずコーチャーの重要性、スコアブックの記入方法（後の「早稲田式スコアブック」）、審判法、団体的応援法など
◆ 橋戸信（ハシド マコト）著「最近野球術」が、遠征で得た新しい野球技術を紹介（野球体育博物館蔵）
出典：早稲田スポーツの一世紀


近代的なスポーツの理論・技術等の導入・開発
1907年 わが国初の入場料徴収 慶應vs. ハワイ・セントルイスチーム（慶應義塾大学綱町グラウンド）
1908年9月 早大戸塚球場で日本初の日米学生対抗戦
早大がアメリカのワシントン大学野球チームを招聘
従来の戸塚球場
木柵、土手を利用したスタンドを設置した戸塚球場で、入場料を徴収して対抗戦開催
出典：早稲田スポーツの一世紀

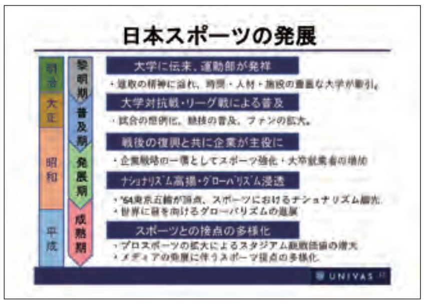

国外スポーツのレベルアップにも貢献
例）早大野球部が台湾の野球の本格的展開をもたらした
◆ 1917年12月日本統治時代の台湾に早大野球部遠征。その熱戦が台湾での野球人気につながった。
◆ 1931年夏の甲子園で準優勝した呉明捷（嘉義農林学校）は後に早稲田に進学し、東京六大学野球で、本塁打タイ記録を樹立、首位打者にもなった。
◆ 早大野球部は、2017年3月に、遠征100年を記念して台湾校友会から招待された。
現在も、例えば早大競走部がラオス、スリランカのトップアスリートを迎えて、近代的な走法や練習方法を身につけさせるなど、国外への普及活動を行っている。
呉 明捷投手銅像
2017年野球部台湾遠征
提供：アシックスジャパン株式会社

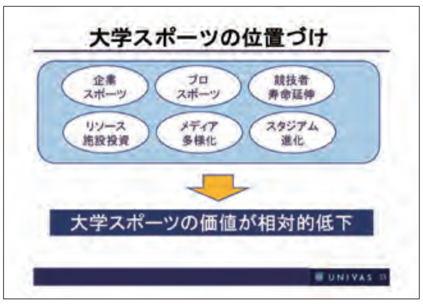
大学スポーツがスポーツ人気を牽引（戦前）
◆ 1906年 早慶戦、両校学生の加熱により、中止。
◆ 1925年 早慶戦復活
◆ 1929年春： 熱狂的なファンの出現
（徹夜組の出現、入場券の抽選制⇒ハガキ申込23万枚）
★早慶野球戦が日本スポーツ界の最大のイベントとなる
1925年復活した早慶戦（戸塚球場）
1933年早慶戦 りんご事件
出典：早稲田スポーツの一世紀

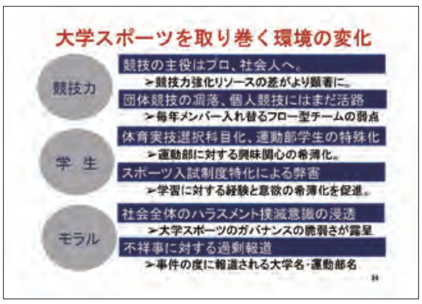
大学スポーツがスポーツ人気を牽引（戦後）
◆ 1946年春：東京六大学野球再興
神宮球場が米軍に接収され後楽園球場で実施
早慶戦はファンが前夜から詰めかけて溢れかえる
◆ 1960年秋：早慶6連戦 6試合で合計38万人
試合終了と同時に翌日の試合観戦のため切符売り場に長蛇の列、徹夜組も多数。
5試合を投げ抜いた安藤投手
出典：早稲田大学野球部百年史（下巻）

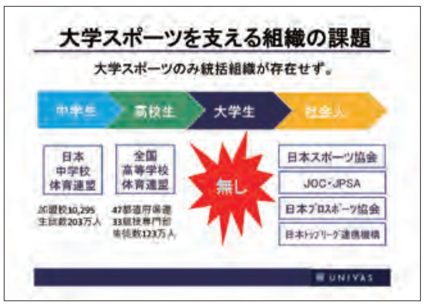
しかし、一部の大学スポーツで人気に翳り？
【東京六大学野球観客動員数】
シーズン 試合数 総観客数 一試合平均 早慶戦平均 特記事項 優勝
1978春 37 841,000 22,730 52,500 早慶戦2試合 江川卓選手4年生 法政
2007春 32 378,500 11,828 26,000 早慶戦3試合 斎藤佑樹選手入学 早稲田
2019春 40 320,500 8,013 19,700 早慶戦3試合 明治
1973年春東京六大学リーグ戦優勝
出典：早稲田大学野球部百年史（下巻）
2017年春東京六大学リーグ戦
提供：早稲田スポーツ新聞会

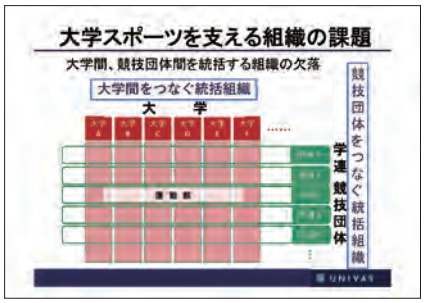
大学スポーツの低迷が当該スポーツ全体の人気衰退をもたらすリスクも
【ラグビー早明戦】
◆ 歴代最多：1982年早明戦 66,999人（有料入場券販売数）
◆ 2007年：42,679人
◆ 2008年：25,710人
◆ 2013年： 46,961人 国立競技場最後の早明戦
◆ 2019年：22,987人（秩父宮）ワールドカップ後 全勝対決
2013年国立最後の早明戦
2019年ラグビー早明戦


日本スポーツの発展
明治
大正
昭和
平成
黎明期
普及期
発展期
成熟期
大学に伝来、運動部が発祥
・進取の精神に溢れ、時間・人材・施設の豊富な大学が牽引。
大学対抗戦・リーグ戦による普及
・試合の恒例化、競技の普及、ファンの拡大。
戦後の復興と共に企業が主役に
・企業戦略の一環としてスポーツ強化・大卒就業者の増加
ナショナリズム高揚・グローバリズム浸透
・'64東京五輪が頂点、スポーツにおけるナショナリズム顕在化
・世界に目を向けるグローバリズムの進展
スポーツとの接点の多様化
・プロスポーツの拡大によるスタジアム観戦価値の増大
・メディアの発展に伴うスポーツ接点の多様化
UNIVAS

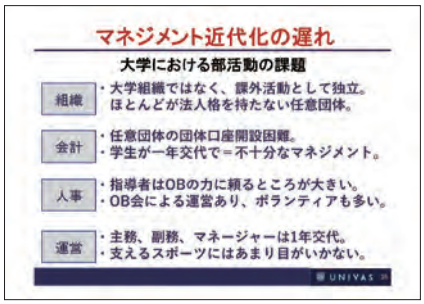

大学スポーツの位置づけ
企業スポーツ
プロスポーツ
競技者寿命延伸
リソース施設投資
メディア多様化
スタジアム進化
大学スポーツの価値が相対的低下
UNIVAS


大学スポーツを取り巻く環境の変化
競技力
競技の主役はプロ、社会人へ。
➢競技力強化リソースの差がより顕著に。
団体競技の凋落、個人競技にはまだ活路
➢毎年メンバー入れ替るフロー型チームの弱点
学 生
体育実技選択科目化、運動部学生の特殊化
➢運動部に対する興味関心の希薄化。
スポーツ入試制度特化による弊害
➢学習に対する経験と意欲の希薄化を促進。
モラル
社会全体のハラスメント撲滅意識の浸透
➢大学スポーツのガバナンスの脆弱さが露呈
不祥事に対する過剰報道
➢事件の度に報道される大学名・運動部名

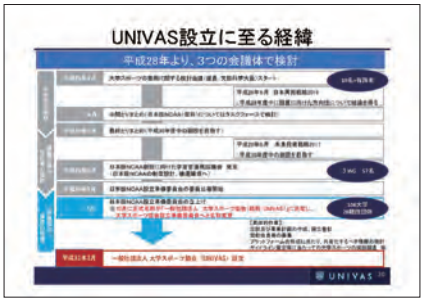

大学スポーツを支える組織の課題
大学スポーツのみ統括組織が存在せず。
中学生
高校生
大学生
社会人
日本中学校体育連盟
全国高等学校体育連盟
無し
日本スポーツ協会
JOC・JPSA
日本プロスポーツ協会
日本トップリーグ連携機構
UNIVAS

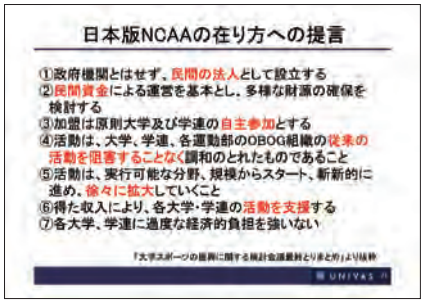

大学スポーツを支える組織の課題
大学間、競技団体間を統括する組織の欠落
大学間をつなぐ統括組織
大学
競技団体をつなぐ統括組織
学連
競技団体
UNIVAS

大学における運動部の位置づけ
部活動は課外活動と位置づけられ、各運動部等及び体育会・学友会等は、ほとんどが大学からは相対的に独立した任意団体で、大学のガバナンスが不徹底。
体育会・学友会
運動部
学校法人
任意団体
UNIVAS


マネジメント近代化の遅れ
大学における部活動の課題
組織
・大学組織ではなく、課外活動として独立。
ほとんどが法人格を持たない任意団体。
会計
・任意団体の団体口座開設困難。
・学生が一年交代で＝不十分なマネジメント。
人事
・指導者はOBの力に頼るところが大きい。
・OB会による運営あり、ボランティアも多い。
運営
・主務、副務、マネージャーは1年交代。
・支えるスポーツにはあまり目がいかない。
UNIVAS

UNIVAS設立に至る経緯
UNIVAS


UNIVAS設立に至る経緯
平成28年より、3つの会議体で検討
UNIVAS

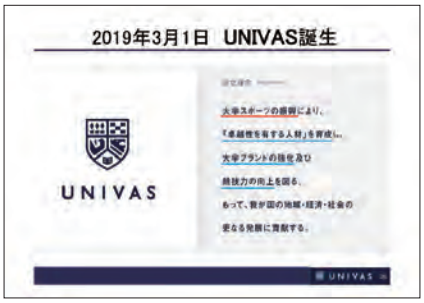

日本版NCAAの在り方への提言
①政府機関とはせず、民間の法人として設立する
②民間資金による運営を基本とし、多様な財源の確保を検討する
③加盟は原則大学及び学連の自主参加とする
④活動は、大学、学連、各運動部のOBOG組織の従来の活動を阻害することなく調和のとれたものであること
⑤活動は、実行可能な分野、規模からスタート、新新的に進め、徐々に拡大していくこと
⑥得た収入により、各大学・学連の活動を支援する
⑦各大学、学連に過度な経済的負担を強いない
「大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ」より抜粋
UNIVAS

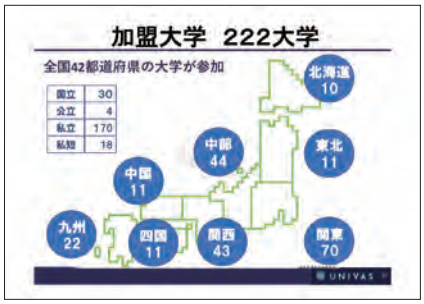
学産官連携協議会での検討
日本版NCAA創設に向けた学産官連携協議会について
日本版NCAA創設に向けた学産官連携協議会
（1）学業充実ワーキンググループ
（2）安全安心ワーキンググループ
（3）マネジメントワーキンググループ
UNIVAS

第2期スポーツ基本計画
大学のスポーツ資源の活用
数値目標
100大学
具体的な施策
UNIVAS

日本版NCAA設立準備委員会参加団体
UNIVAS

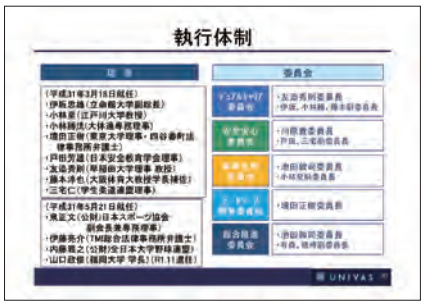
UNIVASの設立
UNIVAS


2019年3月1日 UNIVAS誕生
UNIVAS
大学スポーツの振興により、
「卓越性を有する人材」を育成し、
大学ブランドの強化及び
競技力の向上を図る。
もって、我が国の地域・経済・社会の
更なる発展に貢献する。
UNIVAS


加盟大学 222大学
全国42都道府県の大学が参加
国立 30
公立 4
私立 170
私設 18
北海道 10
東北 11
関東 70
中部 44
関西 43
中国 11
四国 11
九州 22
UNIVAS

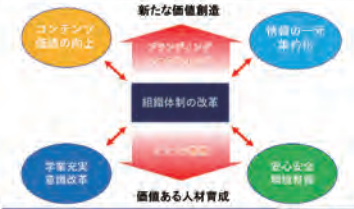
加盟競技団体 34団体
球技、水泳、武道・格闘技等多岐に渡る団体が参加。
UNIVAS

役員体制
UNIVAS


執行体制
委員会
UNIVAS

UNIVASの活動

UNIVASが取り組む５つのテーマ



パートナーシップの締結

金銭支援をいただき、共同事業を展開する契約を締結。

初年度から取り組むプログラム

#	実施プログラム	実施内容
1	管理者指導者研修の実施	全国6地域での研修会の開催
2	入学前教育プログラムの提示・支援	Eラーニング等のプログラムの提供
3	キャリア形成支援プログラムの提供	学生支援プログラムの提供
4	学業基準導入可能性の検証	実証3年の初年度としてデータ取得
5	学生の相談窓口の設置	相談窓口の稼働
6	地方大会助成（メディカル・運営）	助成金の支給、精算の完了
7	安全安心ガイドラインの提示	大学・学連へのガイドライン提示
8	事故・怪我予防事例研究	研究初年度としてのデータ取得計画
9	競技横断型大学対抗戦の開催	ポイント獲得型大会の開催
10	試合の動画配信（400試合継続）	600試合の配信実施
11	競技日程カレンダーの作成	カレンダーの公開
12	年間表彰の実施	表彰式の開催
13	データベース開発	データベース設計・構築と登録促進
14	スポーツ統括業務手引書の提示	手引書提示
15	学生アスリートとの対話会議の開催	全域大学アスリートとの間での対話の実施

1.全国6か所で研修会開催

DC委員会研修部会が主催し、全国6か所で研修会を開催、加盟大学から137大学のべ318人が参加。

◆研修会カリキュラム
［管理者対象］
・スポーツ統括部局の役割・学内研修会開催依頼
［指導者対象］
・危機管理とコーチング哲学・デュアルキャリア支援の必要性・学内研修会開催依頼
「UNIVASの理念と事業」を管理者・指導者共通で実施。

◆参加した管理者のプロファイル
・スポーツ専門部署は25.9%、学生部及び学生支援部署からが43.5%を大半を占めた。

◇全国6会場：東京・愛知・大阪・岡山・福岡・札幌にて加盟大学の施設をお借りして開催。
研修部会員11名に加え、会場実行委員等42名にて運営。

2.入学前教育プログラムの提供

学生アスリートの学業充実に向けて、入学前の準備が充実できる教育プログラムを作成、大学へ提供します。

○専門性の高い一一社企業（例マイナビ、河合塾グループ㈱KEIアドバンス）の協力を基に、UNIVASオリジナルカリキュラムも含み、スポーツ推薦入試にて入学予定の高校生を対象とした学習カリキュラムを設計。
○Eラーニングシステム等の活用により、入学前における準備教育を具現化。

プログラム	コンテンツ
(1) 入学準備	大学の理解と大学の学び（高等教育の理解等） 学生生活（高校生活との違い等） キャリアプラン（キャリアとは等） 大学スポーツのエピソード
(2) 学習支援	英語（中学の内容から英文法、英文解釈） 数学（中学の内容から数学ⅠA、ⅡB、Ⅲ） 学力判定テスト（プレ・ポスト） 国語（新聞記事等を読みレポート課題を提出）

◇(2)学習支援プログラムについては、学生の実情の把握と今後のカリキュラム開発に繋げる為のモデル校を募集。

5.UNIAVS相談窓口開設

10/7オフィシャルサイトに「UNIVAS相談窓口」を開設。ハラスメント問題等の相談受付を開始。

◆法律事務所と連携
・受け付けた相談は法律事務所の専門家が深刻度に応じて対応方針を決定します。
・深刻度が高い案件は、「UNIVASコンプライアンス委員会」にて対応策を決定します。
・解決策は、大学・競技団体と連携を行います。

○会員の意見を反映
開設に当たっては、事前に会員大学から意見を収集。いただいた33のご意見・ご質問を反映しました。

6.医療従事者等配置要請を募集

試合・大会の安全性を向上させる為の「医療従事者等の配置促進事業」の概要発表と募集を開始。

【事業内容（募集要項より）】
・内容：本事業は、UNIVASが会員大学・競技団体の主催する試合に医療従事者等を配置し、費用を負担するもの
・対象となる試合：①大学又はその運動部が主催する試合、②中央学生競技団体又はその関連地区学生競技団体が主催する試合
・対象の医療従事者等：
①医師、②医師以外の有資格保有者（看護師、理学療法士、柔道整復師、あん摩マッサージ指圧師、はり師・きゅう師、救急救命士）、③公認アスレティックトレーナー、④その他UNIVASが認めた資格の保有者
・配置費：
・配置費の基準単価＝①医師：上限6,250円/時（上限5万円/日）、②医師以外：上限1,250円/時（上限1万円/日）
・配置費の上限等＝①大学：上限20万円、②上限30万円（最大枠、競技団体は、対象試合及び医療従事者等を選定し申請する。

※今回は12/1～3/31の試合・大会が対象。4/1～の期間分は追って募集期間を設定。

8.データベース開発

第一フェーズでは学生アスリートの基礎情報の登録活用に着手。2020年2月からの登録を目指す。
➢競技団体への選手登録の電子化にて基礎となる情報を取得。
➢拡張の際は、利用サービス毎に改めて本人許諾を取得する。

9.競技横断 大学対抗戦 UNIVAS CUP2019

31競技31大会の結果で大学総合順位を競う大会。

UNIVAS会員31競技団体が開催する大会のうち各々大学日本一を決する31大会を設定。該当大会の順位に応じてポイントを獲得。ポイントの獲得総数により大学総合順位を決定。

［参加］・UNIVAS会員219大学
［対象］・UNIVAS会員31団体の指定31大会
［表彰］・上位大学は年度末に表彰
［広報］・大会毎のポイント獲得ランキングはUNIVASホームページにて発表。

9.競技横断 大学対抗戦 UNIVAS CUP2019

23競技終了、11/17時点の総合ランキング。
加盟222大学中、120大学がポイントを獲得。

順	大学名	P	変化
1	早稲田大学	9,663	→
2	日本体育大学	5,236	→
3	東海大学	3,665	→
4	近畿大学	3,047	→
5	山梨学院大学	2,885	→
6	大阪体育大学	2,309	→
7	立命館大学	2,317	→
8	東洋大学	2,203	→
9	東北福祉大学	1,980	→
10	関西大学	1,958	→
11	東京農業大学	1,856	→
12	福岡大学	1,835	→
13	法政大学	1,845	↘
14	国士舘大学	1,827	↘
15	中京大学	1,811	↘
16	環太平洋大学	1,590	↘
17	中央大学	1,461	→
18	桐蔭横浜大学	1,375	→
19	福井工業大学	1,343	→
20	城西国際大学	1,310	→

10.試合の動画配信

UNIVAS CUP指定大会の試合動画配信中！

◇735試合を動画配信
LIVE202試合・Highlight533試合
◇視聴者数
123千人

◇学生アナウンサーによる実況、学連幹部による競技解説を実施。

◇配信映像はUNIVASオフィシャルサイトでプールしており、何時でも視聴が可能。

10.試合の動画配信

UNIVAS公式サイトユーザー属性

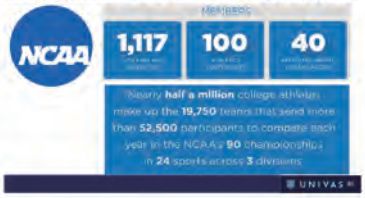
12.UNIVAS AWARD2019-20(年間表彰)

UNIVASの理念に即して著しい活躍をした学生、団体等をUNIVAS AWARDとして表彰。2020年3月表彰式開催。

参考1）NCAAの概要

NCAAの概要

米国NCAAとは。
National Collegiate Athletic Association　全米大学体育協会



UNIVAS

NCAAの概要

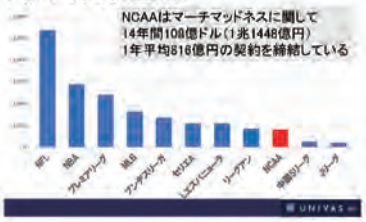
＜米国NCAAの市場規模＞
「大学スポーツ市場規模8,000億円」「NCAA収益1,000億円」
プロスポーツを凌ぐ巨大市場になっている。

その収益の約８割が放映権などの権利ビジネス

UNIVAS

NCAAの概要

参考）スポーツリーグ放映権料比較



UNIVAS

NCAAの概念

UNIVAS

参考２）早稲田大学の試み

早稲田スポーツの未来
～新たな大学スポーツのモデルになるために～

1. 早稲田スポーツの改革

2000年以降の改革は中長期計画の中にスポーツをしっかりと位置づけて始まった。

2008年「Waseda Next 125」
スポーツ国際交流、アスリート宣言の策定
2013年「WasedaVision150」
「WAP」、早稲田スポーツフェスタ開始
2014年スポーツ振興協議会答申書
明確な目標設定、強化費・指導者予算充実策

早稲田スポーツの未来
～新たな大学スポーツのモデルになるために～

2. WAP（早稲田アスリートプログラム）の実施
2014年度開始　全44体育各部（2700人対象）

1）目的
優れた競技成績や勝利の追及のみでなく、文武両道を高いレベルで実践し、様々な分野で活躍できる人材を育成する。

2）プログラム内容
・人格陶冶のための教育プログラム
　・アスリートとしての教養、キャリア形成支援、ボランティア、国際交流
・修学支援
　→4年間での卒業をサポート、成績優秀者の表彰

3）活動
・地域貢献活動：東伏見スポーツフェスタ
・ボランティア：東北復興支援

早稲田スポーツの未来
～新たな大学スポーツのモデルになるために～

3. トップアスリートへのデュアルキャリア支援

人間科学部eスクール（通信教育課程）、大学院スポーツ科学研究科等でトップアスリートのデュアルキャリアをサポート

＜eスクールでの実績（2016年度までの累計）＞
公益財団法人日本サッカー協会　53名
一般財団法人Jリーグ選手OB会　3名
一般社団法人日本プロ野球選手会　4名
公益社団法人全国野球振興会
（日本プロ野球OBクラブ）4名
公益社団法人日本プロゴルフ協会　5名
一般社団法人日本女子プロゴルフ協会 4名

早稲田スポーツの未来
～新たな大学スポーツのモデルになるために～

4. 早稲田の健康スポーツ研究
スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）
健康スポーツ科学拠点（スポーツ科学学術院）
従来の学問領域の中で個別に行われてきたスポーツの研究を統合

1）子ども・青少年の健全育成とスポーツ活動
2）スポーツ参加による中高年の健康増進
3）スポーツ環境構築のためのマネジメント方策
4）スポーツ技能向上の基盤形成

➡ 健康スポーツ科学と競技スポーツの連携

早稲田スポーツの未来
～新たな大学スポーツのモデルになるために～

5. 社会連携

1）（株）アシックスとの包括協定（2016年3月協定締結）
目的：スポーツ振興を通じた地域・国際貢献やブランド価値の向上を進め、教育界や産業界、国際社会の発展に寄与する
活動：本学への商品提供等の様々なサポート
共同研究の実施
本学構内にアシックスショップがオープン
地域連携や国際交流を含めた社会連携の実施

2）地域連携
スポーツフェスタin東伏見や東北復興支援イベントを開催

早稲田スポーツの未来
～新たな大学スポーツのモデルになるために～

6. 2020年オリンピック・パラリンピックに向けて

1）オリンピック・パラリンピック事業推進室を設置
（2016. 10）
①内外アスリートの育成
②オリンピック・パラリンピック教育の実施
③ボランティアの活性化（村誌・体験でも教育を実施）
④講演会や学会等の文化活動の実施　川淵塾（仮称）
⑤オリンピック・パラリンピックでの本学体育施設の利用

➡ 1）東京大会で32名以上の出場を目指す
2）早稲田大学の国際的プレゼンスの向上と稲門ネットワークの強化を目指す
3）東京オリパラ2020　イタリア選手団の受け入れ

早稲田スポーツの未来
～新たな大学スポーツのモデルになるために～

7. 大学スポーツにおける早稲田の役割

1）教育機関でもある大学スポーツの発展に向け、組織体制や学生アスリートの育成プログラムにおいて先駆的役割を担い、文武両道の教育体制を確立・牽引する。
2）大学スポーツの発展をリードすることで、「Waseda Vision150」等で掲げたグローバル人材の育成、早稲田の誇りの醸成を実現し、大学全体の発展に大きく貢献していく。
3）2020年東京オリンピック・パラリンピックやその後のレガシー構築に向けて、産学官のさらなる連携を進め、日本スポーツの発展に寄与する。
4）健康スポーツ科学と競技スポーツとの連携を密にして早稲田大学および早稲田スポーツのさらなる発展に繋げていく

ガバナンスの確立（重大事案への対応）

むすび－グローバル時代に求められる大学教育

大学は、グローバルな視点、価値観の異なる多様な人々と適切なコミュニケーションをとる能力、そして「知恵」と「志」と「実行力」、敢じていえば「人間力」を涵養し、生涯学び続ける姿勢と、その際に必要となる基本的なスキルとマインドを身につけさせることを教育目標としなければならない。

そのためには、教室内で知識を詰め込むことだけ絵は不十分であり、個性豊かで多様な学生が切磋琢磨するとともに、現実の社会における多様な経験を積み、未知の課題について自ら調査・分析し、新たな解決策を考え出し、その実現に向けて協働する機会を充実させることが必要

こうした観点からは、強靭な体力・迅速な判断力・不屈の精神力・規律を守る姿勢・協調性などを涵養するスポーツは極めて重要な役割が期待される運動部の活動も単なる「課外活動」ではなく、教育の中核をなすものと位置付け直す必要がある（運動部が無批判に指示に従い続ける隷属的姿勢を強いるのなら、それは逆効果）。

シンポジウム

「学生アスリートの倫理観形成に向けて」

「スポーツ庁が期待する望ましい「学生アスリート」像とは

増井　国光　スポーツ庁　参事官

みなさま、こんにちは。スポーツ庁で参事官をしております、増井と申します。今日はお招きいただきまして、本当にありがとうございました。

わたくしのスポーツ庁の担当は、スポーツを通じた地域振興、地域の活性化ということで、地方都市でのスポーツ大会誘致、合宿誘致、そして外国人観光客に日本でスポーツを楽しんでもらうというスポーツツーリズムや、体育館等の施設整備というものを担当していますが、この大学スポーツも担当していまして、昨年は例の大学のタックル問題というところの担当もしておりましたし、ポジティブな要素といたしましては、鎌田会長の方からもありました、大学スポーツ協会の設立準備に携わらせていただきました。今日はスポーツ庁が期待する望ましい学生アスリート像ということで、このテーマで今まで講演をしたことがなかったので、自分の頭の中の整理も込めて、簡単なイメージ図を作りました。私のプロフィールをご覧いただきますと、農林水産省にもともと入って、農作物を育成するというところをやっておりましたので、わかりやすいように木のイメージを作ってみたところでございます。

まず、学生アスリートが育っていく為に大事なのは、何でもそうですが、土壌環境です。しっかりとした畑、土を耕すというところかと思います。学生アスリートの成長の基礎的条件として大事なのは、学業との両立ということかと思います。

これまでの大学スポーツアスリートといいますと、どうしても練習や試合が優先されて、学業面で取り組む環境がなかった、どうしても試合や練習を優先することにより、講義に出られないなどが大きかったと思います。今後は学業とスポーツを両立できるようにすることが大学と学連、そして UNIVAS の役割のミッションの一つで、将来的には大学の学術スケジュールと学連の競技スケジュールを調整、摺り合わせしながらアスリートが授業に参加できるような日程を組む、あるいはどうしても授業に出られないときは、例えば遠征地や試合会場で、夜にインターネットで講義をできるような IoT のシステムを作る。インフラを含め、学業と両立できるような環境を作っていくということが大事かと思います。

次に、安全・安心な競技環境ということで、どうしてもスポーツというのは非常に事故とか危険性が伴うものであります。なるべく事故・事件が起こらないような体制を整えたり、教え方をする。そして、試合中に、医療従事者が主要な試合会場に張り付いて、何かあれば緊急出動できるような環境を作っていくということも、非常に大事かと思います。これが二点目で、UNIVAS がこれからひとつの事業の柱として取り組むということになっている部分であります。

三点目は、成長のカンフル剤ということで、基礎的な条件に加えて、大学スポーツを盛り上げていくということ。先程、鎌田会長から昔と比べると大分、大学スポーツというのは観る人もやる人も減ってきているということで、盛り上がりがちょっとという話がありましたが、盛り上がる仕組

みが重要です。表彰制度は、やっているアスリートが非常に盛り上がる。それから映像配信は、観ている人も実際観て応援しようと思える。そういう環境を作っていくことも非常に大事な取り組みかと思います。

学生アスリートがスポーツ活動参画を通じて成長していくわけですが、重要なのはアスリートが接している監督・コーチ、指導者といわれる方々です。これまで、どうしても体罰やパワハラ、それからコーチへの恐怖心といいますか上下関係、長時間練習、根性論、勝つことが最大の目的である、というところになりがちだったのかなと思います。これは大学スポーツに限らず、あらゆるスポーツの局面で起こっています。まさに最近色々と賑わしているような話に繋がるところでもありますが、監督・コーチの昔ながらの教え方で、自分が教わった成功体験というトラウマがどうしても抜けきれず、どうしても自分が教える立場に立つと、昔の発想で教えてしまうことが、日本のスポーツ界が抜けきらない部分です。これを変えていくところが大事だと思います。

まずはコーチングです。しっかりアスリートと向き合ってアスリートの能力を引き出すような教え方をする。それも競技力だけではなく、競技力を高めつつ、人間的な人格形成という二つのゴールを目指していくようなコーチングをやっていかなければならないということだと思います。

それから、スポーツって楽しくないとダメですよね。スポーツは元々楽しむというところからきている語源っていうのもありますので、楽しくないと長続きしないということだと思います。あとは自主性・主体性の尊重ということでコーチ・監督から教えられることや指示を待っているスタイルではなく、なぜ足りないのかというところの自己分析や自分で考えて気づき、そして改善していく自主性を尊重するスタイルも重要だと思います。学業とのバランスも大事です。

そしてスポーツ、大学スポーツに関わるゴールは、競技力、勝つということは大事であるというのは否定しませんが、最終的には社会に役立つ人間ということで人間力を高める、人格形成をするというところがゴールになります。ここをミッションとして、スポーツをやる意義としておかないといけないところだと思います。ここのプログラムを先ほどの鎌田会長からのスライド説明のとおり、まさに UNIVAS が指導者向け・コーチ向けの研修会などを通じて、様々な新しい考え方のプログラムを提供していきながら、徐々にこのスタイルを教え方の改革をやっていくというところが大事だと思います。

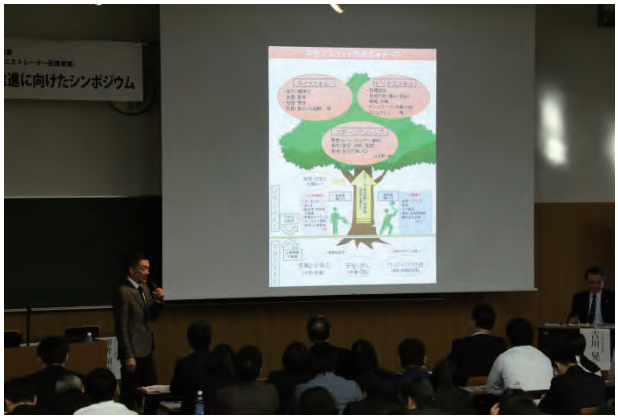
このようにアスリートが成長してく過程でもう一つ重要なのは、地域社会との関わりをもってもらいたいということです。大学の中だけ、スポーツだけだと、どうしても狭いです。時間を使って、地域とか社会に貢献活動、そういったところに参画していくということが重要です。アスリートは非常に恵まれていると思います。大学でスポーツ、勉強ができる環境を与えてくれるのは両親であり、先生であり、コーチであるので、すごく恵まれているわけですよね。その感謝の気持ちを地域にも還元して、何らかの形で社会と関わりをもつことによって、自分の人間的な成長の一つの糧にしていただきたいなということであります。

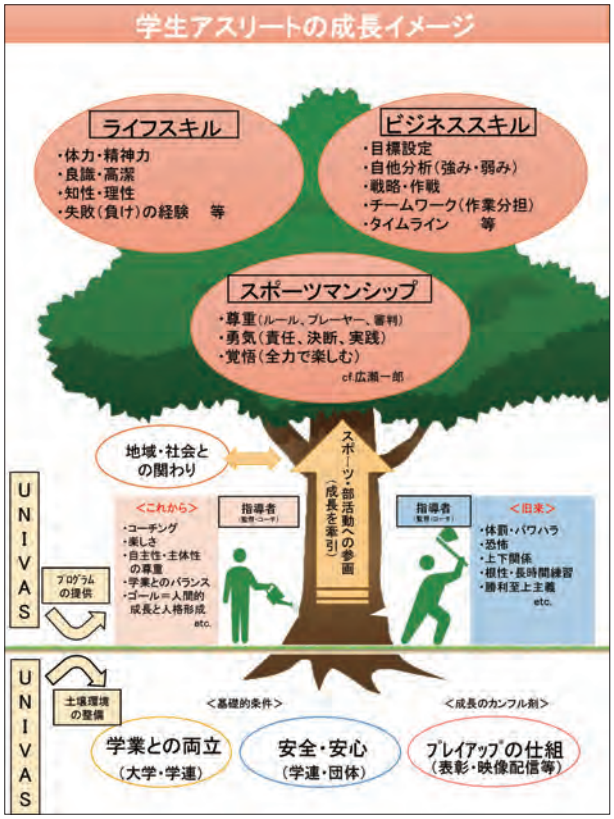
スポーツ、部活の参加を通して得られる価値としまして、一番大事なのはスポーツマンシップということだと思います。スポーツマンシップは、様々な捉え方や定義がありますが、私の中で一番わかりやすいのは、広瀬一郎さんという、もう亡くなられたスポーツコンサルタントで電通の方が、様々な書籍を書かれていて、三つをあげています。まずは「尊重」です。ルール、プレイヤー、審判。それから「勇気」。責任、決断、実践。そ

して「覚悟」です。全力で自己犠牲を含めてチームのために取り組む、まさにワンチームの考え方だと思います。このスポーツマンシップが得られるというところが、スポーツをやる最大の価値ではないかと思います。その上で、スポーツに携わることで得られることとして、ライフスキルです。スポーツをやることによって体もメンタルも鍛えられますし、まさに良識高潔です。尊敬とかそういったところから生まれてくるものだと思いますが、インテグリティと呼ばれているもの、それから学校で得られる勉強で得られる知性、理性、失敗の経験ということですね。人生は必ず成功ばかりってわけではありませんが、このようなライフスキルが身に付きます。もう一つ加えて、「ビジネススキル」です。社会に出て役立つスキルというのも、スポーツを通じて得られる大きな価値だと思います。目標の設定とか自分と相手、チームの強み、弱みを分析して作戦を立てる。そしてチームワークです。練習の日程を組み立てて、いかにどの時間軸で相手に勝つかっていうこと。卒業後社会に出て様々な組織で働くことになると思いますが、求められる要素は、まさに大学スポーツで得られる大きな価値ではないかなと思います。

最後に、大学スポーツの良い点として、部活動に入ると学部を超えて友達ができますよね。スポーツをやってないと、どうしても同じ学部、同じ学科、語学が一緒とかですね。そういった狭い範囲になってしまいますが、スポーツですと色んな学部の人と知り合って、４年間一緒にチームとして戦っていくわけで、ここで得られる人間関係、友達は一生涯の財産だと思います。これもスポーツを通じて得られる大きな価値ではないかと思います。ぜひ皆さん、４年間スポーツをやられている方がほとんどだと思いますけども、非常に貴重な経験をみなさん与えられているわけなので、周りの方々への感謝の気持ちとともにぜひ、スポーツと勉強に取り組んでいただければと思います。

これくらいで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。





シンポジウム

「学生アスリートの倫理観形成に向けて」

「学生アスリートが持つべき倫理観とは」

友添　秀則　早稲田大学教授・理事
一般社団法人　大学スポーツ協会　理事

こんにちは。日曜日ですが、学生のみなさんは勉強して帰って貰えればと思います。早稲田大学の友添です。

私も大学スポーツの経験者で、4 年間柔道部の合宿所にいて、朝 6 時前に後輩に起こされて、毎朝稽古して、昼はウェイトトレーニングをして、夕方には本練習をしてという生活を経験しました。今から振り返ると、貴重な経験をしたと思っております。そういう事も踏まえながらお話をさせていただこうと思います。

今日は大学スポーツにおける「学生アスリートが持つべき倫理観とは」という少し難しいテーマですが、このテーマでお話させて頂く上での問題意識を最初にお話しさせて頂きたいと思います。

UNIVAS ができるまで、大学スポーツについて、学会でもそれぞれの大学でも、大学スポーツのあり方について真正面から議論してきたことはほとんどありませんでした。ようやく UNIVAS ができて、この議論が始まったところです。ただし、この UNIVAS 設立に向けての一番の取っ掛かりは、大学スポーツの産業化が中心でした。もっと分かり易く言うと、どうすれば大学スポーツで儲けられるか、稼げるかっていうことだったと感じております。だから学生アスリートの人格教育、これは難しい言い方ですけれど、キャラクタービルディング（Character Building）、あるいはシティズンシップエデュケーション(Citizenship Education)、市民性教育ですが、市民としてどのように社会の中でしっかり生きていくかということの議論があまり行われなかったので、そういうところを踏まえながら、最初に大学のスポーツの問題の構造はどこにあるのかということをお話しておきたいと思います。

今日は競技スポーツを目指す大学を中心に考えていますので、一般の楽しむスポーツは今回のテーマの中では外しています。今まで大学による広告の媒体として、多くの強豪大学では大学スポーツを利用してきています。戦後、新制大学が発足してから一貫してずっとこの傾向はあります。大学の知名度を上げるには、現在は箱根駅伝だと言われています。良い成績を出すと、受験者数が増えるといわれています。ラグビー、野球もそうです。経営資源として大学スポーツは考えられることはあっても、その学生アスリートが倫理観をどのように持つべきか、あまり議論してきませんでした。ただ、経営資源としての大学スポーツそのものが駄目だと言っているわけではありません。この経営資源としての大学スポーツのあり方を、もう一度アスリートの人格教育の視点から考え直す時期にきていると思います。

二つ目ですが、増井さんの方からお話がありましたが、部活で勝てばいい、勝てば全てが許される、それから授業も出なくていいから体を休めろ、今日の夜の練習を頑張れ、などという部がこれまでもあったし、そして学生アスリートの側からいえば、段々授業から足が遠退いていく。私も同じような経験をした時期がありましたけれども、段々部活以外のことに無関心になっていくし、監

督や先輩の命令に服従する上意下達になる。あるいは閉鎖空間が出来て、部員の顔しか見ないようになる。朝起きてから寝るまで、今日話したのは同じ部員しかいなかったっていう日が毎日続く。遠征にいくと、もう自分が学業を本務とする大学生であることを忘れてしまう。このように部活中心の生活には多くの問題があると思います。

もう一つ、不況が続きましたので、大学スポーツのアスリートの出口が減少してきました。減少してくると何のために、スポーツを頑張るのかという動機づけも低下してくる。そして 2000 年以降文部科学省が方針を変えて、入学試験の多様化ということで、大量にスポーツ推薦入学者が入学するようになった。その中にもちろん良い学生さんもいるけれど、学問的にあるいは大学の中で勉強したいという気持ちがない学生さんも入学する。もちろん、その子たちを 4 年間でどうブラッシュアップしていくのかが、大学教員の私たちの仕事にもなっていくことにもなります。年配の方々の記憶にしかもう残っていないかと思うのですが、一番思い出されるのは、65 年の東京農大のワンゲル事件といって、先輩が後輩をハラスメントで殺害した事件があります。実は大学スポーツはその前から断続的に倫理的問題を抱えてきました。特に、先程お話した 2000 年以降が一つの大きな変わり目だったと思います。なぜかというと、集団窃盗や猥褻行為、定期券の不正取得・大麻の栽培まで、刑事事犯に触れる事件を引き起こしてきます。それから去年はアメフトの不正タックルの問題も出てきた。そもそも、こういう問題が何で起こるのかということを考えていかなくてはならないと思います。

アメリカの犯罪心理学者のドナルド・クレッシー（Donald Cressey）は、「動機」と「機会」と「正当化」が二つ以上重なった時に不正を犯す可能性が高いと言っています。これはあくまで仮説ですが、こういう考え方を出しています。

「動機」はいわゆる不正を犯すようになるプレッシャーです。しごきを受けたり、あるいは部内の人間関係のストレスや不満が不正の要因になるということです。実は運動部の悪しき風土そのものが動機になるということだと思います。

「機会」は、不正を行える状況があるということです。心理的な閉鎖空間、部員以外と一日誰とも話さない日が何日も続いていく。そういう閉鎖空間で、部の集団の規範が容易に至上となってしまう。部の規範を守っておけば何をしても許される。つまり不正を行える状況があるということが不正行為の要因になるということです。

「正当化」は、不正を正当化するための言い訳みたいなものです。後輩を正しく導くために多少の暴力はいいだろう、後輩のため、部のためにやっているのだから許されるというような正当化があります。

運動部はこういうクレッシーの三つの契機が複雑に入り混じっています。だからこの中で不正を犯さないのは、倫理観が強くないと難しくなります。常に二つ三つあるわけですから、どこかで箍が外れたら、不正を行ってしまう可能性が出てくるということです。

このような問題がある中で、学生アスリートに求められる資質能力について 10 個挙げました。少なくともこういうことを身につけていかなければならない。これは後でお話する、スポーツの倫理観と密接に結びついたものです。危険だとかリスクというのは、怪我という意味ではなく、社会的な危険やリスク。これを判断する力をしっかり身につけておく必要があります。そして意志を決定するディシジョンメイキングする力を持っていること。それから様々なトラブル、例えば部内の人間関係から指導教員、ゼミの先生との関係、あるいはバイト先のマネージャーとの関係、こう

いう対人的、対他的な多様なトラブルを解決する力がやはり必要です。さらに、自分がしたことがどういう結果を導くのかを予測する能力。また、批判的な思考力ということで、現状を常に批判的に捉える力。加えて、何よりも上手く他者とコミュニケーションできる力。そして対人関係を維持・構築していくような力。自分の力量を認識する力。1年生が入学して先輩になり、「俺ってビッグ？」と思う学生がいます。もっと自分を客観的に見た方がいいよっていうことをアドバイスされると素直に聞かなくてはいけないし、自分もそういう目線で見なければいけないわけです。他人、あるいは相手に共感する力、皆さんはちゃんとありますか。同情や、納得する力つけていますか。感情を上手く制御できますか。それから緊張とストレス、これに対処できますか。同時に、フェアプレーの精神とスポーツマンシップ、ジェンダーの意味合いもあり、スポーツパーソンシップと言い換えるようになってきていますが、こういったものをしっかりと基盤に置くということです。もともとフェアプレーの精神は、中世の騎士道に由来をしています。特にキリスト教のカトリックの影響が強くあり、フェアネスということを原義としています。公平、エクアリティ、等しいという状態を作ることがフェアということの原義です。だからいつも相手と同じ条件を担保するということに最大限配慮する。それはリスペクトに繋がっていくし、フェアプレーはプレー中にとるべき行動の原点です。それが日常生活にまで広がっていった時に、初めてスポーツパーソンシップになると言われています。ただ厄介なことに、勝利を真面目に追求しようとする中でしかこれらは学べないと言われています。真剣にスポーツに自分を投機して、投げ込んでいって一生懸命自分を磨き上げようとしないと、スポーツパーソンシップ、人生を勇気と正義をもって生きていくための美徳が身に付かないと言われています。これを身につけることが、スポーツの重要な考え方だということです。

次に、現在の大学スポーツにどのような問題があるかということを、倫理的な側面から考えてみたいと思います。

いつも成果を求められる。もうプロセスなんかどうでもいい。結果を出せ。4年間でインカレに優勝しろ。あるいはオリンピックを目指せ。このように成果を求められる。そして母校のために、自分のために、そして奨学金のために、進級するためにというものが入り混じっていって、勝てばなんでも許される。勝つことが大事だということが起こってくると、倫理的な難問（アポリア）・問題群が生まれてきます。

スポーツにおける倫理観、スポーツの哲学を変えましょう。あるいはこれまでの考え方をやめていきましょう。スポーツは私の勝ちはあなたの負け、あなたの勝ちは私の負け、足したらいつも0になります。ゼロサム、常に総和が0になるゲームです。最後まで負けない人は一人しかいません。そして誰もが負けるようにできているという文化がスポーツの文化的特質なのです。別言すれば、スポーツという文化は負けるようにできている文化なのです。私が勝って、あなたが負け、あなたが勝って、私が負ける。いつも0になる。往々にして、負けることが悪になってしまいます。こ

ういう誰もが幸せにならないような文化の発想はやめましょう。スポーツの倫理的な考えの基盤にゼロサム・ゲームの論理を置くことは辞めましょう。どう考えたらいいのかというと、お互いにスポーツの場でエクセレンス、卓越性を相互に追求していくことがスポーツの本質だと考えていくべきです。自分は相手より優れようと努力すること。その努力の中で自分自身を高めていく。そういったものをお互いに追求していくのがスポーツである。だから、勝ちも負けも結果以外で関係ない。むしろ、プロセスの中でお互いを高め合っていくことが必要だということです。そういう卓越性を相互に追求していくというスポーツの考え方。そしてそういうような強靭なスポーツの倫理を作っていく時期に今きているということです。少し発想を変えていくだけで、お互いに競技を通して win-win の関係になれるということです。いつも 0 になる関係じゃない。いつもプラスになる関係に作っていきましょう。それがこの提案のスポーツ倫理の根幹になってきます。我々は勝利至上主義と言ってきましたが、それは本当の勝利至上主義ではなかった。名誉のため、母校のため、お金のため、いつも何かのためにやってきたわけであって、勝利を本当に追求してきていない。勝利を本当に追求するような、勝利追求主義に変わっていきませんか、という提案でもあります。結果からプロセス重視へ、そして運動の自発的な楽しみがあるからこそ、私たちはスポーツをやっているのです。楽しいからやっているのです。このイントリンシックバリュー、内在的価値にもう一度、原点に帰る必要があるということでもあります。

社会は大学スポーツへ大きな期待を寄せています。競技スポーツは特に若い人達にとって、実存的な経験を提供することが可能です。具体的にはスポーツは、喪失と獲得、競争と共同、共存と敵対、苦悩と幸福、勝利と敗北、屈辱と向上、傲慢と失脚などの実人生で経験すべきことを集約的に経験できる宝庫です。加えて、このようなスポーツは教育学的な見地からみれば、若い人達が社会的な自己を形成していく上で必要不可欠な文化です。だからこそ、若い日にスポーツの中で卓越性を求め、自分の限界を知り、その限界に至る過程で仲間との連帯感を強めたり、長い人生を見据えて自己の生き方を眼前の競技と絡めながら真摯に考える場として大学スポーツは重要です。

現にこれまでも大学スポーツは、日本のスカラーアスリート、つまりは文武両道に優れた競技者を多く生み出し、社会に優位な人材を多数輩出してきたことも事実です。

この事実をもう一度、我々は噛み締めていかなければならないのではないかということを最後にお話して、私の話を終わります。

どうもありがとうございました。

学生アスリートのスポーツ倫理教育推進に向けたシンポジウム

国士舘大学 2019/12/08

学生アスリートが持つべき倫理観とは何か

友添 秀則
（早稲田大学）

1

競技スポーツ志向の大学スポーツの社会的問題構造

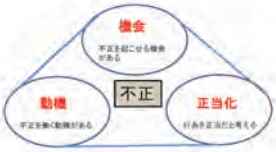
1. 大学による広告宣伝媒体としての利用
   - ・経営資源としての大学スポーツ
   - ・大学の知名度アップとブランディング
2. いわゆる体育会体質のエートスの形成
   - ・悪しき勝利至上主義の蔓延・部員の授業サボタージュ（怠業）
   - ・学問的無関心・上意下達・閉鎖空間の形成
3. 学生アスリートの出口（就職の受け皿）の減少と競技へのインセンティブの低下
   - ・低学力問題
   - ・社会常識の欠如

大学運動部における倫理的逸脱行為

- 1965年 東京農業大学のワンゲル部事件（1965年）以降連綿と発生
- 2004年 スキー部員2人が、宿泊施設で女子部員に強姦未遂容疑
- 2006年 ・アメリカンフットボール部の元部員3人が集団強姦
  - ・運動部員61人による不正定期券取得
- 2007年 ラグビー部員による大麻栽培
- 2009年 ボクシング部員2名による強盗
- 2013年 大学柔道部4年生による1年生への集団暴力
- 2017年 空手道部男子学生による窃盗事件
- 2018年 アメリカンフットボール部員の試合中の不正タックル

不正のトライアングル理論（仮説）

インテグリティを脅かす3条件



ドナルド・R・クレッシー（Donald R. Cressey）
米の犯罪学者

学生アスリートに求められる資質・能力

（1）状況判断力（危険やリスクを判断する能力＝意思決定力）
（2）問題解決能力（多様なトラブルを解決する能力）
（3）創造的思考力（自己の行為に対する結果の予測力）
（4）批判的思考力（現状を常に批判的に捉える力）
（5）効果的なコミュニケーション能力
（6）対人関係を構築し維持する能力
（7）自己認識力（現在の自分の力量をしっかり認識できるきる能力）
（8）相手や他の人達に共感する能力
（9）感情を制御する能力
（10）緊張とストレスに対処できる能力

＋

フェアプレイの精神・スポーツパーソンシップ

フェアプレイの精神

- 中世の騎士道に由来
  fairnessの原義→
  騎士の生き方の体現

⇩

プレイ中にとるべき行動の原点となる精神性

尊厳と尊重

スポーツマンシップ（スポーツパーソンシップ）

フェアプレイの精神を包含した人生の生き方

↓

人生を勇気と正義を持って生きていくための美徳

・勝利の追求の中でこそ学べるもの

フェアプレイの精神＋スポーツパーソンシップの定着

大学スポーツの倫理的アポリアの要因

大学スポーツのアポリア（問題群）

⇑

誤った勝利至上主義

↗ ↖

成果至上主義 ⇔ 歪んだ名誉心

学生アスリートのスポーツ倫理の確立を

学生アスリートのスポーツ観の転換の必要性

「Zero-sum game(ゼロサム・ゲーム)」から
→ 「卓越性の相互追求」としてのスポーツへ

日本人のスポーツの学力、スポーツ観の転換

↓

往復なスポーツの倫理の構築

勝利至上主義から →勝利追求主義へ

結果からプロセス重視へ、スポーツの内在的価値へ

大学スポーツへの期待

＊人々のスポーツへの期待＝実存的な経験を提供
スポーツと身体運動の価値への着目

興奮と爽快、競争と共同、共存と敵対、
苦悩と幸福、勝利と敗北、協奏と同上、
傲慢と失敗

・集団的達成と自己有能観

大学スポーツは、文武両道に優れた競技者を多く生み出し、社会に優位な人材を多数輩出してきた事実の重み

シンポジウム

「学生アスリートの倫理観形成に向けて」

「ジャーナリストから見る学生アスリートの現状と課題」

北川　和徳　日本経済新聞社　編集局運動部編集委員

こんにちは。日本経済新聞の北川といいます。新聞記者をほぼ35年やっていて、そのうち25年くらいスポーツをずっと取材してきました。あまり喋ることは得意ではないのですが、学生アスリートの現状や、倫理観の観点から喋れと言われまして。実は、大学で運動部に籍を置いたこともないし、専らオリンピックのアスリートを取材していて、学生アスリートのことは、そんなによく知りません。ですから、実情をよく知らなくて印象から喋っている面もあるかもしれないのですが、それでも話させてもらいます。

先ほど友添先生のデータにもありましたけど、最近、学生アスリートのスポーツ界での不祥事がどんどん出ていますよね？この間も某大学のアメフト部の盗撮事件とかがありまして、某大学アメフト部のタックルの事件もあり、そういうものを見ながら、私は、確かに学生スポーツは、上意下達に拘る上級生・監督の理不尽な要求とか、体罰とか、いじめとか、そういう悪しき面はあると思います。でも長い目で見たら、時代とともに良くなっているのではないかと思っていました。逆に SNS の発達により情報がどんどん出やすくなったことで、こんなに不祥事が出るのかなと思っていたのですけど。でも最近そうではないかなという風に逆に思い始めて、実態はもっと悪くなっているのではないかなと思っています。

20 年ぶりくらいに現役に復帰してある大学のアメフト部の監督に就任された方に、3年ぐらい前に話を聞いた時に、自分達が学生だった頃よりも、学生の校紀がかなり崩れているんじゃないかと思いました。練習の前、最初にみんなで財布とか貴重品をマネージャーが全部集めて管理する。「どうしてそんなことやるんだ？」と聞いたら「部室に置いておくと無くなったりするからです」って。え？じゃあ泥棒がいるってことか？そんなことはないだろって思っていた。でも、実際に何カ月か練習とかをしていくと、泥棒はいませんでしたが、風呂場のシャンプーがすぐ無くなるとか、上級生が下級生をパシリにして、あれ買ってきてくれとか頼むのに、お金を全然渡さないとか、そういうことが結構頻繁に見受けられて、あぁ、こういう風になってきたのか、と嘆かわしかったらしいんですよ。なんでそうなってきたのかというと、彼に言わせると、前任者の監督が経理上の問題を起こして、結構汚いことを色々とやって、不祥事になってしまった。「上がそういう風に悪いことをしていると、そういう風に全体の倫理観って崩れていくんだな」って。「でも、それって、今の学生スポーツ界全体というより日本の社会全体で起きているんじゃないか」という様なことを言われました。そんなことを考えながら最近もニュースを見ていたら、桜を見る会の件とかありますよね？要するに、今ってみんな権威とかに逆らわなくなったんですよね。大きな権威に逆らわなくなっている。逆らわずに、そこにすり寄っていくと、自分も美味しい思いができる、みたいな感じになっているということが、すごく多い

のではないかと思います。例えば、官僚も明らかに筋の通らない言い訳をどんどん言ってしまっている。今日の話からは外れるかもしれませんが、そんな状況になっていて、それで、学生にスポーツで倫理観を求めたって、やっぱり聞いてもらえないのではないか、というのが今の私の感想です。だからまずは、子ども達は大人に対して、もっとちゃんと正してくれよって思っているんじゃないかなと思います。

今の学生達は、アスリートに限らず、私の学生時代と比べてずっと子ども化しているといいますか、我々の学生の頃は、大学に入学するとまず新歓コンパっていうのがあって、そこですぐお酒とか飲まされたりしました。数年前に某大学のスキー部の監督と飲んでいた時に、「今は二十歳前の学生が街で飲んでいるのを見つけられると、すぐ通報がきて、とてもそんなことできはしないよ」と。まあ、これは倫理的にいいことかもしれないですけど。また、授業に出ない子どもは、親に連絡をすることを求められる。学校の成績なんかも親に直接いきます。それを見ていて思ったのが、某大学のアメフト部の事件の時に、当事者の彼が非常に苦しい目に追い込まれていて、色々な事実が明らかになっているのに、仲間である学生からは、ちっとも声が上がらなかったんですよね。彼を守ろうとか、庇おうとか。それで、大分経って、中身のない抽象的な声明を出したり、なんでそうなったのかを考えると、あの時、父兄会がやたら目立っていたんですよね。「自分の将来を考えてそんなことをしないでね、部にそのままいて、そしたら良いところに就職できるし、変なことするんじゃない」って言われて、学生もおそらくそれに従ったんだろうと思うんですよ。要するに、善悪の判断を自分でしなくなってきているんですよね。そういう意味で、もっと自立した学生を育てなければいけないと思います。それを今、学生スポーツの世界でもっとやらなければいけないと。

今の学生アスリートに色々な問題があると言いましたけども、逆に、私がよく取材しているオリンピックのアスリートをみると、何年か前に比べて、ものすごく成長してきているなと感じます。平昌五輪の時に、アスリートの言葉というのは、すごく力があるなと、驚いたんですけど。そのことをテーマにして、元陸上選手の為末大くんと話をした時、彼が言うには、「五輪に出るようなアスリートの経験っていうのが、すごく大きい」って言うんですよ。特に冬季競技の場合は、年がら年中海外へ行っていて、違う文化に接して色んなことを学べるわけです。今の選手は、トップ選手になると、どんどん色んな世界と接触して、他競技の選手ともよく話し、そういうことによって成長していく部分があるけれど、逆に、大学だけでやっているような選手になると、外の世界を知らない。先程も話に出ましたけれど、閉鎖された空間で、教えてくれるのが先生・監督・コーチ・上級生、その上下関係の中で、勝つことばかり求められてしまう。

日本では、スポーツは教育に資するという考え方がすごく強いですけど、その一方で、この国の学生アスリートは筋肉バカだっていうような連中もいますよね。なんでそんなことになるかというと、結局、スポーツ界の一部の人、特に一部指導者に、スポーツだけをしていれば、人間的にすごく立派な人格になるという迷信を信じてしまっている人がいる為な気がします。先程、友添先生が言われていたように、スポーツをしながら、スポーツパーソンシップとか、勝利追求主義というものを教えてくれる人がいなければならないのだけれど、そういう人が、日本のスポーツ界に、閉ざされた大学スポーツの空間の中だと全然いないんですよね。それが、今はとても問題じゃな

いかなと思います。

優秀なアスリートは、自分を律する能力がすごく高く、これは人間的に素晴らしい美点です。それがなければ強くなれませんから。でもそれは、倫理観とは別で、人間として優れた一つの特質なんですよね。同時に、アスリートは負けず嫌いという側面を持っていますよね。優秀なアスリートはみんな共通して負けず嫌いです。それが変な方向にいくと、ルールを無視して、どんなことをしても勝ちたい、というような間違った方向に進んでしまい、危険だと思われます。だからこそ、それをきちんと教えてあげる人が必要です。ラグビーのワールドカップですごく思いました。ラグビーのワールドカップはイギリスの貴族階級、支配階級が自分たちのパブリックスクールで、自分たちの子どもをそれにふさわしい人間に育てる為にやらせたスポーツです。例えば、戦いの時は恐怖を押し殺して、恐怖に打ち勝って、その先頭を切って部下を引き連れて、突っ込んでいく、チームや仲間や組織の為に、自分を犠牲にして貢献するとか、そういう意識がすごく身につけられると思うんですよ。そういったリーダーとしての質を磨くのが最終的な目標なんですけど、同時に、彼らはラグビーばっかりしていた訳じゃなくて、自分で判断していける様な若者に育つように、先ほど友添先生が言われたようなことをちゃんと学べる環境に身を置いているわけですよね。そうやって学んで、リーダーとして育っていくんです。少し考えれば分かるんですけど、さっき言ったような、危険を省みない、勇気を振り絞って先頭に立って危険に突っ込んでいく能力とか、組織のために自分を犠牲にできる能力っていうのは、ひとつ間違えれば反社会的勢力にとっても、すごく優秀な人材になってしまうんですよね。だから、そういうことではないということを本当は学ばなければいけないんだけど、閉鎖された体育会という、外と交流のない空間でずっと育ってしまうと、そういった感覚を身につけるより、自分を犠牲にできる能力ばかり偏って身に着けるようになってしまうんですね。だからこそ、学生アスリートは勉強しなきゃいけない。色々なことを学ばなきゃいけない。本もいっぱい読まなければいけない、というようなことをどんどん考えて欲しいなと思います。

そういう意味では、今 UNIVAS が取り組んでいる、学業と競技の両立を進めなければいけないんですが、それを誰がするかといえば、それは体育会でもないし監督やコーチでもなく、やはり学校の先生がしなければいけない。だから、学校が主体的に取り組んで欲しいと思います。それが、今私が伝えたいことで、それをすればきっとこの学生アスリートの倫理観っていうのは、醸成されていくのではないかなと思っています。

シンポジウム

「学生アスリートの倫理観形成に向けて」

「国士舘大学における学生アスリートの倫理観形成に関する取り組み
～スポーツ庁委託事業の成果報告 ～」

細越　淳二　国士舘大学文学部教授　学生部副部長
国士舘スポーツプロモーションセンター　スポーツ・エデュケーショ

国士舘スポーツプロモーションセンタースポーツ・エデュケーショナル・ディレクターを拝命しております、国士舘大学の細越と申します。

冒頭、大澤理事長からお話がありましたように、昨年度それから今年度と、スポーツ庁から委託事業を受けるという形で２ヶ年に渡りまして、本学は大学スポーツの振興ということで様々な取り組みをしております。

そこには大きく二つの柱がございます。まず１点目は、「アクションプラン A」と致しまして、スポーツの場面におけるメディカルサポートという取り組みを進めております。具体的には Emergency Action Plan（EAP）作成ガイドブック、あるいは Sports first Responder（SFR）の育成プログラムを開発し、指導できる人材の育成、スポーツ傷病のレジストリー事業ということでデータベースをしっかり集約しながら、スポーツの練習場面、大会の際に、体調を崩された方がいらっしゃったときに、すぐ対応できる、あるいは、そうならないように予防の対策ができる。そんな仕組みを整えて活動しているのがアクションプラン A でございます。

それから、本日私が報告させていただきますのは「アクションプラン B」ということで、スポーツ倫理への取り組みに関する実態調査及び指導プログラムの開発ということに取り組んで参りました。今日はアクションプラン B の WG が昨年度取り組んだ内容についてご報告申し上げたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず、我が国のスポーツ界では指導者・選手間でのハラスメントの問題ですとか、あるいは暴力問題、多くの問題が社会問題化しているということがございます。またスポーツ場面に限らず、学生アスリートの皆さんを取り巻く諸々の問題状況もあると思います。私たちの WG では、学生アスリートの皆さんが、スポーツ場面、生活場面、その両面で充実できるように、また学業の面でも充実していけるようにする為にはどんな内容が必要かということを検討し、教育プログラム開発を行いました。ただ、我々がプログラム開発を行う前に、昨年・一昨年度の２ヶ年に渡ってスポーツ庁から、この事業を受託していた大学が 17 ありましたので、そのうちの 11 大学にいくつかの項目で、スポーツ倫理観形成について、どのようなプログラムを策定して実施しているのか、アンケート調査をさせていただきました。あとは、アメリカの NCAA の現地調査と NCAA に加盟する大学へのインタビュー調査も行いました。そして、その実態調査を基にしながら、教育プログラムを作る、この二段階で取り組みをして参りました。

一点目の調査の結果ですが、調査の目的は、各大学が実施しているスポーツ倫理に関わる教育的な取り組みはどのようなものがあるかというのをお尋ね申し上げました。そして各校が学生アスリートに期待することは何かということを併せて伺ったということになります。

調査の手順としましては、担当機関を通じて学内で展開されているスポーツ倫理に関わる教育プログラム、あるいはそれと同等の意義を有すると考えて実施しているプログラム、もしくはこういったことについての授業も、調査を実施いたしました。

具体的に今日ご紹介申し上げる内容と致しましては、「学生のスポーツ倫理観形成に関する教育プログラムはどんなことを行っているのか」と「大学として学生アスリートに期待することは何か」についての結果をお示ししたいと思っております。

まずは、問 1「学生のスポーツ倫理観形成に関する教育プログラムを実施するねらいと目的」ですが、各大学で、どのような場面で学生アスリートあるいは大学生向けに、倫理観形成に関わる取り組みをしているかというのをいくつかご紹介申し上げます。この質問は複数回答になっており、いくつか選択肢があり、「1 番にこの項目を考えているというところについては 2 点」それから「付随的に複数の項目を大事にしているところについては、1 点」とカウントしております。

1 点目は、年度初めのオリエンテーションでしっかり周知をしているという大学、同じくガイダンス、あるいは各クラブ、運動部のリーダーズキャンプ等で、プログラムを実施しているところが 10 大学ありました。そして、授業の中でこの内容を取り扱っているというところは 8 大学。具体的にどんな授業かといいますと、保健体育科教育の指導論の中で、あるいは体育・スポーツ哲学、体育・スポーツ心理学等の中で取り扱っている。または、現代文明論という授業のなかでこの内容を一部取り扱っているという大学もありました。その他として、キャリア形成のプログラムの中で行っているというところも見られました。こういったプログラムを実施するねらい・目的ですが、一つはアスリートとして、あるいは人としての資質向上を目指すというのが、ほぼ半数以上の大学でした。ほぼ半数以上の大学で、このアスリートとして人としての資質向上を目的として、そういったプログラムを実施していたということになります。他には建学の精神や学校の理念を理解するということに関わって、スポーツ倫理観について取り扱っているという大学が 2 番目。後はスポーツのキャリアに関わる、あるいはコーチングに関する理解を深める中で、スポーツ倫理に対するもの。そして法学やスポーツマネジメントに関する理解等々というところで取り扱っているという回答が得られました。

これらの取り組みのキーワードとしましては、倫理観・価値観・モラル・リーダーシップ・コンプライアンス・自己理解・文武両道・コミュニケーション・人権・安心・安全といったキーワードを取り上げながら、プログラム実施をしているということでありました。

続きまして、プログラムを進める上で、理論的なバックボーンがあるかをお尋ね申し上げましたところ、それぞれ大学の建学の精神に則って、その建学の精神を身に付ける上でスポーツ倫理観、あるいは、広く倫理観というところでプログラム実習をしているところが一番多かったということになります。

続いて多かったのは、キャリア理論、人文社会学の科目内に関わって実施しているということ

です。

この状況からわかることは、各大学では学生アスリートとして身に付けるべきものというのも、もちろんあるけれど、アスリートとして、人として、その両面で人づくりをする、という様な方向性を大事にしているという事実が見えてきたということになります。

そして、もう一つ踏み込んで聞いてみたところは、プログラムを実施するに至った背景ですが、ここであげられていたのは、学生アスリートの大学への帰属意識が低い、ということをご報告いただいた大学が結構あったということです。次いで、学生アスリートがスポーツと強くコミットするために、学生生活が疎かになるという様な現状もあるので、やはりこういった内容は、しっかり伝えていくべきだという様なことでございました。

具体的な記述としましては、学生アスリートの帰属意識の低さ、二つ目は学生生活が疎かになる、三つ目はキャリアに関する意識の低さ、スポーツをやっていればいいんだ、その先のことはまたその時に考えよう、という様な考え方を心配する声も見られました。あるいは、他校のハラスメント問題などを受けて、至急やらねばならんという大学もありましたし、危機管理意識的な大学もありました。

問2は「学生アスリートに期待すること」です。これも「一番この項目を重視しているというところは2点」として数えておりますので、一番多いところで14点となっています。各大学で学生アスリートに期待することは、「学生アスリートがスポーツで培われた人間性を発揮すること」を一番強く求めているということです。それから、「学業とスポーツの両方に熱心に取り組むこと」を求めているということが次に多かった回答です。そして三番目は、「学生アスリートが一般学生の模範的なロールモデルになってほしい」という期待。次は、大学の目線かも分かりませんけれども、「学生アスリートのスポーツでの活躍が大学の名声を高めてくれること」です。それに付随するかもしれませんが、「優秀な学生アスリートがたくさん入学してくれること」在学生の活躍によって次の学生を引き入れることですね。「一般学生の志願数を増やすこと」といった回答も見られました。後は「スポーツを通して、社会性協調性を身に付けてほしい」「競技を通して社会で逞しく生きる力」先程、北川先生の話にあった、望ましい方向性で生きる力を身に付けていって欲しい等の回答がございました。

まとめとしましては、建学の精神、スポーツキャリア理論を背景とした内容で構成される取り組みが数多くあったということが一点。学生アスリートに期待することとしましては、スポーツで培った人間性を発揮すること、学業とスポーツを両立すること、といったことであろうかと思います。ただ学生アスリートが、スポーツにのみ傾倒することによる学校への帰属意識の低さ、将来的なキャリアへの関心の低さが問題として見られるということですので、スポーツ倫理観形成を通して、このあたりを充実させて、学生さんがより良い形で社会に旅立っていけるようにしたいという各大学の思いが見えたということになります。

次に、調査の結果を踏まえまして、初年次学生向けに、「真の学生アスリートを目指して」という20問程度の問題を作ってみました。今日は、学生さんもたくさん来てくださっていますので、一緒に考えてみて欲しいと思います。

テーマは、スポーツの意義と価値、学業とスポーツの両立、フェアプレイ、ロールモデルとして

の学生アスリート、反倫理的言動への対応、良好な人間関係の構築、そして、こんな時あなたはどうしますかというケース・スタディで構成しました。回答のページに解説もつきまして、重要な説明をしていくという形式です。

この問題、いかがでしょうか？「スポーツは世界共通の〇〇である。」①財産、②文化、③知恵。学生さんどうでしょうか？どこかの授業で聞いたことありますか？これは「②文化」ですね。スポーツは世界共通の人類の文化であり、みなさんはそれを学生アスリートとして経験している、ということになります。

次の問題、「学生アスリートはあらゆる暴力やハラスメントを許さない」これはもちろん「はい」ということになります。

次の問題は、先程、友添先生のお話でもあったかと思いますし、増井先生の方からもありましたが、「学生アスリートは部活動で引き継がれている慣習はその内容に関係なく従うべきか」みなさんはいかがでしょうか？これまでの話を伺ってわかるように、これは「いいえ」です。無目的に受け入れるだけが正しいわけではないということですね。ぜひ、その状況を見ながら判断できる、そんな力を持った学生アスリートとして、育っていただきたいということです。

ケース・スタディも一つだけ見てみましょう。「運動部内で同級生が先輩から暴力行為を受けているのをみつけました、この時あなたはどうしますか？」、この問題は不適切なものを選びなさいですね①監督コーチに報告してやめるようにお願いする、②学生相談室に届け出る、③知らない振りをする、もしそういう場面に遭遇した時に、先輩からの暴力にどう対応するかということです。きっと皆さんも今、教育を受けながら判断することあると思いますが、これはもちろん「③知らない振りをする」です。良くない行為があった場合には、正しい行いを求めていく、そんな姿を形作って行きましょうということで、初年次学生向けに作成をいたしました。

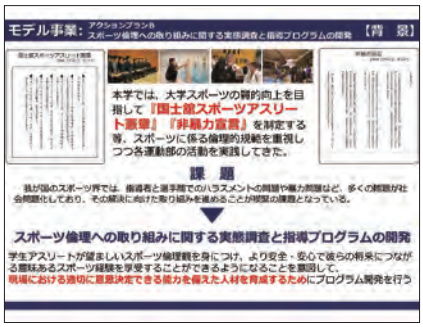
昨年度は、100 名超の学生さんにご協力いただきまして、このプログラムに回答してもらっています。学内の「manaba」という学習支援システムがありますので、その中で回答してもらって、間違った項目については、正解しないと次に進めないという形で、必ず全ての項目について理解をして 20 問を答える、こういった形で進めております。

概ね、一回目の回答で、8 割以上の得点を得ていたということになります。それから、今回のこのプログラムを、やってみての感想ということで、自由記述を求めたところがあります。このプログラムを実施して気付いた、あるいは分かったことは何か、というところで答えがあったのは、「部活動で少しでもおかしいと思うところがあれば、相談していいんだということが分かった」「自分一人で抱え込まないで相談できる所があるんだということを知り心強く感じた」「学生アスリートだとしてもまずは学生であるのでまずは第一に勉学を優先し、自分のやらなくてはならないものをやるべきだと思った」等の感想をもらっております。

今年度は二年次以上の上級生用のプログラム、あるいは、指導者の皆さん向けのプログラムも開発しながら、より広い運用をしていきたいと思っています。

終わりになりますが、昨年度、NCAA の本部へ調査に行かせていただきました。建物内に、色々な全米の大学スポーツの取り組みが示されておりましたが、その中で、こんなプレートがありました。「ON THE FIELD IN THE CLASSROOM AND FOR LIFE」というようなコメントがございました。こ

れが非常に印象に残ったもので、ぜひ我々も学生の皆さんにスポーツを通して、よりよい人生を得られるように、これからこの取り組みを進めて参りたいと思います。ありがとうございました。



調査の目的，対象，手順（成果報告書，p.49）

○調査の目的

各大学が実施している『スポーツ倫理に関わる教育的な取り組み』と各校が『大学生アスリートに期待すること』について明らかにすること

○調査対象

平成29～30年度に，大学スポーツ振興の推進事業に採択された17大学のうち11校（有効回答）

○調査の手順

担当機関を通じて学内で展開されているスポーツ倫理に関わる教育プログラムやそれと同等の意義を有すると考えて実施しているプログラム，授業の取り組みなどについてアンケート調査を実施

質問項目と分析（成果報告書，p.49）

○質問項目

問1　学生のスポーツ倫理観形成に関する教育プログラムを行っているか

問2　大学として学生アスリートに期待することは何か

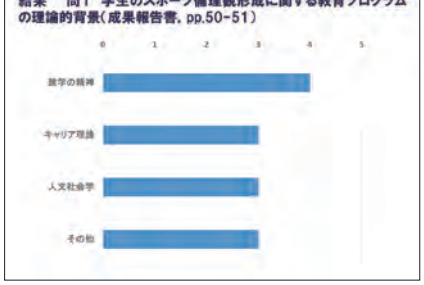
○回答の分析

・問1では記述回答とし、各小項目において出現頻度の多いキーワードを抽出した。また、記述回答の因子分類を行った項目については、キーワード抽出とその順位づけは行わなかった（内容、実施に至った背景となる事柄や問題）。

・問2では、選択肢の中から「特に強く当てはまる（2点）」と「当てはまる（1点）」の選択肢を用意した。

結果　問1　学生のスポーツ倫理観形成に関する教育プログラムを実施するねらい・目的（成果報告書，pp.50-51）

結果　問1　学生のスポーツ倫理観形成に関する教育プログラムの理論的背景（成果報告書，pp.50-51）



結果　問1　学生のスポーツ倫理観形成に関する教育プログラム実施に至った背景（成果報告書，pp.50-51）

最も多く挙げられたのは、学生アスリートの大学への帰属意識の低さであり、次いで学生アスリートがスポーツに強くコミットするために学生生活がおろそかになることが挙げられている。

＜具体的記述＞

・学生アスリートの大学への帰属意識の低さ

・学生アスリートがスポーツにだけコミットし、学生生活がおろそかとなるため

・キャリアに関する意識の低さ

・他校のハラスメント問題などを受けて

・学生のモラル低下

・危機管理意識が低いため

結果　問2　学生アスリートに期待すること（成果報告書，pp.52-53）

調査研究のまとめ

○『スポーツ倫理に関わる教育的な取り組み』

・建学の精神やスポーツキャリア理論を背景とした内容で構成された取り組みが多くなされていることが明らかとなった。

○『大学生アスリートに期待すること』

・スポーツで培った人間性を発揮することや学業とスポーツの両方に熱心に取り組むことを期待していることが明らかとなった。

☞現状としては…

学生アスリートがスポーツにのみ傾倒するあまり、学校への帰属意識の低さや生涯的なキャリアへの関心の低さが問題としてあり、それらの改善につながることを期待してスポーツ倫理観形成に向けた取り組みを実施していることが示された。

（成果報告書，pp.59-63）

国士館大学　KOKUSHIKAN SPORTS

真の学生アスリートをめざして

国士館大学
スポーツ倫理教育プログラム

テーマ

1. スポーツの意義と価値について
2. 大学でスポーツをすることの意味
   ～学業との両立について
3. フェアプレイについて
4. ロールモデルとしての学生アスリート
5. 反倫理的言動への対応
6. 良好な人間関係の構築
7. ケース・スタディ

1．スポーツの意義と価値について

次の（　　）に入る適切な語を，以下の①～③の中から1つ，選んで答えてください。（問題文は「スポーツ基本法」前文より引用）

Q1.スポーツは、世界共通の人類の（　　）である

①財産　②文化　③知恵

1．スポーツの意義と価値について

次の（　　）に入る適切な語を，以下の①～③の中から1つ，選んで答えてください。（問題文は「スポーツ基本法」前文より引用）

Q1.スポーツは、世界共通の人類の（　　）である

①財産　②文化　③知恵

1．スポーツの意義と価値について

Q1．解説

平成23（2011）年6月に公布された「スポーツ基本法」では，その前文に「スポーツは，世界共通の人類の文化である」ことがうたわれています。

私たちの自己実現だけではなく，スポーツが，地域の活性化や国際交流，国際平和に貢献する役割をもっていることが示されています。

5. 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを，以下の①～②から1つ，選んで答えてください。

Q12. 学生アスリートは，あらゆる暴力やハラスメントを許さない。

① はい　　② いいえ

5. 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを，以下の①～②から1つ，選んで答えてください。

Q12. 学生アスリートは，あらゆる暴力やハラスメントを許さない。

① はい　　② いいえ

マネジメント近代化の遅れ

大学における部活動の課題

組織	・大学組織ではなく、課外活動として独立。 ほとんどが法人格を持たない任意団体。
会計	・任意団体の団体口座開設困難。 ・学生が一年交代で＝不十分なマネジメント。
人事	・指導者はOBの力に頼るところが大きい。 ・OB会による運営あり、ボランティアも多い。
運営	・主務、副務、マネージャーは1年交代。 ・支えるスポーツにはあまり目がいかない。

UNIVAS

5. 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを，以下の①～②から1つ，選んで答えてください。

Q16. 学生アスリートは，運動部で引き継がれている慣習は，その内容に関係なくしたがうべきである。

① はい　　② いいえ

5. 反倫理的言動への対応

次の質問に対するあなたの考えを，以下の①～②から1つ，選んで答えてください。

Q16. 学生アスリートは，運動部で引き継がれている慣習は，その内容に関係なくしたがうべきである。

① はい　　② いいえ

5. 反倫理的言動への対応

Q16. 解説

運動部では，競技力やチームワークを向上させるための良い慣習がたくさんある一方で，部の上下関係を押しつけたり，慣習と言いながらお酒を飲ませたりするなどのハラスメント事案も発生しています。

学生アスリートとして，正しい部の慣習は守り，そうでないものについては勇気を持って断ったり，学生相談室に相談するなどして，より望ましいスポーツ環境を手に入れるようにしましょう。

5. 反倫理的言動への対応

Q16. 解説

運動部では，競技力やチームワークを向上させるための良い慣習がたくさんある一方で，部の上下関係を押しつけたり，慣習と言いながらお酒を飲ませたりするなどのハラスメント事案も発生しています。

学生アスリートとして，正しい部の慣習は守り，そうでないものについては勇気を持って断ったり，学生相談室に相談するなどして，より望ましいスポーツ環境を手に入れるようにしましょう。

7. ケース・スタディ

～あなたならどう行動しますか～

Q19. 運動部内で同級生が先輩から暴力行為を受けているのを見つけました。このときの，あなたの行動として不適切なものを，以下の①～③から1つ，選んで答えてください。

①監督・コーチに伝えて，やめるようにお願いする
②学生相談室に届け出る
③知らないふりをする

7. ケース・スタディ

～あなたならどう行動しますか～

Q19. 運動部内で同級生が先輩から暴力行為を受けているのを見つけました。このときの，あなたの行動として不適切なものを，以下の①～③から1つ，選んで答えてください。

①監督・コーチに伝えて，やめるようにお願いする
②学生相談室に届け出る
③知らないふりをする

7. ケース・スタディ

～あなたならどう行動しますか～

Q19. 解説

スポーツに限らず，全世界において暴力は否定されるべきものです。その暴力行為が自分の関係する人間関係で生じた場合は，適切な対処が求められます。

このケースの場合，何もしないことがもっとも好ましくない選択肢となります。自らが制止したり，指導者を通じて仲裁したり，学生相談室に相談をすることが適切となります。

国士舘
国士舘スポーツプロモーションセンター

ご清聴ありがとうございました

■ ディスカッション

吉川：このパートでは、最初に、スポーツの倫理教育の論点について議論をして、後半においては、UNIVAS の今後について、鎌田先生から色々教えていただいたことも含めて議論いたします。会場からもコメントをいただけたらと思います。
特に今日は、スポーツに関して主要な取り組みをされている大学から、筑波大学、山梨学院大学、仙台大学、順天堂大学、大阪体育大学などの先生方もご参加になっていますので、後ほど、適当な場面でコメントなどしていただければと思います。

それでは準備が整いましたので、まずスポーツ倫理について、簡単に私の方からこれまで出ている論点について触れてみたいと思います。

例えば「トップアスリートに限らず」というキーワードは最初の基調講演でもありました。競技スポーツをされているアスリートに着目しているのか、それとも、もっと広い、一般の学生がスポーツに親しむというようなところにも視野を広げていくのか。大学自体は本来、非常に広い裾野をもっています。UNIVAS として、学生とスポーツの関係、大学とスポーツの関係を、どう捉えて行くのか、重要なポイントだと思います。

また、ハラスメントなどに対してのガバナンスが弱いというのが、一般論ですが、大学の課題の一つになっています。UNIVAS の設立によって、何とか改善の方向へもっていこうということでございます。ガバナンスの弱さという点が次のポイントです。

それから、学生の自己成長を促していく、そういうことが大学の教育の目的でもあり、且つスポーツの価値でもある、ということであります。

そして運動部も、増井先生の画の中にもありますけれども、斧で切り倒してしている人ではなく、じょうろで水をやっている方にどうやって変わっていくか、運動部の自己改革、そのロードマップというのがポイントになるということでございます。

それから、キーワードとしては、人間力を高める、判断力を高める、といった意味での大人としての人格形成があります。そういったものに、役立てるためには、部の中の閉鎖空間の中で経験することではなくて、もっと広い視野が必要で、それはもしかしたら、学業も含めて、大学の教育自体のあり方かもしれないということです。以上のようなご指摘をいただきました。

また、倫理のキーワードとなるのは、「フェアプレイ」「スポーツパーソンシップ」ということでまとめられるかと思います。勝利至上主義から勝利追及主義へと、勝利をプロセスとして追及する、それが目的とされるべきで、そういったスポーツの内在的な価値、これに着目していく。すなわち原点に返ろうということです。そのことによって、トップアスリートを目指す人も、あるいは一般学生も、スポーツの内在的価値をいかに探究するか、というところに着目すべきではないかとのご指摘がありました。

それから、指導者の在り方ですね。指導者や上に立つ人間が、そもそも倫理観というものをきちんと持たない社会において、スポーツアスリートだけにそれを求めるのは不可能であると考えら

れます。従って、指導者像が非常に大切になってきます。増井先生の画の中にもありましたけれども、指導者像をどういう風に構築していくかといったことが、今後の UNIVAS としても、大学の AD 局にとっても、重要な課題になると思います。

ひとまず、ご指摘があった、論点、キーワードを私の方からご紹介しましたけれども、この場では、もし言い足りなかったことがあれば、先生方からここで補足していただいて、それから会場から何人かのコメントをいただいて、そして最終的に友添先生の方で取りまとめをしていただくような運びで行きたいなと思っております。予定通りいくかどうかはわかりません。

特に来年は、TOKYO2020 がありまして、最近できたオリンピックミュージアムにも、嘉納治五郎先生の話が展示として出てくるのですけれども、嘉納治五郎先生という方が、我が国の指導者の原点になりそうな気がします。指導者像として、嘉納治五郎先生という方から、何を受け継ぐべきなのか、その辺が出発点になるのかなと、私なりに考えているのですが、まず嘉納先生を研究なさっている友添先生から口火を切っていただいて、それからそれぞれの先生方にコメントしていただければと思います。

友添：はい、ありがとうございます。今、吉川審議役の方から色々おまとめていただいたところで、少しロールプレイというか、対立軸を生み出していくとすると、そもそも大学スポーツに指導者なんかいるのか、という問題を考えなければいけないと思いますね。

私の初発は、地方の国立大学の教育学部でしたけれども、そこの運動部をみてみると、学生が完全にマネジメントを、いい意味でも悪い意味でもしていて、指導者というのは具体的にいない。今言った指導者というのは、大学が雇用する、もしくは、その部が雇用する指導者という意味で使っているわけですけれども。UNIVAS の設立の時に、増井参事官とも随分議論をしてきたのですが、どこの大学も一般的には、大学スポーツに割く予算ってないんですよね。ゼロというと語弊がありますけれども、そういうお金は基本的に用意してないので、年会費の 10 万円をどこから捻出するのか、というような話からスタートしたという現状がまずあって、そういう意味でいうと、大学のスポーツ指導者というものを作らねばならない、ということが実は UNIVAS 設立の重要な課題でした。吉川審議役には申し訳ないのですが、そこが課題でありました。今はゼロベースからスタートするところなのかな、というのが一つ。もう一つ、一般的な経営層の方、理事長さんとかあるいは理事だとか、国立大学でいうと、学長さんだとか副学長さんの中で、残念ながら大学時代に運動部を経験した人が少ないという現実があるように思います。だから、管理職のお立場から、興味も関心も持って頂けるのだけれど、個人的なレベルでどうかというと、あまり関心・興味をお示しにならない方が意外と多い、ということも今回よく知ったわけです。

あとは、大学論という風に題した本・著書、高名な学者の先生方が書かれている本、試しに書店で手に取って、目次をご覧になって頂くと分かるように、大学スポーツの項目が出てくることは殆どありません。つまり、どうやら大学スポーツというのは言わば、隠れた存在という位置付けにされてきた部分がある。むしろ、それを表にどうひきだしてくるのかというところ、もっとネイティブなところでの課題が今、山積しているということ。その大きな理由はおそらく戦前のわが国の、いわば、専門学校もしくは旧制の高等学校あるいは、大正時代以降は大学、旧帝国大学といわれているところでは、おそらく学生さんそのものが非

常に少なくて、そしてまた経済的にも社会的にも恵まれた人達が多くて、その人たちがスポーツをやったものだから、むしろそこで問題になったのが、バンカラの問題がでてきたというのが主で現代の問題状況とはそもそも異質だと思います。

嘉納先生は私には大きな存在で、先ほどお話ししました「卓越性の相互追及としてのスポーツ」の考えは、嘉納先生が提唱された「自他共栄」「勢力善用」の嘉納先生の思想から多くを学んだものです。

吉川：それでは他の先生いかがですか。北川先生何かありませんか。

北川：友添先生の話と噛み合うか分からないのですけれど、競技スポーツを考えていって、そこに学生スポーツに指導者はいるのか、という風に考えると、私もコーチと教育者、要するに、二つ分けられると思うんですね。嘉納治五郎先生は、明らかに教育者という側面を、すごく持っていた人であると思うんですね。今の大学スポーツの監督・コーチっていうのは、特に勝利を目指している大学というのは、監督・OB というのは「勝て、勝て、勝て、勝て」ということだと思うんですね。だから、授業にもでなくていいけど、とにかく練習しろ、ということになります。私がどうも気になったのは、では、学生本人はどうしたいのだろうか。それを断れる環境にあるのかないのか、もし自分は授業なんか出なくてもいい、スポーツだけやっていればいい、というのであれば大学なんて来なければいいんですよ。本当は。普通に早くプロになればいいし、それほどの力がなかったら、それは諦めるしかないと思うんですね。ただ、先程のアンケートを見ると、大学が、人間的な成長をスポーツと共に求めているんだったら、やっぱりちゃんとした、教育者としての監督みたいな人が本当はいるべきなんだけれど、そんな人材はいない。やっぱり大学が責任を持って、そこをやらなくてはいけないのではないか、という風に思います。

吉川：力強いお話ありがとうございます。大学の責任として受け止めるべきであるとのことです。細越先生、何かありますか。

細越：私も直接噛み合うか、ちょっと分かりませんが、先だって学内のある会議に出させていただいた時に、運動部に入っている学生さんについて「運動を一生懸命頑張っている子って弱音を吐けないんですよね。」という意見がありました。恐らく今日の話もそうなんですけれども、適切に自分の想いとか現状を共有できる環境があるのか、というのがすごく重要なことだと思いますし、今の指導者の話や、スポーツ環境のところに繋がってくるかと思うんですけれども、ぜひそんな学生さんの声を、我々は今回のプログラム・プロジェクトを通しながら、聴き取って、いい方向にいくように考えていきたいなと思っているところです。ちょっと意見というか、感想だけですけれども。

吉川：増井参事官には、先程の素晴らしい図解の、右側の斧を持った人から、どうやって左側のじょ

うろを持った人間に変えていくのか、そこをお尋ねしたいんですけれども、何か構想はありますでしょうか。

増井：そうですね。先程の画で、別に木を本当に切り倒そうという意味ではなくて、彼にとっては良かれと思ってやっていることなんですけれども、結果的にそれがアスリートにとってマイナスになっている部分もでてきていると。あとは、個人的に思うのは、日本人はどうしても、先輩とか偉い人に従って成長していくという、昔からの日本人のメンタリティというか、自分で何か解決していく、ボトムアップで何か課題を解決していこう、という合理的な手法というよりは、上の人が引っ張って、色々な指導を受けながら成長していくというスタイルがあります。実はトップアスリートと呼ばれている人達でも、本人も気付かない能力とか資質を指導者が見出して、時折お尻を叩くではないですけれども、「頑張れ頑張れ」と言いながら、引っ張ってきた部分もどうしてもあるのかなとは思います。ですから、なかなか根深い問題というか、右側が悪で、左側が正しくてと、全て全面的に完全にシフトしなければならないという、単純なものでもないような気がして。もちろん、そこに向かっていくということは重要だけれども、ある程度、指導者のリーダーシップというか、コーチの指示というものも、当然アスリートの成長にとって、不可欠なものである部分もあったりするので、なかなか転換できるものでもないなと思います。でも、やっぱり徐々にそういう方向へ向かっていかないと、これからの時代、アスリートさんも付いていけないし、学生さんも今SNSとか色々な発信の形態も持っていますし、国際的な科学的なトレーニングというところも出てきていますので、日本の教え方というか、指導の在り方というのも、流れとしては変えていかなくてはならないのかなと思います。ただ、時間は掛かるかなと思います。UNIVASの役割としてはそこにしっかり焦点を当てていくということになるかなと思います。

吉川：ありがとうございます。では会場の方からもコメントなどをいただきたいと思うのですけれども、他の大学から来てらっしゃる先生方いかがでしょうか。

友添：実はいくつか調べたことがありまして、多分皆さんも、皮膚感覚でわかっているとは思うのですが、強豪校の監督さんはかなり高いレベルで競技成績を残さないと、つまり勝ち続けないと監督が代わっていくんです。これ、非常に相関が高いということですね。国士舘大学さんとかいくつかの体育・スポーツ系学部等のある恵まれた大学というのは、監督さんが大学の先生、つまり正式な大学の構成員である、これは少ない例であって、ほとんどの場合は、大学の構成員ではない方たちが実は監督さんをやっています。。ただ、強豪校に関して言えば、専任の監督やコーチを置かないと勝てない時代が来ている。パートタイムの監督・コーチでは実は勝てないんですね、現実的には。この監督・コーチを雇うのだけれども、彼らも私がさっき示した図でいうと結果主義を求められている。つまり、勝たないと自分の職業は終わっていくし、勝つことにおいてまた次のランクの高い大学、強豪校の監督になっていく構図が日本の大学スポーツの構図だと思います。そして最終的にはプロの監督。特にサッカーなんかはその傾向が出ていますけれども、こういう構造があるというのを理解しておく必要があると思います。その中で、大学の正規の構成員のポストをしっかり考えていかなければいけない時期に来ている。歳に応じて、客員准教授、あるいは客員教授、客

員講師。但し、その採用する時にいわゆる、「コーチング」プラス「コーチャー」としての能力以上に「ティーチャー」としての能力・資質をしっかり確認していかなければいけない。その資格・資質の一定基準を、例えば UNIVAS が設定をしていく中で、指導者育成を他方でやっていく。こういう構造の中で指導者の質的向上を果たしていかなくてはいけないのではないかということを考えてきました。

増井：まさに友添先生のおっしゃる通りで、UNIVAS に加盟している大学は 222 ということですけれども、首都圏の私立のバリバリの強豪校も、もちろんあるんですけれども、結構な割合が、地方の公立大だったり、私立大学だったり、必ずしも、強豪校ではないんです。でも、学長さんたちの想いとしては、スポーツで頑張っている学生がいるから、そこを応援してあげたい。でも、お金もないし、指導者も雇えない。というか、指導者・コーチがそもそも誰なのかすら、把握できていない。外の人が教えて、変わっていって、全く雇用契約もないまま、賃金の支払いがどうなっているのかすら、全くブラックボックス化している状況なんですね。でもやっぱり、スポーツで頑張る学生がいるから何とかしてあげたい。という想いで UNIVAS に入ってきている。ここに対するアプローチと、今、友添先生がおっしゃったような、強いところの監督・コーチというのはかなりグラデーションが、レイヤーがかなり違ってくるので、そこはアプローチの仕方がおのずと違ってくるのかなという風には思います。

細越：今の話を伺いまして、私は体育科教育学、スポーツ教育学の領域の研究をさせてもらっていますので、どちらかというと教師教育の内容に触れることが多いんですね。それで、今の学習指導要領でも、習得・活用・探求型の授業をそれぞれ、先生方ができますかというような話が出てきたりします。そうすると私の頭の中では、例えば、競技スポーツの場合は、コーチの方が、習得型の指導・活用型の指導・探求型の指導について、どんな風なイメージを持っているのかな、という様な頭になっていきます。コーチエデュケーションとティーチャーエデュケーション、それぞれに特性があると思いますけれども、先生方、海外の情報とか、あるいは今お考えのところでもいいんですけれども、コーチエデュケーションとして、やっぱりここは押さえたいなというような、そんな項目・カテゴリーなどそんなのがあれば是非、知りたいなと思いますけれどもいかがでしょうか。

友添：コーチングペダゴジーとか、ティーチングペダゴジーとか、コーチ教育だとか、あるいは教師教育だとかいわれているものですけれども、日本スポーツ協会の中では、コーチデベロッパーという、コーチを育成する人達を育成する教育にシフトを変えてきた。それで、コーチャーとしてどう育てていくのかを教える人達の育成を一生懸命やりだしている。それと同時に、実はコーチングとティーチングって今まで対立する概念で捉えられてきたのだけれども、実はそうではなくて、お互いに共通する部分って非常に大きい、多いし、

尚且つ、お互いに学びあうところが多い、つまりそれは、人間主義という人をいかに大事にしていくのか、あるいはアスリート・生徒と同じような関わり方・問いかけをしていく、あるいはその時に、実際の指導の方略を作っていくと言われている。そこに日体大の近藤先生がいらっしゃるので、お詳しいと思いますので、もしよかったら。

近藤（日本体育大学）：日体大の近藤です。今日は発言しないようにしようかと思っていたのですが、ご指名がありましたので、発言させていただきます。

現在、日体大の方では、伊藤雅充教授、それから阿江通良教授らを中心に、様々な形でコーチングの研修会をやっております。来週も木曜日、教授会の後に全ての運動部の顧問の先生方を両キャンパスに集めて、コーチングに関わる内容の研修会を行います。これは、定期的にやっておりますし、他にも、例えば若手を中心にミーティングの持ち方、あるいは女性アスリートをどういうふうに指導していくのか、という研修会を定期的にやっております。それから、具志堅学長がロサンゼルスオリンピックの体操競技の金メダリストですので、トップアスリートで活躍した人達を出来る限り、専任教員として雇いたいと考えています。ただし、その時にやみくもに誰でもいいわけではなくて、人格的にしっかりとした人、そして、その人達を今度は、大学院にアクセスできるようにして、学問をしっかり身に付けさせて、教員として雇う仕組みを作りたい、ということに取り組まれております。反体罰、反暴力宣言を出している大学ですので、日体大が変わらないと色々なところが変わっていかないだろう、というような自覚をもとに色々なことをやっている次第でございます。

北川：色々聞いていると、結局、勝利をどう位置付けているのかというところですね。ここは大きなポイントだと思うんです。学生は当然勝ちたいと思っている。でもさっきの話だと、結果が出ないとコーチ・監督が代えられていっちゃうっていうのも、その代える権限は大体のパターンで大学はもっていなくて、結局 OB の力とか OB の話し合いで代わっていくわけですよね。そこで、最優先されるのが勝利だったりするから、結局全てを練習・競技にかけろ、という方向になって、そうすると、先程言われたような、学生のバランスのとれた勉学両立した大学生の成長、というのは当然望めなくなっていくわけですよね。では、どうしたらいいのか、なんでもかんでも勝てばいいということではなくて、もう少しルールを各大学で、これは UNIVAS も考えていると思うんですけれども、それこそ NCAA のように、この時期からこの時期は練習してはいけないとか、年間の練習時間数を定めるとか、国立大学も私立大学も同じリーグだったら同じようにするとか、そういうことに取り組んでいかないと、結局、なんでもいいから練習ばっかりして、勝てばいいんだというようになっていくと、先程言ったような目的は当然果たせないと思うんですけどどうでしょう。

友添：UNIVAS の理事としてお話すると、学業の

委員会が作られていて、その中で基準単位を作って、その基準単位に達しなければ、勧告、まず学業に専念しなさいということで、大学にフィードバックをして、それでも最低ラインを割れば、対外試合の禁止をして学業に専念する。その時の学業に専念するヘルプを UNIVAS からしていく、ということが一つ考えられているわけですけれども、ただ、現実論からいうと、これに対する拒絶反応は各大学さんかなり強くて、それをやるのだったら、UNIVAS から脱退してもいいっていうような、ところもあるんですね。早稲田大学ではその基準をしっかり設けて、文武両道ということを徹底してやってきた歴史があるわけですけれども、ここが一つ、UNIVAS が上手くいくかどうかの重要な分かれ道だろうなと思っております。

北川：その抵抗が強いというのは大学ですか。それとも体育会ですか。競技団体でしょうか。

友添：増井さんどうでしょうか。大学と考えていいと言いたいけれども、出てきている委員の方々が、まずそうであったということと、アンケートで調査をしようとしているのだけれど、アンケート調査に関しても少し抵抗があると。ただ、別の意も実はあります。学業を調査する時、個人の特定が必要になってくる。学生の A さんはどれくらいの単位しかとれていない、まさに個人情報を公的な第三者機関ではない、UNIVAS という特定の財団法人に出すことに対する抵抗感。これももちろんよく分かるというところもあります。

北川：でも、そういうことをやらなければ、結局 UNIVAS を使っての改革は進まないだろうなというのが私の感想です。増井参事官のお話しが必要かと思いますけれども、そんなに数を多くしなくても、意識の高い大学だけを集めて、最初はやるべきじゃないかなと私は思ってたんですけれども。

増井：学業との両立に関しては、友添先生のコメントに補足しますと、私も当時立ち上げに関わっていた時に、色々な大学の学長さんと UNIVAS の加入について話し合いを持った中で、学業基準の導入について反対する理由のひとつに、いくつかあるんですけれども、まず、うちの大学は既にできています、できているから UNIVAS が敢えて統一の物差しを加盟する大学に当てはめるというのは勘弁して欲しい。そういう意見の大学もあれば、友添先生がおっしゃったように、学校の成績、個人の情報に関わるようなものを外に出す、ということに関しての抵抗感もありましたし、後は、評価の付け方が大学によって本当に甘辛がバラバラな中で、物差しをきちんと引けるのかどうか、そういうところのテクニカルな問題、技術的な問題を含めて、懸念を示される大学もあったので、一概にこれっていう感じでもないんですけれども。ただ、これに関しては、当時我々が、検討してた頃、UNIVAS の立ち上げに向けて、当然、学業との両立は本当に UNIVAS の創立の根幹に関わるテーマなので、時間は掛かるかもしれないけれど、加入した大学に対しては、少しずつ実験的に実証実験しながら、一歩一歩、歩み始めていかないといけないなという想いがあります。あと、

北川先生がおっしゃったように、アプローチの仕方として、できる大学、少数精鋭で立ち上げるという、そして、そこをモデルとして、良ければ色々な大学がどんどん入ってくるというアプローチの仕方もあるし、もう一つは、薄く広く、とりあえず一致団結して、大同小異あれ、同じ目標に向かって、みんなでまず入って、みんなで議論しながら、少しずつ良いものにしていこうという、ボトムアップのやり方もあるかなと思うんです。当時検討する中で、まずは、同じスタートラインについて、みんなで少しずつ、前進していこうと、そういうアプローチを取りましたので、色々な大学数・学連数が非常に多い状況かなと思います。

吉川：納得したかどうか定かではありませんが、学業基準に関しては、UNIVAS は基本的に進める方向だと受け止めています。また、国士舘も個人の名前は、もちろん提供することないですが、成績の分布状況などの調査に協力しているところです。個人の名前が晒されるというのは、もちろん如何かと思いますけれども、基準がないと、どれだけ単位を落としても、試合には出続けるということにもなります。そんな状態では、アメリカの NCAA からすると、日本の UNIVAS というのは一体何を考えているのか、と批判されるかもしれないですね。だから、増井参事官のおっしゃるように、これは多少時間が掛かっても、徐々に進んでいくと、こういう風に期待したいと思います。また、競技力だけ強くなれば大学生として嬉しいかというと、おそらく、ご父母も含めて、そういうことではないと思います。もちろん、世界一になってほしいということで応援しているご父母もいらっしゃると思います。しかし、大学生として、何も勉強しないで、何も身に着けずに卒業してしまった、ということになっては、残念に思われるでしょう。鎌田先生がおっしゃっていた通り、大学にとっても、非常にまずいことです。

■ 大学スポーツの今後について　パネリストとフロアの意見交換

吉川：それでは、残った時間で、UNIVAS の今後について、これまで出てこなかったような論点についても、もう少し議論してみたいと思います。UNIVAS については、去年の今頃から比べると、随分進んできたなと印象を持ちます。すでに加盟大学が 220 を超えているということですとか、色々ご苦労があるかと思いますが、スポンサーを集められて、財務もある程度の見通しを立てられていることとか、それから、学業基準の取り組みにも着手され、あるいは、安全安心の基準についても、これは国士舘が非常に重視しているジャンルですけれども、加盟大学へ具体的なサポートを始めるなど一歩踏み出されようとしています。スタートを切ったばかりでありますが、今後の展開が楽しみだと感じております。

ただ、それぞれの大学のスポーツに対する考え方が相当に違うという点は、UNIVAS の発展の制約条件になりそうです。最も進んでいると思われる早稲田大学にしても色々と問題があるようですけれども、国士舘でもスポーツプロモーションセンターという統括組織を作ってはいますが、運動部を統括しているというには程遠い状況でございます。UNIVAS の理想を探求するのであれば、大学のスポーツの統括組織、これをいかに機能強化していくかということが重要なポイントになるかと思います。また、統括組織がない大学について、どういう風に扱っていくのかという問題もあります。UNIVAS のスポーツ統括組織の形成、あるいは充実に関しての役割とかいった点も、議論いただければと思います。

UNIVAS について、鎌田先生は 15 項目のプログラムを挙げられて、懇切にご説明いただきましたけれども、UNIVAS として、例えば、10 年 20 年で大学スポーツ界をどんな風に持っていきたいのか、どういうビジョンを掲げて何を実現しようとするのか、共通理解が十分にないように思います。あるいは、それ故に UNIVAS に入らないと言っている大学もある訳です。今後のビジョンについて、あるいは、具体的に何をいつまでにどう進めるのか、というところについて、お考えがあれば、教えていただければと思います。

友添：UNIVAS の常務理事の筱﨑常務がいらっしゃるので、筱﨑常務が適任かと、突然で申し訳ないのですけれども。

筱﨑：ご指名ありがとうございます。実は、答えはすごく簡単でございまして、先程、会長の鎌田の話でもございましたけれども、大学を統括する組織が出来たのは、この 3 月 1 日なのですね。まだ、8 ヶ月 9 ヶ月しか経ってございません。大澤理事長の方からも、学長が集まった懇談会で何をやっているのかよく分らないとのご指摘を受けておりまして、我々としても当然、一定の回答を早急に出していきたいと思っているのですが、今日の議論にもあった様に、色々な問題が複雑に絡み合っておりまして、なかなかすぐにポンと出るような話ではないというのが、我々の理解でございます。皆さんも多分そういうご理解だと思うのですが。一つだけ言えることは、我々は、5 年 10 年 20 年経った時には、学生の皆さんが本当にスポーツに取り組めて、尚且つ、学業をしっかりと

できて、卒業した後もしっかり活躍できる様な世界を作っていきたいというビジョンを有しております。今のところはこのようにしか申し上げられず、非常に残念でございますが、そこに向けて15のプログラムを出しておりますけれども、全部が今後も必要かどうか、また新たに必要になるかもしれない内容も含めて、来年度の事業計画や収支計画を早急に決めていくことにしておりますので、もうしばらくお時間をいただきたいと思っております。あまり釈然としない回答ですが、これでご勘弁いただければと思います。

吉川：はい、分かり易いと言えば分かり易いですが、何を実現しようとする組織なのか、具体的にどう取り組んでいくのかという点については、どうも分かり難いのですが、北川先生何かあればお願いいたします。

北川：一番注目したいのが、やっぱり財源だと思うんですよね。大学側だって、AD をお金も人もあれば、どんどん作れると思うんですけれども、とてもそんな財源はないけれど、UNIVAS でそんな財源を生み出せるかというと、それもなかなか厳しそうな気がします。今日の鎌田先生の説明の中で、UNIVAS CUP というのを、やるのは知っていたんですけど、早稲田大学がトップだなんていうのは全然知らなかったです。こういうのも、世間では全然知られていないですよね。それで、財源として一体何が考えられるのか、というのをぜひ答えられたら聞いてみたいんですけれども。

筱﨑：ご質問ありがとうございます。今現在、財源となるのは三つございまして、一つは、加盟校・加盟団体からいただいております年会費 10万円で、これは254の会員しかございませんので2,500 万円程度となります。そして、二つ目が増井参事官に頑張っていただいており非常にありがたいのですけれども、国費と助成金となります。三つ目が、先程のパワーポイントでもありましたけれども、パートナーとの間でのパートナーフィーというものをいただいております。正直に申し上げますと、一番大きいのが、このパートナーフィーで、具体的な数字は申し上げられないのですが、今年度においても数億円規模で、我々の今後に夢を感じ大学スポーツの振興を進めていこうとされている企業と一緒にやっていくことになっております。まだまだ足りないです。先程お話しましたが、NCAA はどのくらいなのかと申しますと、約 1,000 億円なのですね。その 8 割の約 800 億円が放映権なのです。このくらい潤沢な資金がございますと、学業充実だとか安全安心とか色々なこともできてくると思います。もしかしたら、スポーツ施設の改善につながるようなお金もできるかもしれません。まさにそういったところを見据えて、我々、これからパートナーを開拓していく必要があると、そういう風に思っております。

北川：これは、勝手な意見なんですけれども、例えば NCAA の 800 億円というのはあれ、殆どがバスケットとアメフトですよね。アメフトは結構大学の方にお金がいっていて、NCAA には入っていないそうですね。そういうものをこれから開発していけるのかどうか、というところですよね。

例えば、UNIVAS CUP があまりにも世間に知られていないし、そういうところで、どう知恵を絞ったらいいのかなと、非常に難しいところですよね。

筱﨑：ご指摘の通りです。我々もまさに同じようなことを考えておりまして、一つキーになってくるものとしては、現在、学生アスリートに対して色々なサービスを展開しているのですけれども、その受け側となるアスリートのデータベースを構築することと考えております。情報を集約しコンディショニングの話だとか、チケッティングのサービスだとかも含めて、OB・OG、ファンも含め色々なサービスを提供することで収益を得る形も一つの方向性と思っています。それがうまくいくかどうかも含めて、まだ 8 ヶ月 9 ヶ月しか経っていない赤ん坊でございますが、これからしっかりと色々なことを行っていこうと思っています。期待を皆さんにお伝えするしかできなくて大変申し訳ございませんが、これから一つ一つ結果を出していくフェーズになっていくと思っています。

吉川：どうもありがとうございました。模索しながら前進をしていくしかないということだと思います。今後の UNIVAS について、増井参事官にお聞きしますけれども、皆で一緒に、の方針で進んだ訳ですけれども、この皆で一緒に、の中で、全く意識の違うものが入っている、これもまた事実なんですけれども、どうやってまとめていきますか。要するに、地方の国公立大学と国士舘ではスポーツに関する考えが全然違うんです、これは話し合っても、ああそうですか、というだけで、多分何も一致しないんですけれども、UNIVAS の中をグルーピングして、グループごとに統一性のある取り組みをしていくなど、何か戦略はありますでしょうか。

増井：スポーツ庁として、当時設立に携わった課程で色々議論になったのは、アメリカの NCAA も 1200 校ぐらいあって、強豪校からそれ程でもないところまでたくさんありますので、ディビジョンですとか、カテゴリーがいくつかあって、それに応じてお金の配分とかルールも違っているんですけれども、日本も仮に 220 から 300、400 と増えていった場合、みんなで共通の物差し、という訳にはいきませんので、ブロックごとにカンファレンスを設けるだとか、あるいは、ディビジョンみたいな話で、強豪校とそれ以外、といったグルーピングっていうのは、当時、設立時に議論した中では将来構想としてそういうのは出てきておりました。ただ、いきなり最初からそういうカテゴリー分けもないだろう、最初はとにかく皆さん入ってもらおうと、数もどのくらい集まるか分からない、ということから、今のところ、そういう枠組みは設けておりません。今後 UNIVAS の中で、加盟校とか学連数が増えてくれば、新しいやり方も検討されてくるのかなと思います。あとは、スポーツというのは、トップアスリートとか強豪校だけのものでは決してない訳で、スポーツで学生時代頑張りたい、それを応援したい大学は地方を含めてたくさんある訳で、スポーツに関わることによって得られる様々な成長、人間的な成長、そういったところを、しっかりやり易くしてあげる、インフラを作っていく、というところが UNIVAS の役割じゃないかなと思います。もちろんトップアスリートというのは、世の中的にもインパクトがあります。注目も浴びますし、大学の経営にとっても、ブランドという意味でも、すごくインパクトがあることだと思うんですけれども、トップアスリートというのは本当に一握りしかいない訳で、でも、スポーツをやりたいと

いう学生さんはいっぱいいると思うんです。やっぱりそういう学生さんが大学時代スポーツをやっていてよかった、という風に思えて、親御さんも UNIVAS に入っているこの大学だから、学業との両立もして、そして安全で、デュアルキャリアという視点で、きちんとキャリア支援までやってくれた、という風に喜んでもらえる様な統括組織になっていくというところで、広い視点で捉えていく必要があるのかなと思います。

吉川：もし何か会場の方からご発言があれば。

橋詰（大阪大学）：大阪大学の橋詰です。今日のお話のように倫理教育ということがあると、その裏側で倫理が外れてしまった場合に、ハラスメントだとか暴力、あるいは SNS への不用意な投稿などという問題が起きてくるんだと思われます。しかし阪大の総長も含め、UNIVAS に対して今のところはまだ深い興味を示されていないトップの方もいるようです。先のアメフト問題で失敗してしまった大学は危機管理対応が適切ではなかったと言われていますが、トップの方々に対して、スポーツで何かトラブルがあった時に、どういう対処をすれば上手に問題を解決できるのではないかと答えていくような問答集を UNIVAS が作成して、トップの方々を集めての会合のテーマにすることかができるのではないか 、というのが一つの提案です。

もう一つ。こちらは学生さん向けの話ですが、今、私は大学スポーツコンソーシアム関西の役員をやらせていただいており、その中で安全安心のワーキンググループに入っております。そこではメンバーになっているいくつかの大学に、過去 10 年間に運動部の学生さんが起こした事故や事件を全部洗い出して貰って、それに対してどういう処罰にしたとか、しなかっ たいう事例を集めております。そのような 具体的な事例があると、学生さんへの倫理教育の中で、「君たち、SNS でこういうことをやってしまうと出場停止になるよ」とか、 学生さんにとって非常にわかりやすく、重要な学習となるのではないか と思います。UNIVAS としては、そういうものを作っていくお考えがあるのかについてお聞かせ 願えればと思います。

吉川：友添先生お願いします。

友添：ありがとうございます。橋詰先生のご提案は誠に大切な観点で、まず、大学管理職層への研修ということも現状では手一杯なところがあって、これについても今後検討ということを、理事会でも議論しているところです。それからもう一点、例えば、大学スポーツの判例を早く作れ、というご意見を賜ったわけですけれども、これについても、実際に、様々同じような事をやっているにも関わらず、一方は訓戒だけで済み、他方は停学 2 ヶ月、あるいは、他方は無期停学と、これは非常に不公平が生じてくるので、これについても早急に対応していかなくてはならないだろうと、議論をしているところですが、筱﨑常務がお話しされたように、実は手一杯で、NCAA は実はこういう形のところの、統一的な規定を設けておりま

すけれども、向こうは100年かかって今があって、我々8ヶ月でここまで来たというところで、そこは先にやっていかなければならない、ということと、少し話は変わるんですけれども、橋詰先生はよくご存知だと思うのですが、世間一般ではNCAAを真似てこの組織、真似てという、実はこの方がキャッチーなものですから、やってきたんですけれども、実質的にはイギリスの大学スポーツのBUCSという、実はお金儲けよりも、学生の教育を重視しましょうという大学スポーツのマネジメントの仕方をやっている組織、どちらかというと、そちらの方を実際の組織構築にあたっては随分参考にしたように個人的には思っているところがあるということと、そこは日本の大学とイギリスの大学の数がほぼ似ているし、規模感も似ているし、アメリカの場合、圧倒的に大きいということと、もう一つ、アメリカに住まれた方みなさん感じると思うんですが、実は都会だけが非常に娯楽が多くて、少し離れると大いなる田舎で、何にも楽しみがないものだから、高校のハイスクールスポーツだとか、カレッジスポーツが唯一の地域にとっての楽しみであり、パスタイムですよね。時間を過ごすための重要な娯楽だという位置づけなものだから、その重みは、日本とアメリカの場合バックグラウンドが違うということ、接ぎ木しても実は上手くいかない、日本型の大学スポーツの組織をどう作っていくのか、というところを今模索中で、ただ色々な難問・課題が一杯ある中で、これからだと。ただ一つ大事なことは、最後に申し上げようかと思っていたのが、自分たちの組織を作っていくという意識が重要で、理事だけがやる、理事会だけがやる、委員だけがやる、というのではなくて、それぞれの加盟大学を含めて、全員で作っていく我々感というか、自分達の組織感というものがすごく大事な時期にきていると思います。

橋詰：ありがとうございます。先ほどの２番目について一つ言い忘れましたが、我々のワーキンググループにはスポーツ法学が 専門の２人の弁護士がおられるのですが、彼らの意見を聞くと、各大学が課すペナルティの重さもその基準も一定でないということです。厳し過ぎて選手のスポーツ権を奪ってしまう様なこと、 例えば一人の学生が犯したことに対して、連帯責任という形でチーム全員に「3ヵ月間練習禁止とか自粛」などというものの中には、法律的には訴えられたら逆に負ける可能性があるものが非常に多いんじ ゃないかということです。 この点はいかがでしょうか？

友添：ロシアのドーピング問題とよく似ていて、やった人はもちろん出場停止なんだけれども、潔白な人まで同時に出場停止という処分は、これは懲戒権の乱用ということの意識は十分に持っております。

橋詰：ありがとうございます。

吉川：ありがとうございました。日本的な処分の仕方はおかしいよ、という問題提起なんですが、ただ、そういうやり方で、規律を守らせるという意義はあるかと思いますので、時代に合わせたバランスの取り方がポイントになると思います。大体時間がきました。もし何か会場からあれば、一人くらいは可能であるかと思いますがいかがですか。よろしいですか。それではどうもありがとうございました。このシンポジウムは、スポーツ庁からの委託事業で行っております。申し訳ございませんが、委託者として、増井参事官の方からこのシンポジウムに関するご感想、あるいはこの席に居られる皆さんに対して、言っておきたいこ

とを最後にまとめていただければと思います。よろしくお願いいたします。

増井：今日はこのような場を設けていただきまして本当にありがとうございます。実はここに書いてある、スポーツ庁の委託事業、スポーツアドミニストレーター配置事業ということで、これまで3 年間 17 大学に助成を行ってきたんですけれども、やっぱりスポーツアドミニストレーターを置くことの重要性といいますか、UNIVAS っていうのはあくまで共通のプラットホームなんですね。そのプラットホームがこれから出す、色々な事業なりサービス・プログラムを大学側でしっかりキャッチして、学内展開する人を我々SA と呼んでいるんですけれども、こういう人が、大学内できちんとした権限なりポジションを与えられて、望ましくは、その一人の人ではなくて、AD 局というもっと組織的に置いていただければと思います。それだけ権限というか仕事の量も増える訳で、当然お金も掛かりますので、なかなか一概にはパッといかないんでしょうけれども、少なくとも、少しずつではあれ、スポーツアドミニストレーター的な人を、UNIVAS に加盟している大学であれば尚更ですね、どんどんどんどん増やしていって欲しいし、スポーツ庁としても、これは引き続き、来年度以降、予算でも支援していきたいなと思っております。また、SA 事業を受託した大学さんの成果報告会を、今年、シンポジウムという形でスポーツ庁でやったんですけれども、また来年もこういった企画をスポーツ庁の方でも、全国から受託した大学を集めた報告会みたいな形で、企画していきたいと思いますので、是非、機会がありましたら、そちらの方もご参加いただければと思います。今日は本当にありがとうございました。

吉川：それではどうもありがとうございました。私の方から補足することは何もございません。今後、今日の基調講演及び、シンポジウムについては、編集せずに YouTube によって配信することを考えています。また、全国の大学、特に UNIVAS 加盟大学は 200 を超えていますので、そういった大学の方々にも観ていただいて議論をしていただければと思います。では、御登壇いただきました先生方どうもありがとうございました。

■閉　　会

入澤　充
国士舘大学　副学長・教授

ご紹介いただきました、法学部の入澤でございます。本学でスポーツ法学を担当しております。

本日は日曜日に関わらず、多くの学生のみなさん、あるいは他大学からお越しいただき誠にありがとうございました。非常に盛況に終わったと思います。

鎌田先生のお話と各先生方のご講演、さらにディスカッションを聞いておりまして、本学、さらには慶應、早稲田の創設者が、共に「体育」が大事だということをおっしゃった、ということを知ることができました。国士舘大学の教員として、非常に意を強くしました。本学には建学の精神である「誠意」「勤労」「見識」「気魄」という四徳目がございます。この徳目は、本日のテーマである「スポーツ倫理教育」に、最もふさわしいものだということを再確認いたしました。

本学の大澤理事長は、「スポーツは勝つことが大事だ」とよくおっしゃっております。私はその意味は、「勝つことのプロセス」が大事だというように解釈しています。そして、本学名誉教授で剣道範士 8 段の矢野博先生は、「勝つことの中身を問い続けなければ向上は望めない」とおっしゃっています。

今後、スポーツ倫理教育を考えていく上で、大澤先生、矢野先生のおっしゃることが、その中心になっていくのではないかと改めて感じました。

私は、本日のシンポジウムで沢山のことを学ぶことができました。今後、私の授業でも本日のすべてのお話を活かしていきたいと思います。

本日はお忙しいところ、みなさんにお集まりいただき盛大なシンポジウムが出来たことを深く感謝いたします。これで閉会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

発行年月日　2020年3月19日
編集　国士舘スポーツプロモーションセンター事務室